長崎県鹿町町文化財調査報告書　第1集

大野台遺跡

— 重要遺跡範囲確認調査報告 —

1983

長崎県鹿町町教育委員会

長崎県鹿町町文化財調査報告書　第１集

大野台遺跡

— 重要遺跡範囲確認調査報告 —

１９８３

長崎県鹿町町教育委員会

表紙題字は鹿町町長川尻幸介氏
の筆による。

▲大野台遺跡 E 地点の遺構群　　▼同第 2 号支石墓

ご あ い さ つ

このたび，当町深江免にあります大野台遺跡の調査報告書を刊行することになりました。調査は，昭和57および58の二年度にわたり，国庫および県費の補助を得て当町が実施したものでありますが，その結果を調査報告書として世に出すことができますことを町民各位とともに喜びたいと思います。

調査を担当ねがった方々のお話しによりますと，大野台遺跡は五群からなる支石墓等の遺跡で，その規模は我国でも最大級のものであり，朝鮮半島南部のものに共通するものである由でありまして，遠く縄文時代の終りから弥生時代のはじめにかけて，彼我の間に密接な交流があったことが知られるのであります。また，県本土部でははじめての広形銅矛（どうぼこ）が出土するなど，きわめて重要な遺跡であることが知られるのであります。

昔から「温故知新（おんこちしん）」という言葉がありますが，過去をふりかえって将来の方針を見出す，という意味の言葉であります。私どもは，大野台遺跡を，ただ単に，古いもの，珍しいもの，としてのみ眺めるのではなく，遠い私たちの祖先のたくましい生き方と，丁寧に埋葬したやさしい心根を考える必要があると思うのであります。

そのような意味で，この誇るべき郷土の遺跡をどのように保存していくかについて，今後皆さんとともに考えることが必要でありますが，大野台遺跡のみならず，地下に埋もれた文化財は，一度こわされると，もとの姿にもどらないものでありまして，みなさんとともに大切に保存し，次の世代へと引き継ぎたいと思います。

この報告書が，遠い祖先の生きざまを学ぶ教材として，また，学術研究の一助になることを念ずるものでありますが，調査を推進された本町教育委員会の皆さん，そして調査をご担当ねがった県文化課の方々，終始御協力いただいた地元の皆さん方に深甚の敬意を表わして発刊のごあいさつといたします。

昭和58年10月1日

鹿町町長　川　尻　幸　介

発刊のことば

昭和57・58年度実施いたしました本町深江免所在の大野台遺跡に関する調査の結果を，報告書として公刊することになりました。大野台遺跡の一部については昭和42年に調査が行われ，報告書も刊行されておりますが，今回報告の主体でありますE地点は昭和56年度，土地所有者金崎与吉氏が発見されたものであります。同氏は，山林になっていた土地を開墾中に支石墓があることに気づかれ，当教育委員会に通報いただきましたが，これが端緒になって本報にあります調査が実現したものであります。

本文中にありますとおり，我国有数の規模をもつ大野台遺跡が世に出ることになりましたのは同氏に負うところが大であり，大野地区のみなさんの協力とともに忘れることができないところであります。地中の埋蔵遺跡は，一度こわされると，二度ともとの姿を見ることができません，こうしたことを考えるとき，文化財の保護は，行政の担当者や小数の専門家だけでは出来ないことに気づくのであります。

支石墓は，九州の西北部に集中的に分布し，韓国に源流をもち，我国の稲作農業のさきがけとなった人々の墳墓であるといわれております。この大野台の地に，そのような人々の暮しと永眠の場があったことを思うとき，大野台における往古の人々のたくましい姿と，死者をいたむやさしい心情を感じるのであります。私ども現代に生きる人間にとって，なにが必要か，を考えさせられる思いもいたします。

本書をお読みいただき，いささかでも文化財保護と学術研究に資することができますことを念じてやみません。

また，私が就任以来町民多数のご協力によりまして民俗資料約7,000点の収集をいたしておりますが，この大野台遺跡と併せ後世に伝える役割りが果たされるものと感銘深いものがあります。

最後になりましたが，調査の実施について御指導いただきました文化庁の方々，直接に調査を担当いただいた県文化課の方々に，調査に最大限の協力を賜った大野地区の皆さまに深い敬意と謝意を表して，発刊のことばといたします。

昭和58年10月1日

鹿町町教育長　小松屋　勲

凡　　例

1．本書は長崎県北松浦郡鹿町(しかまち)町にある大野台(おおのだい)遺跡の調査報告書である。

2．調査は遺跡の規模等を確認することを主目的とする確認調査であり，遺跡の保護顕彰を図る基礎資料を得ることを目的としたものである。

3．調査は，昭和57～58年度継続事業として国庫および県費補助を得て鹿町町が実施した。

4．調査は，長崎県文化課指導主事正林　護・同課文化財保護主事藤田和裕・同文化財調査員村川逸朗・同松尾泰子の担当によって実施し，松浦市教育委員会中田敦之の助力があった。また，県文化財保護審議会委員石丸太郎氏(考古担当)の指導助言を得た。鹿町町建設課の松本勝郎・同町教育委員会の小村政広の両氏には地形実測の面で協力いただいた。

5．調査後の整理作業・実測・写真撮影・報文執筆は上記の正林・村川・松尾の３名があたり，編集は正林・松尾が行った。本文の執筆は，Ⅰ～Ⅴ・Ⅷ～付を正林，Ⅶを村川・松尾が，Ⅵについては上記の３名が分担して行った。

6．報告中の図面と写真の縮尺については次のようにした。

○遺構（図面）20分の１
○土器・石器・青銅器（写真）２分の１
○土器（図面）３分の１
○石器（図面）剝片石器３分の２
　　その他２分の１
○青銅器（図面）２分の１

7．石材の鑑定は，長崎大学教授鎌田泰彦氏にお願いし，御教示いただいた。

8．本書関係の出土遺物と，図面および写真類は，10月現在長崎県教育委員会文化課が保管している。

9．表紙題字は，鹿町町長川尻幸介氏による。

本　文　目　次

頁

Ⅰ　大野台遺跡の地理的・歴史的環境 …… 3
Ⅱ　大野台遺跡周辺の地形と土層 …… 19
Ⅲ　調査にいたる経過と調査目的 …… 20
Ⅳ　大野台遺跡Ｅ地点の発見と昭和57・58年度調査の目的 …… 21
Ⅴ　調査の概要 …… 23
Ⅵ　遺構 …… 27
Ⅶ　大野台遺跡Ｅ地点表面採集の遺物 …… 117
Ⅷ　大野台遺跡諸地点の遺物 …… 131
Ⅸ　まとめ …… 133
付　大野台遺跡墳墓群の石材産地（予察） …… 144

挿　図　目　次

頁

第１図　鹿町町位置図 …… 1
第２図　大野台遺跡周辺図 …… 5
第３図　鹿町町内遺跡分布図 …… 9
第４図　大野台遺跡Ａ・Ｂ・Ｅ地点地形実測図（別添図）
第５図　大野台遺跡Ｅ地点の地形および遺構出土状況図（別添図）
第６図　遺構説明についての表記 …… 27
第７図　大野台遺跡Ａ地点地形実測図 …… 28
第８図　大野台遺跡Ａ地点　第１号遺構実測図 …… 29
第９図　第１号遺構周辺出土土器実測図 …… 32
第10号　第２号遺構実測図 …… 33
第11図　第３号遺構実測図 …… 36
第12図　〃　周辺出土土器実測図 …… 37
第13図　〃　周辺出土石器実測図 …… 37
第14図　第４号遺構実測図 …… 40
第15図　〃　周辺出土土器実測図 …… 40
第16図　第５号遺構実測図 …… 42
第17図　第６号遺構実測図 …… 43

第18図　第７号遺構周辺出土土器実測図 …… 44
第19図　〃　実測図 …… 45
第20図　第８号遺構実測図 …… 46
第21図　第９号遺構実測図 …… 48
第22図　第10号遺構出土土器実測図 …… 49
第23図　〃　出土石器実測図 …… 49
第24図　〃　実測図 …… 50
第25図　第11号遺構実測図 …… 52
第26図　〃　周辺出土土器実測図 …… 52
第27図　第12号遺構実測図 …… 54
第28図　第13号遺構周辺出土土器実測図 …… 55
第29図　〃　周辺出土石器実測図 …… 55
第30図　〃　実測図 …… 57
第31図　第14号遺構周辺出土土器実測図 …… 58
第32図　〃　実測図 …… 59
第33図　〃　周辺出土石器実測図 …… 62
第34図　第15号遺構実測図 …… 64
第35図　〃　周辺出土土器実測図 …… 64
第36図　第16号遺構実測図 …… 66
第37図　第17号遺構実測図 …… 68
第38図　第18号遺構実測図 …… 70
第39図　第19号遺構実測図 …… 72
第40図　〃　周辺出土土器実測図 …… 72
第41図　〃　周辺出土石器実測図 …… 73
第42図　第20号遺構実測図 …… 75
第43図　第21号遺構周辺出土土器実測図 …… 76
第44図　第21号遺構・第27号遺構実測図 …… 77
第45図　第22号遺構実測図 …… 79
第46図　〃　出土土器実測図 …… 81
第47図　第23号遺構実測図 …… 83
第48図　第24号遺構実測図 …… 84
第49図　第25号遺構実測図 …… 86
第50図　第26号遺構実測図 …… 87
第51図　第28号遺構実測図 …… 89

第52図　第29号遺構実測図 …… 90
第53図　第30号遺構周辺出土土器実測図 …… 91
第54図　〃　実測図 …… 92
第55図　第31号遺構周辺出土土器実測図 …… 93
第56図　〃　実測図 …… 94
第57図　第32号遺構周辺出土土器実測図 …… 95
第58図　〃　実測図 …… 96
第59図　第33号遺構実測図 …… 98
第60図　〃　周辺出土土器実測図 …… 99
第61図　〃　出土石器実測図 …… 99
第62図　第34号遺構実測図 …… 101
第63図　〃　周辺出土土器実測図 …… 101
第64図　第35号遺構実測図 …… 103
第65図　第36号遺構実測図 …… 107
第66図　〃　関係土器実測図 …… 110
第67図　〃　出土石器実測図 …… 112
第68図　〃　周辺出土石器実測図 …… 112
第69図　〃　出土銅矛片実測図 …… 113
第70図　第37号遺構実測図 …… 115
第71図　第38号遺構実測図 …… 116
第72図　大野台遺跡Ｅ地点表面採集土器実測図（１） …… 118
第73図　〃（２） …… 119
第74図　大野台遺跡Ｅ地点表面採集石器実測図（１） …… 124
第75図　〃（２） …… 125
第76図　〃（３） …… 127
第77図　〃（４） …… 129
第78図　〃（５） …… 130
第79図　石棺法量（長・短軸）計測図 …… 137
第80図　大野台遺跡Ｅ地点土器出土布分図 …… 138
第81図　大野台遺跡支石墓の主軸方向 …… 139
第82図　原山第３支石墓群の主軸方向 …… 139
第83図　小川内支石墓群の主軸方向 …… 139
第84図　長崎県内支石墓遺跡所在地 …… 142

表　目　次

頁
第１表　鹿町町内の遺跡 …… 8
第２表　大野台遺跡の規模 …… 25
第３表　長崎県内の大珠出土地 …… 111
第４表　大野台遺跡Ａ・Ｃ地点遺構一覧表 …… 134
第５表　大野台遺跡Ｅ地点遺構一覧表 …… 135
第６表　支石墓石棺形態分類 …… 137
第７表　長崎県内支石墓遺跡所在地 …… 143

図　版　目　次

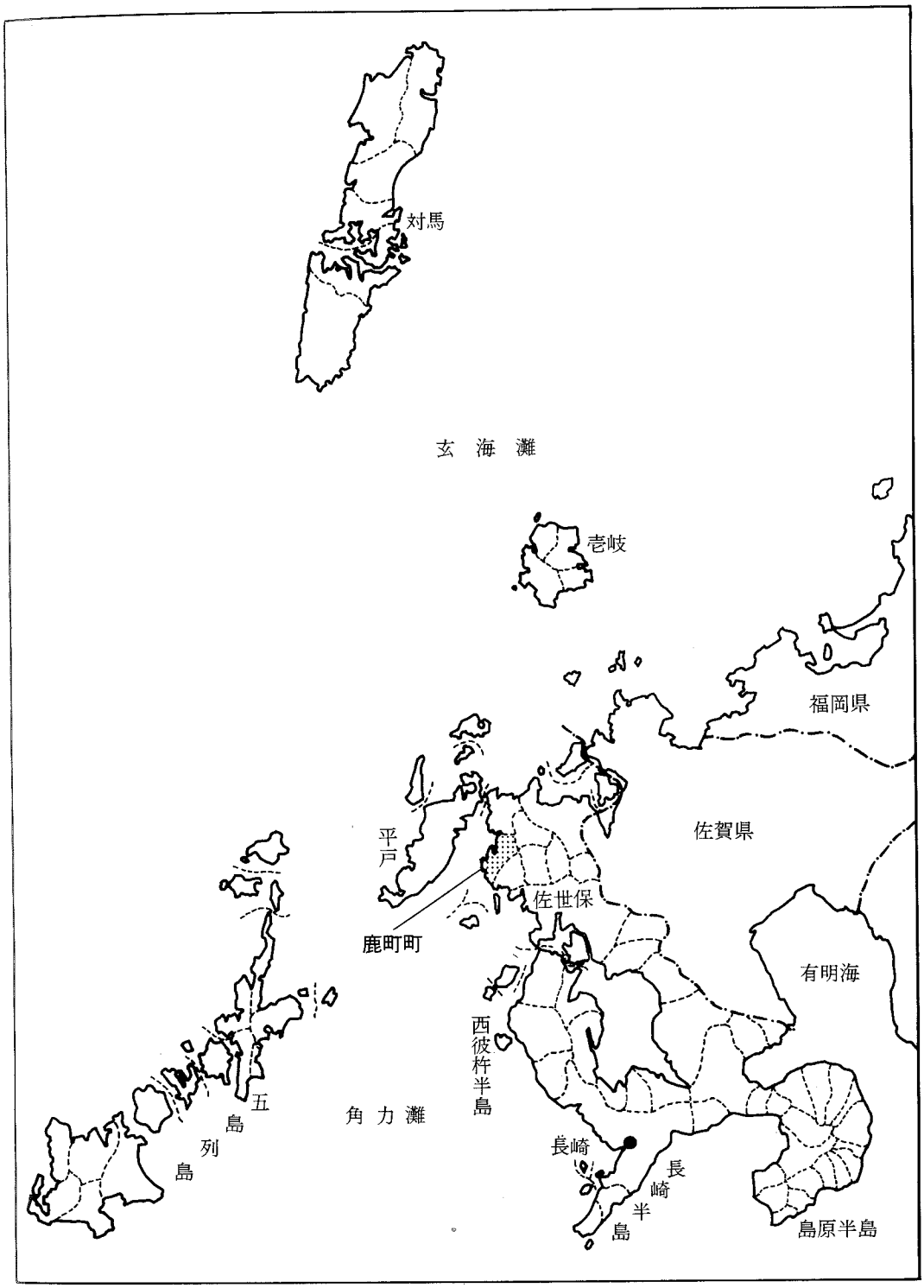
頁
ＰＬ．１　大野台遺跡遠望（西方向から） …… 2
ＰＬ．２　大野台遺跡Ｅ地点近景（東より望む） …… 2
ＰＬ．３　大野台遺跡の歴史的環境１（諸藤隆次氏資料） …… 11
ＰＬ．４　〃　２（故大浦久雄氏資料） …… 12
ＰＬ．５　〃　３（　〃　） …… 13
ＰＬ．６　〃　４（　〃　） …… 14
ＰＬ．７　〃　５（　〃　） …… 15
ＰＬ．８　〃　６（　〃　） …… 16
ＰＬ．９　〃　７（　〃　） …… 17
ＰＬ．10　〃　８（諸藤隆次氏資料） …… 18
ＰＬ．11　大野台遺跡Ｅ地点遺構検出状況 …… 26
ＰＬ．12　大野台遺跡Ａ地点第１号遺構 …… 29
ＰＬ．13　大野台遺跡Ａ地点石棺材 …… 30
ＰＬ．14　第１号遺構（西側から） …… 31
ＰＬ．15　〃　周辺出土土器 …… 32
ＰＬ．16　第２号遺構（上：西側から，下：南側から） …… 34
ＰＬ．17　第３号遺構出土チャート原礫 …… 35
ＰＬ．18　第３号遺構 …… 36
ＰＬ．19　〃　周辺出土土器 …… 37
ＰＬ．20　〃　周辺出土石器 …… 38

ＰＬ．21　第３号遺構周辺出土石器 …… 38
ＰＬ．22　第４号遺構 …… 39
ＰＬ．23　〃　周辺出土土器 …… 40
ＰＬ．24　第５号遺構 …… 41
ＰＬ．25　第６号遺構 …… 43
ＰＬ．26　第７号遺構 …… 44
ＰＬ．27　〃　周辺出土土器 …… 44
ＰＬ．28　第８号遺構（東から） …… 46
ＰＬ．29　第９号遺構（南から） …… 47
ＰＬ．30　第10号遺構 …… 49
ＰＬ．31　〃　出土土器 …… 49
ＰＬ．32　〃　出土石器 …… 49
ＰＬ．33　第11号遺構 …… 51
ＰＬ．34　〃　周辺出土土器 …… 52
ＰＬ．35　第12号遺構（東から） …… 53
ＰＬ．36　第13号遺構周辺出土土器 …… 55
ＰＬ．37　〃　周辺出土石器 …… 55
ＰＬ．38　〃　（上：南から，下：北から） …… 56
ＰＬ．39　第14号遺構周辺出土土器 …… 58
ＰＬ．40　第14号遺構 …… 61
ＰＬ．41　〃　周辺出土石器 …… 62
ＰＬ．42　第15号遺構 …… 63
ＰＬ．43　〃　出土土器 …… 64
ＰＬ．44　第16号遺構（北東から） …… 65
ＰＬ．45　第17号遺構（　〃　） …… 67
ＰＬ．46　第18号遺構 …… 69
ＰＬ．47　第19号遺構 …… 71
ＰＬ．48　〃　周辺出土土器 …… 72
ＰＬ．49　〃　周辺出土石器 …… 73
ＰＬ．50　第20号遺構 …… 74
ＰＬ．51　〃　出土チャート原礫 …… 74
ＰＬ．52　第21号遺構・第27号遺構 …… 76
ＰＬ．53　〃　周辺出土土器 …… 76
ＰＬ．54　第22号遺構 …… 78

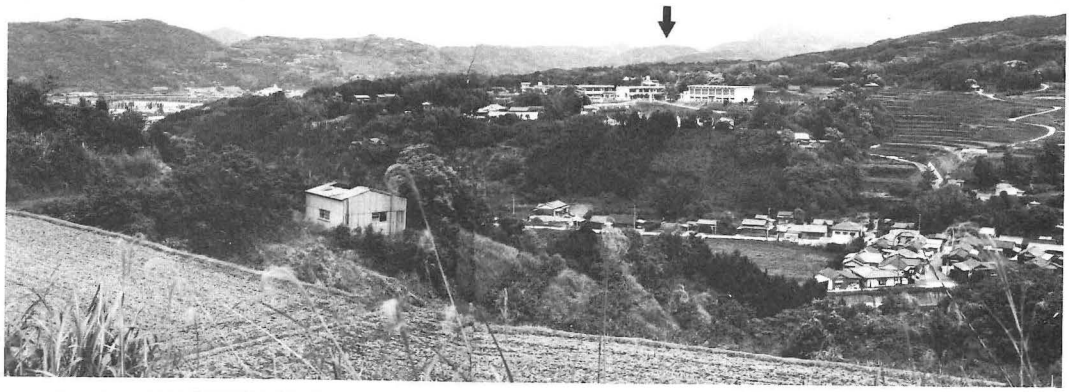
ＰＬ．55　第22号遺構出土土器 …… 80
ＰＬ．56　第23号遺構（南から） …… 82
ＰＬ．57　第24号遺構 …… 84
ＰＬ．58　第25号遺構（西から） …… 85
ＰＬ．59　第26号遺構 …… 87
ＰＬ．60　第28号遺構（西から） …… 88
ＰＬ．61　第29号遺構（東から） …… 90
ＰＬ．62　第30号遺構 …… 91
ＰＬ．63　〃　周辺出土土器 …… 91
ＰＬ．64　第31号遺構 …… 93
ＰＬ．65　〃　周辺出土土器 …… 93
ＰＬ．66　第32号遺構 …… 95
ＰＬ．67　〃　周辺出土土器 …… 95
ＰＬ．68　第33号遺構 …… 97
ＰＬ．69　〃　周辺出土土器 …… 99
ＰＬ．70　〃　出土石器 …… 99
ＰＬ．71　第34号遺構 …… 100
ＰＬ．72　〃　周辺出土土器 …… 101
ＰＬ．73　第35号遺構 …… 102
ＰＬ．74　第36号遺構銅矛片出土状況 …… 105
ＰＬ．75　〃　（南東から） …… 106
ＰＬ．76　〃　土壙検出状況 …… 106
ＰＬ．77　〃　出土土器 …… 108
ＰＬ．78　〃　出土土器 …… 109
ＰＬ．79　〃　周辺出土土器 …… 109
ＰＬ．80　〃　出土石器 …… 111
ＰＬ．81　〃　周辺出土石器 …… 111
ＰＬ．82　〃　周辺出土大珠 …… 111
ＰＬ．83　佐々町狸山支石墓群第３号支石墓出土の大珠 …… 111
ＰＬ．84　第36号遺構出土銅矛片 …… 113
ＰＬ．85　第37号遺構 …… 114
ＰＬ．86　第38号遺構 …… 116
ＰＬ．87　大野台遺跡Ｅ地点表面採集土器（１） …… 120
ＰＬ．88　〃　（２） …… 121

ＰＬ．89　大野台遺跡Ｅ地点表面採集石器（１）…… 123
ＰＬ．90　〃　（２）…… 125
ＰＬ．91　〃　（３）…… 126
ＰＬ．92　大野台遺跡Ｅ地点表面採集めのう原礫 …… 126
ＰＬ．93　〃　チャート原礫 …… 126
ＰＬ．94　〃　石器（１）…… 128
ＰＬ．95　〃　〃（２）…… 128
ＰＬ．96　〃　〃（３）…… 128
ＰＬ．97　〃　〃（４）…… 130
ＰＬ．98　〃　〃（５）…… 130
ＰＬ．99　大野台遺跡Ｅ地点の石器（故大浦久雄氏資料）…… 132
ＰＬ.100　大野台遺跡Ｄ地点の石器（諸藤隆次氏資料）…… 132
ＰＬ.101　〃　（故大浦久雄氏資料）…… 132
ＰＬ.102　〃　（　〃　）…… 132
ＰＬ.103　〃　（　〃　）…… 132
ＰＬ.104　大野台遺跡Ａ地点の石器（　〃　）…… 132
ＰＬ.105　大野台遺跡Ｄ地点の石器（　〃　）…… 133

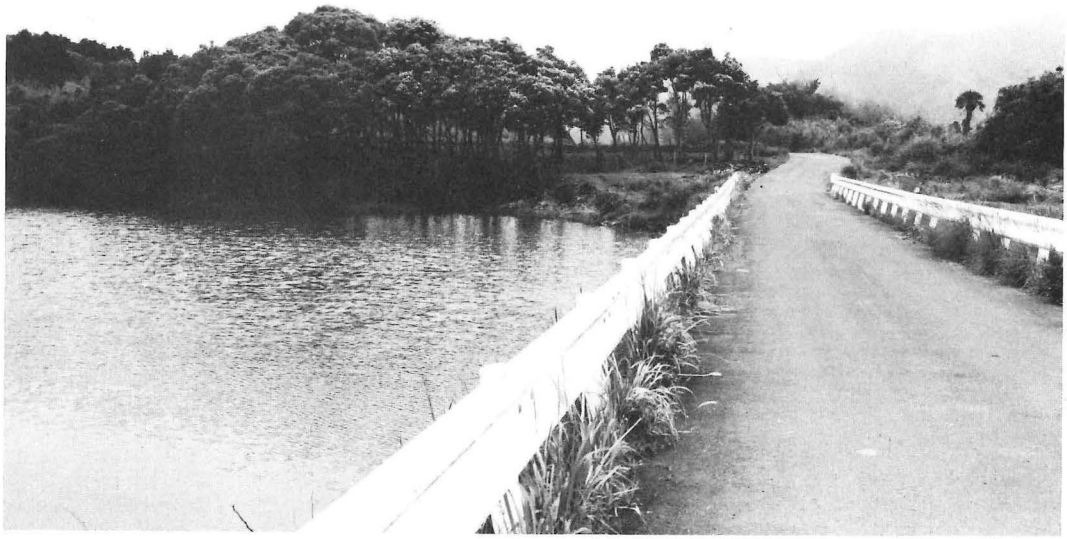
大野台遺跡周辺航空写真



第１図　鹿町町位置図



PL. 1　大野台遺跡遠望（西方向から）



PL. 2　大野台遺跡Ｅ地点近景（東より望む）

Ⅰ　大野台遺跡の地理的・歴史的環境

大野台遺跡は，長崎県北松浦郡鹿町町深江免にある。５地点からなり，それぞれ大野台遺跡Ａ～Ｅ地点と呼称している。「大野台」の呼称は，鹿町の北辺に深く湾入した深江湾に面する標高50～60メートルの高台の通称であり，５地点それぞれの地籍は次のとおりである。

Ａ地点（墳墓群）　深江免北平755―２
Ｂ地点（　〃　）　〃　南ノ股833―１
Ｃ地点（　〃　）　〃　〃　829
Ｄ地点（生活址）　〃　大野775―２
Ｅ地点（墳墓群）　〃　北平634
　　〃　〃635―１

鹿町町の位置・遺跡への交通

九州本土の西北部に位置し，北松浦半島の西海岸のほぼ中央部をしめている。町の西方海上約３キロメートルに平戸島（市）を望見可能であり，東辺は同郡江迎町に，南辺は同郡佐々町および小佐々町に接している。経度および緯度で示せば，東経129度33分～同38分，北緯33度14分～同18分５秒の位置を占めている。

鹿町町に至るには，佐世保駅から国鉄松浦線利用と，佐世保駅前からのバス利用があるが，いずれも約１時間北上して，江迎駅・バス停江迎で下車すればよい。江迎から大野台遺跡に至るには西方向に徒歩で約25分を要するがタクシー利用でも最低料金に近い金額で到達することができる。この場合，「鹿町小学校の裏手」ないし，「鹿町大野池」と告げるとよい。一方，福岡方面からの交通は，福岡・唐津間を地下鉄，東唐津駅・江迎駅間は国鉄急行「平戸」を利用すれば日帰り行程が可能である。

北松浦郡および鹿町町の地形

九州北西部を占める北松浦半島は広範囲に流出した溶岩によって覆われた溶岩台地であるが長年月の侵食作用による地形の変化が激しく，現在の山頂部や山裾に溶岩流の一面を見ることができる。一方，海岸線は沈降をくりかえし，複雑な海岸線と大小の島々による景勝を見せている。西海国立公園が「九十九島」とよばれる多島海を形成している所以であり，鹿町町の西海岸は北九十九島に属している。

一方，「北松玄武岩」は，節理の隙間に滞水し易く，北松浦郡一帯における地滑りの原因となっているが，豊富な湧水源は溜池として利用され，往古以来，人文界との深いかかわりをもっている。

鹿町町の地質・地形もこのような北松浦郡の特色のなかで理解することができる。鹿町町の

町域は，江迎川と佐々川で区分される山塊の北西斜面部分にあたり，平戸瀬戸側（西側）に傾斜している。したがって低平な沖積平野に恵れず，わずかに鹿町川の流域に狭長な沖積地を見るにすぎない。一方，鹿町町の海岸は沈降による複雑な海岸線と多くの小島を擁している。町の北部は，深く湾入した江迎湾に面し，鹿町川が北流して同湾に注いでいる。鹿町川の流域は狭長な沖積地になっているが，弥生時代の小海進を考慮すれば，江迎湾の支湾として，深く湾入していた可能性がある。江迎湾に流入した土砂の量が極端に少ない点よりすれば，この説を補強することができる。現在の鹿町川河口部は埋めたてられて「深江新田」（1806～1809年）となっている。

一方，鹿町町の山地は，町域の大半を占めている。高地面は緩傾斜をなしていて，自然の湧水を見るところが多く，平池（二ツ石池）・船ノ村池・宮田ケ原池等が標高200メートル地域に見られ，高原状の景観を呈している。これらの湧水地点は，台地面を形成する玄武岩溶岩と上部溶岩との間に，下部溶岩の風化層があって不透水層をなし，貯水が可能の状態になっていたといわれる。

大野台遺跡の歴史的環境（第3図，第1表，ＰＬ3～10）

以上略説した北松浦郡および鹿町町の地質形成は，古来，人文界に深くかかわってきている。鹿町町内における考古学的調査の例は少なく，昭和41年における大野台遺跡Ｃ地点の調査と本報の調査のみであるが，遺跡の分布状態は第3図に示したごとく比較的密である。町内における遺跡包蔵地の踏査と遺物の表面採集は，前町長大浦久雄氏を中心に古くから行われ，豊富な資料が故人宅および諸藤隆次氏（現，鹿町町総務企画課長）の自宅に所蔵されている。本報の大野台遺跡の発見も両氏に負うところが大きい。

鹿町町内における遺跡群の分布を眺めると，地形上3つの立地を示しているといえる。第一の立地は，町北部の大西山（225メートル）・町南東部の大観山（373メートル）・金比羅岳（348メートル）などの山地における高燥緩傾斜地形を挙げることができる。これら緩傾斜地には，湧水が見られ，現在溜池になっているところが多い。これらの溜池周辺には先土器時代からの遺跡が多く立地している。町の北西部に位置する宮田ケ原遺跡（第3図12）や，町南東部にある目暗ケ原遺跡（同図15）・二ツ石池遺跡（同図19）等の諸遺跡がある。これら高燥緩傾斜地にある溜池周辺に共通して見られる遺物は，九州型のナイフ形石器，切り出し形石器，彫器等の先土器時代の石器で資料数も最も多い。現時点では細石刃は稀少で，細石刃核は発見されていない。先土器時代遺物についで，各種の石鏃が多数見られ，石匙や打製石斧，掻器が伴っているが，目暗ケ原遺跡において太形凹文を施文し，胎土に滑石を混入した縄文時代中期土器片若干が見られる程度で，石器群の所属時期はかならずしも明瞭でない。時代は下るが須恵質の土器小片と，滑石製石鍋片が目暗ケ原遺跡採集資料中に見られ，高燥緩傾斜地において，中世に至るまで，なんらかの人間の営為が行われたことは確実で注目に値する。

第2図 大野台遺跡周辺図

縮尺一万分の一

鹿町町内諸遺跡のうち，第二の立地は，海岸部であり，特に町北西海岸部において顕著である。江迎湾口に面する海岸には下り松遺跡（第２図１），泻脇遺跡（同図３），黒崎遺跡（同図５），歌ケ浦遺跡（同図８）などがあり，豊富な表面採集資料がある。

下り松遺跡は，潮干帯にある遺跡であり，現存資料は干潮時に汀線から採集されている。故大浦氏の資料として数百点におよぶ土器片があり，うす手の鉢形土器で，胎土に滑石粉末を混入し，刺突列点文と細線刻文を単独もしくは併用して複雑な幾何学的文様を描いている。縄文前期の九州西半部の海岸線遺跡に顕著な，いわゆる曽畑式土器であり，石匙，石斧，凹石等の石器を伴っている。泻脇遺跡は，下り松遺跡の南方１キロメートルの海岸に面した遺跡で，太形凹文土器と縦形および横形の石匙などが採集されている。黒崎遺跡（同図５）からは縄文時代後期土器片と石鏃，掻器等が採集されている。歌ケ浦遺跡は現状がかなり変容しているが，黒曜石製の石鋸１点が出土している。平戸瀬戸に面した鹿町町北西岸はこれら縄文時代における好適な生活の場であったと考えられるが，北九十九島の多島海を擁する鹿町町の南西部海岸は遺跡は稀少である。

鹿町町内の遺跡が立地する第三の地帯は，江迎湾口に面する町北部の低位丘陵域で，本書の大野台遺跡群（第３図11）や御堂池遺跡（同図10）などがある。大野台遺跡群および遺物は別項に譲り，御堂池周辺採集遺物には弥生式の壺形土器，蛤刃石斧，片刃石斧，敲石等がある。大野台遺跡および御堂池遺跡から見下す深江泻免および土肥ノ浦免の一帯は19世紀初頭に埋め立てられた場所であるが，かっては湿地の状態であったといわれ，弥生時代においては生産の場であり得たことも考えられる。

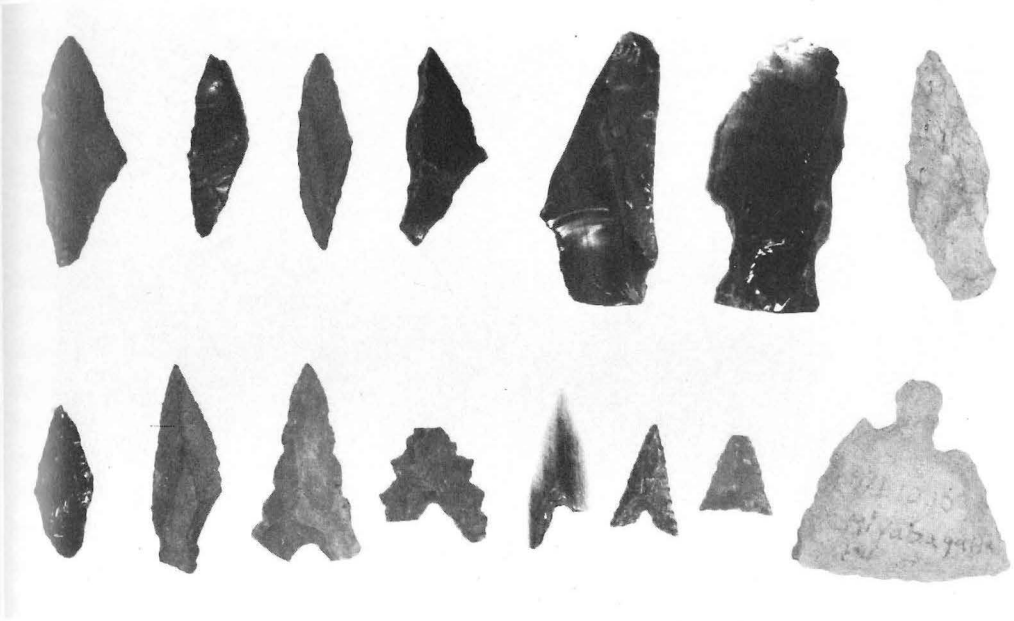
第1表　鹿町町内の遺跡

No	全国遺跡地図長崎No	遺跡名	種類	所在地	遺構・遺物	文献その他
1	22 — 17	下り松遺跡	散布地	鹿町町口ノ里免関里深月平	曽畑式土器，石匙石斧，凹石	
2	〃 — 18	関里〃	〃	〃〃関里	剝片	
3	〃 — 19	浮脇〃	〃	〃〃浮脇	縄文中期土器，横形石匙，縦形石匙	
4	〃 — 20	迎〃	〃	〃〃磯道	剝片	
5	〃 — 48	黒崎〃	〃	〃大屋免東星田・大西ノ下	縄文後期土器，石鏃，掻器	
6	〃 — 47	瀬尻島北側遺跡	〃	〃九十九島免瀬尻島	剝片	
7	〃 — 50	板ノ崎〃	〃	〃大屋免板ノ崎	〃	
8	〃 — 51	歌ケ浦〃	〃	〃下歌ケ浦免吉瀬	石鋸	
9	〃 — 78	褌崎〃	〃	〃長串免褌崎	剝片	
10	〃 — 24	御堂池〃	〃	〃深江免御堂山・田頭	弥生式土器，石斧片刃石斧，叩石	
※11	〃 — 21 22 23	**大野台遺跡（群）**	墓地他	〃〃大野 北平 南ノ股	支石墓，石棺，広形銅矛，土器，片刃石斧，石包丁他	小田富士雄「大野台遺跡」1974・本報
12	〃 — 49	宮田ケ原遺跡	散布地	〃口ノ里免宮田ケ原	ナイフ，切り出し形石器，石鏃，石斧，尖頭器	
13	〃 — 54	禅門岩〃	岩陰	〃船ノ村免久保	剝片	
14	〃 — 70	屋敷ノ元岩陰	岩陰	〃鹿町免屋敷ノ元	〃	
15	〃—60～66	目暗ケ原遺跡（群）	散布地	〃船ノ村免牟田原	ナイフ，石核，石鏃，縄文中期土器，石匙，石鍋，須恵器	
16		船ノ村池遺跡	〃	〃中野免盲目ケ原	ナイフ，石核，石鏃，石斧	
17	〃 — 52	上野〃	〃	〃上歌ケ浦免上野	剝片，ナイフ形石器，石鏃	
18	〃 — 53	大観山入口〃	〃	〃〃牟部蔓	ナイフ形石器，石核剝片，掻器，礫器他	
19	〃 — 80	二ツ石池〃	〃	〃〃二ツ石	ナイフ形石器，石核台形様石器，石鏃他	
20		深江氏館跡遺跡	居館跡	〃深江免中通・西原	空堀	
21		前田氏裏古墓	中世墓地	〃鹿町免大石	五輪塔・方形墓	
22		茗荷谷遺跡	散布地	〃〃茗荷谷	剝片	
23		瀬尻島南側遺跡	散布地	〃九十九島免瀬尻島	剝片，石錐他	

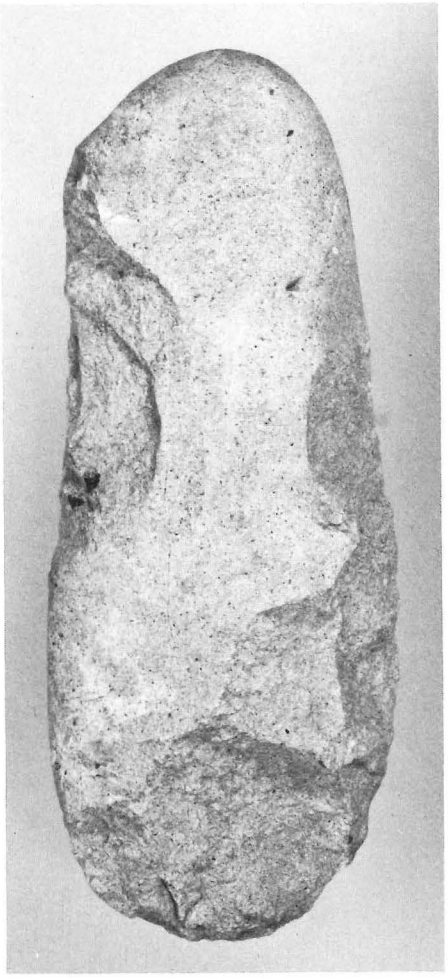
※大野台遺跡（群）は正しくは，A～F地点に分かれる。

第3図　鹿町町内遺跡分布図

PL. 3　大野台遺跡の歴史的環境　1　（諸藤隆次氏資料）



▲ナイフ形石器・彫器・尖頭器・石鏃・石匙

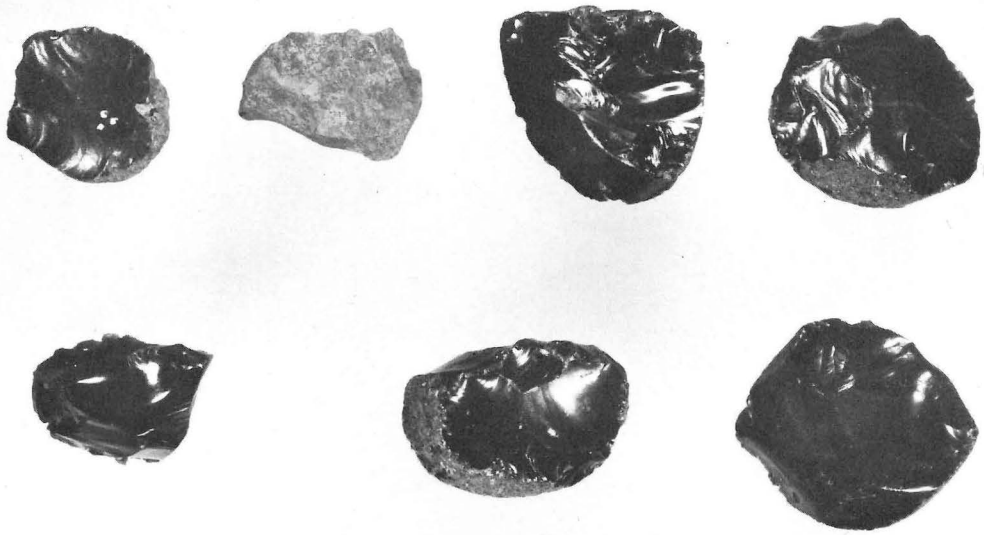


◀打製石斧（長さ18㎝）

宮田ケ原遺跡出土の石器

▲目暗ケ原遺跡の台形石器・台形様石器

▼同石核

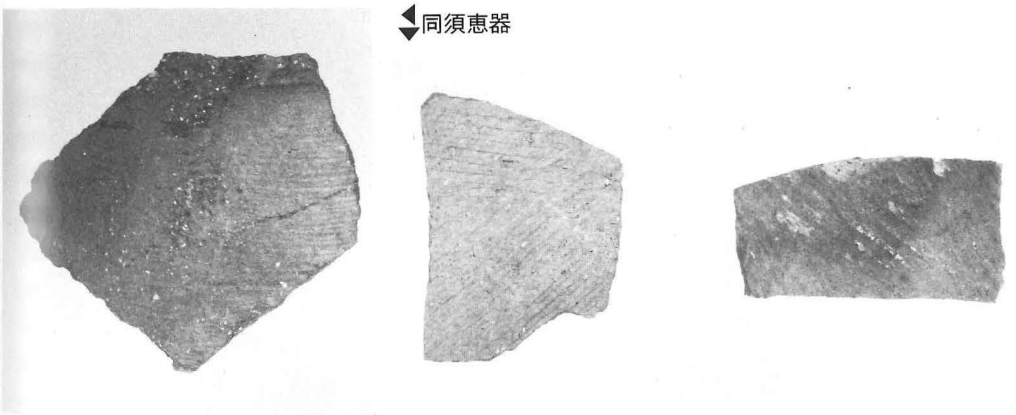


▼石匙形石器

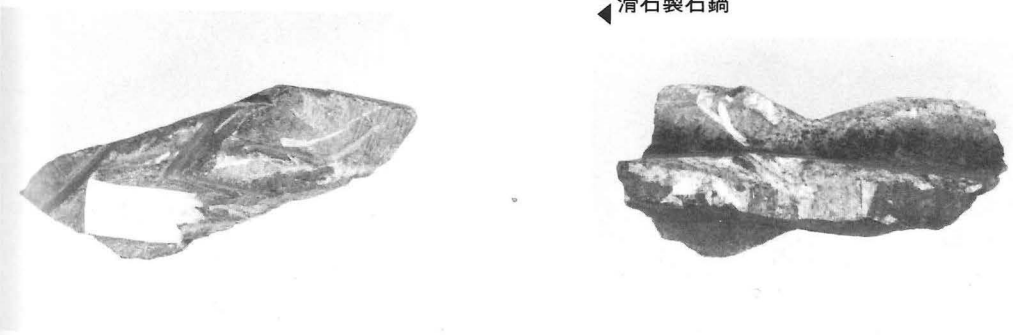
PL. 5 大野台遺跡の歴史的環境 3 （故 大浦久雄氏資料）

▲目暗ケ原遺跡の縄文式土器

◀▼同須恵器



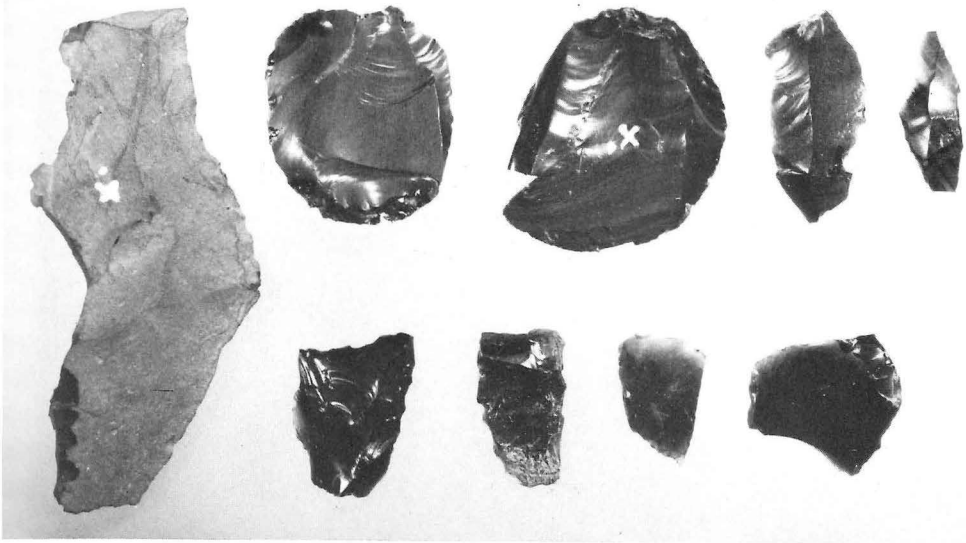
▼◀滑石製石鍋



▲二ツ石池遺跡の先土器時代石器

▲二ツ石池遺跡の掻器・剝片　　▼二ツ石池遺跡の石鏃

PL. 7　大野台遺跡の歴史的環境　5　（故　大浦久雄氏資料）

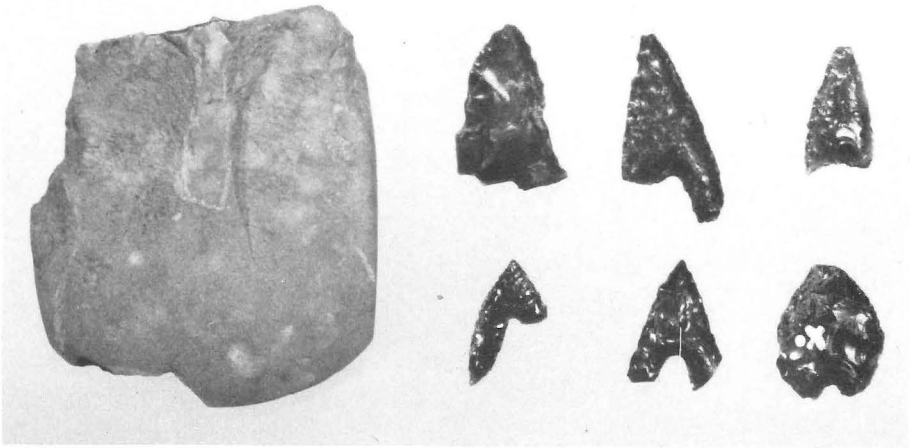


大観山入口遺跡の石器

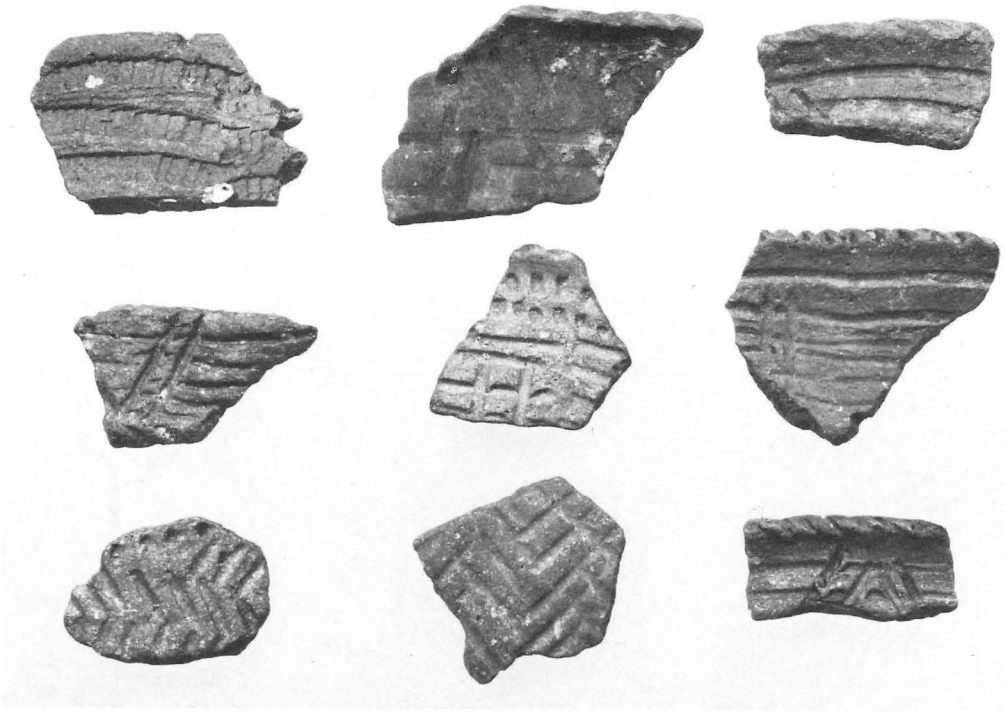
石斧と石鏃▼

▶礫器（左右9㎝）

▲掻器・ナイフ形石器（左端9.8㎝）



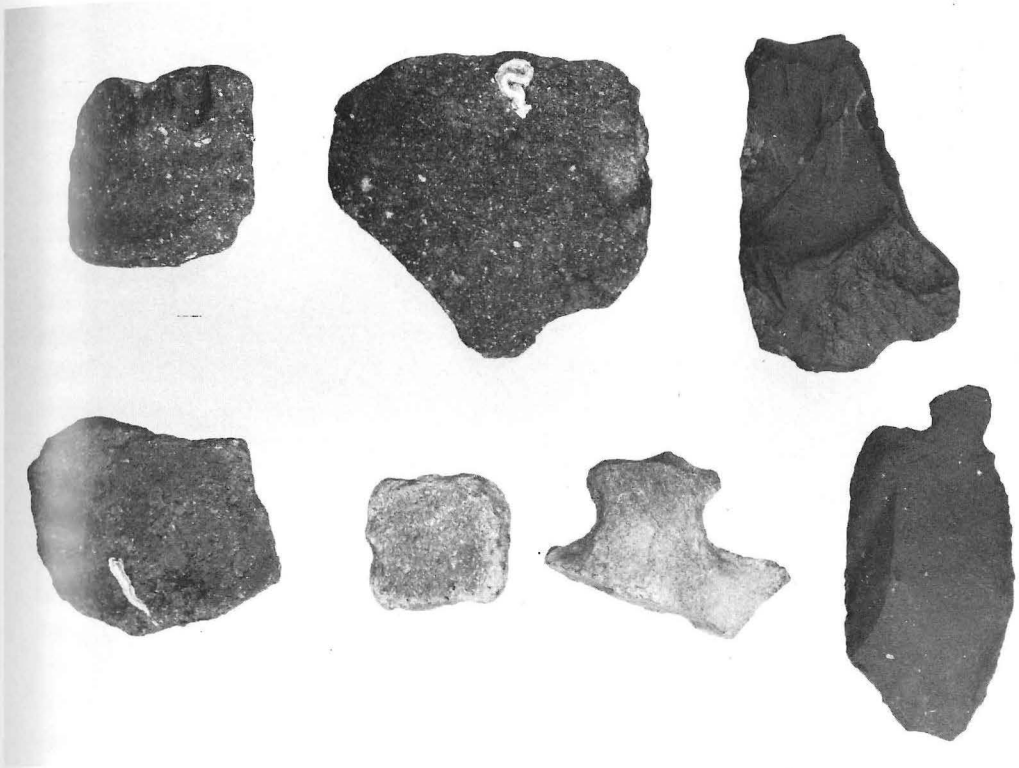
PL. 8　大野台遺跡の歴史的環境　6　（故　大浦久雄氏資料）



▲下り松遺跡の土器

◀石器

PL. 9　大野台遺跡の歴史的環境　7　（故　大浦久雄氏資料）



▲浮脇遺跡の土器と石器

▲黒崎遺跡の土器と石器

御堂池遺跡の土器

Ⅱ　大野台遺跡周辺の地形と土層

大野台遺跡・御堂池遺跡のある一帯は，鹿町町の北東辺，同町深江免にある。深江免は，江迎湾奥の旧湿地帯である深江泻免および土肥ケ浦免を見下す５～60メートルの丘陵部にあたっている。深江免の北および西の免境は急傾斜をなしており，旧海岸線で深江泻免および土肥ケ浦免に接している。深江免の北辺の免境付近には人工の溜池，御堂池があり，池に流入する沢の上方には三段堤といわれる溜池群がある。三段池の一つが大野池であり，大野池の南手は等高線の密な山地となっている。一方，鹿町小学校南手には急傾斜の沢が東方向にのびて，谷頭は三段堤のある谷頭にほぼ近くなっている。

二つの沢にはさまれた扇形の地域は，標高53～64ｍの緩い傾斜地になっていて，「大野」の集落があり，水田が多く営まれている。遺跡の名称は，この大野に由来して名づけられたものであるが，前述の二つの沢の外には遺物は殆ど認められておらず，大野台遺跡群は，現在の大野の集落と水田部分と重なった状態で成立していたと考えられる。

大野台遺跡周辺の地形は以上のとおりであるが，遺跡の全範囲は，鹿町小学校東手の水田から大野池に至る，東西約250メートル，南北約200メートルの地域を占めるものと考えられる。昭和41年に調査が行われたＣ地点（墓地）[註1]と，Ｄ地点（住居跡？）は，鹿町小学校の東手にある標高53メートルの地点であるが，昭和38・39年に損壊されたＡ・Ｂ地点は，Ｃ・Ｄ地点から50メートル程度東寄りの緩傾斜地にあり，標高60メートル弱を測る。Ｅ地点はＡ・Ｂ地点からやや東寄りの大野池西辺にあり60メートル余の緩傾斜地にある。

大野台遺跡をのせる丘陵地帯は北松玄武岩を基盤としており，地山の上面は風化と剝離が激しく，黄褐色の粘土質土層が広く見られる。この粘土質土層の上には茶褐色の土層が推積しており，最上層には赤褐色の土層が見られ，一部腐葉土層の見られるところもある。遺構を構築している面は，茶褐色土層の上面と考えられ，遺物の包蔵レベルと一致している。

註１．小田富士雄「大野台遺跡」大野台遺跡調査団　1974

Ⅲ　調査にいたる経過と調査目的

大野台遺跡については，本報にある調査以前にも多くの重要な知見と調査があった。年を追って略述すれば，次のとおりである。

昭和38年の知見（Ａ地点）

現在水田が営まれている鹿町町深江免北平755―2一帯は，大野台のほぼ中央に位置しており，大野台遺跡発見の端緒となった地点である。現在は水田が営まれているが，旧状は緩い傾斜をもった畠地で，ゴボウが栽培されていたらしい。昭和38年頃，畠地が削平され現在の水田になったが，この削平作業時に「板石を立てて，四角な箱形に組みたてたものが発見され，石蓋をしたものもあった」といわれる。数量は「20個あり，密集しており，その中の１個は，水田の畦の中に残っている。といわれていた。今回の調査で，畦畔に残っているとされる１基については，蓋石を失った，ほぼ方形の箱式石棺であることを確認した。

水田の南側を走る小路の片側に板状石が多数立てかけられており，土地所有者金崎与吉氏宅の一隅にも，方形に小口積みされた板状石多数があり，厚く祀られている。この石材の量は，Ａ地点の墓地の規模を十分にうかがわせる。現水田の畦畔断面には遺構埋設の痕跡を示す掘りこみが観察される。支石，撑石の存否については，関係者の記憶がなく，出土遺物についてもほぼ同様であるが，今次調査における関係者からの事情聴取によれば，石庖丁と勾玉が出土した可能性がある。これらの出土遺物は，出土当時に某氏が持ちかえられた由であるが，消息不明である。

昭和39年の知見（Ｂ地点）

Ａ地点南側に小路をはさんで，緩い傾斜地があり，雑木林と杉の植林のほか，一部畠地になっている。昭和39年，畠地造成作業に際して４基の石棺が発見され，２基は破壊されたが，２基（３，４号）については地元の人々によって発掘されている。３号は現存するといわれるが位置等不明である。４号については写真が残されており，方形に近い箱式石棺であったことが知られる。遺構は残されているといわれるが，位置等の確認は出来なかった。棺内から土器片が発見されており，縄文晩期終末の土器であったことが知られている。石棺の上には巨石がのせてあったといわれるが現存しない。深江免南ノ股833―1に所在し，豊島伸一氏の所有地である。

昭和41年の調査（Ｃ・Ｄ地点）

鹿町町深江免南ノ股829番地（所有者鹿町町）が当該地点であり，「大野台」の南西隅の位置を占める。

前町長大浦久雄氏（故人）によってすでに注意されていたもので，昭和41年12月17日～25日

の９日間，長崎県教育委員会（当時社会教育課担当）・鹿町町教育委員会・長崎大学（医学部解剖学第二教室　安中正哉教授・内藤芳篤助教授）の共催で正式の発掘調査が実施された。[註1] この調査によって，石棺８基と甕棺１基が発見され，縄文時代晩期終末から墓域の形成が開始されたことが指摘された。本遺構群の北辺に撑石状の巨大石材が発見されたところから，本遺構群が支石墓であった可能性が指摘された。

Ｄ地点は，Ｃ地点の北側に接する鹿町町深江免北平775―2（豊島義雄氏所有）を中心とする水田地である。昭和37年に地下げ工事中に多数の土器石器が発見されており，前大浦久雄町長（故人）宅，鹿町工業高校に保管（現存せず）されている。この地下げ工事の際には石棺等の埋葬遺構はなかったといわれている。

この調査時点までの大野台遺跡は，Ａ・Ｂ・Ｃの３墳墓群と居住空間の可能性をもつＤ地点の４遺跡からなっていたことになる。

註１　小田富士雄『大野台遺跡』大野台遺跡調査団　1974

Ⅳ　大野台遺跡Ｅ地点の発見と昭和57・58年度調査の目的

昭和56年３月，鹿町町深江免字北平635―1の山林地（金崎与吉氏所有）において農作業着手時に箱式石棺１基が発見された。農作業は直ちに中止され，鹿町町教育委員会に通報された。Ｅ地点発見の端緒である。鹿町町教育委員会は，同年４月13日遺跡発見届を県教育委員会に提出し，遺跡の取り扱いについて県文化課に意見を求められた。

昭和56年４月21～22日，県文化課正林　護は現地を踏査し，遺跡および遺跡取り扱いの方向について，提言を行った。提言の概要は次のとおりであった。

遺跡の概要について

(1)現地は，鹿町町深江免字北平635―1にあり，（踏査時点で）撑石の遺存するもの４，試錐によって箱式石棺の埋蔵状態が確かめられるもの６があり，全体として10基以上の支石墓の存在が予察され，大規模な遺跡であること。立地条件よりして，従前確認されてきた大野台遺跡Ａ～Ｄ地点と一連の遺跡と考えられ，大野台遺跡Ｅ地点と呼ぶのが相応であること。

(2)箱式石棺の形状が方形に近い長方形であるところから，古期のものである可能性があること。

(3)以上の遺跡規模，内容よりして第一級の遺跡である可能性があること。

望ましい遺跡取り扱いの方向について

(1)遺跡の保存顕彰の方向，たとえば史跡指定，整備公開が望ましいこと。

(2)そのための資料作りの方策として，遺構数の把握，遺構内容概況把握を主目的とした範囲等確認調査を計画する必要があること。

鹿町町は，町教育委員会を担当部局として，昭和57・58の両年度，国庫および県費補助を得て大野台遺跡E地点を中心とした確認調査を計画，実施した。調査期間は，昭和57年度において5月10日～同22日の13日間，および8月2日～同10日の9日間，昭和58年度において5月9日～同24日の16日間，2年度計38日間であった。

大野台遺跡の調査は前述のごとく，従前の知見をふまえて出発したものであるが，A・B・C各支石墓群との間に，墓域の変遷があるか否か，という問題意識があった。一方，遺跡の範囲等を早急に把握して保存対策の立案資料を得る，という行政目的もあった。かかる学術目的と行政目的は，一見矛盾するものであったが，**保存のための範囲確認→史跡として保存→学術調査と整備**という段取りを設定し，第1段階として実施したのが今回の報文内容といえる。

したがって，本報に見るごとく，撑石を起こし，下部構造まで調査完掘したのは1基のみで他は形状確認とその記録までに留めている。報文としては靴下掻痒の感はまぬがれぬが，近い将来に予定される史跡整備事業の中で詳細な調査が行われ，報文も刊行される予定であることを付記しておく。

本報にある報告内容は，前述のごとく，遺跡保存策立案の基礎資料であることを目的としたものであることを再述しておきたい。

大野台遺跡調査関係者（敬称略）

鹿町町議会

松原　勝（議長）・黒川日出男（副議長）

鹿町町役場

川尻幸介（町長）・松本広治（助役）・松田栄一（収入役）・松本勝郎（建設課　地形測量）

鹿町町教育委員会

小松屋　勲（教育長　調査総括）・諸藤隆次（昭和56年度事務局長　現総務企画課長）・森田三郎（昭和57年度事務局長　現財政課長）・山本春雄（事務局長）・山崎末雄（町郷土誌編纂委員長）・奥村　親（町文化財保護審議会委員）・山川征夫（社会教育主事　調査事務担当）・小村政広（町教育委員会　地形測量）

長崎県文化課

辻　寛（前課長）・辻田肥佐雄（課長）・中川和夫（前課長補佐）・園田　孝（課長補佐）田尻虎夫（総務係長）・橋口節男（前調査係長）・森　茂（調査係長）・正林　護（指導主事　調査担当）・藤田和裕（文化財保護主事　同）・村川逸朗（調査員　同）・松尾泰子（調査員　同）

調査地点土地所有者

金崎与吉（A・E地点）・金崎伊勢夫（E地点）

調査協力者

浜田　昭（町議会議員）・豊島勘四郎・金崎　勇・前田牧太郎・金崎秋芳・竹藤　実・磯本朝勝・中西三郎・吉村仁太郎・田中　勇・前田リキエ・豊島初代・佐藤喜一・豊島伸一・前田富行・金崎律子・豊島雪太郎・湯村利彦・湯村ウメノ・豊島タミ・中田敦之（松浦市教育委員会）　〔整理作業〕森山美保子・細田純代・本田邦子・吉田英子

V　調査の概要

大野台遺跡に関する昭和57・58年度の調査は，先述したごとく，遺跡の保存を先行させるための「範囲確認」を目的とするものであった。具体的な方法としては，遺構基数等の遺跡規模と遺構概況の把握を実施したものである。従って，各遺構の精細な発掘調査は，近い将来における環境整備事業の中で実施する，という当初からの計画であった。以下に報じる調査内容中，疑問はそのままに残し，遺構の実測，写真撮影等の記録が，完掘の状態を欠いているのはこのためである。

昭和57年度における調査

昭和57年５月10日～同22日の13日間および８月２日～同10日の合計22日間，Ｂ地点およびＥ地点について実施した。

Ｂ地点は，昭和39年，甘橘園造成に際して４基の石棺が発見された場所であり，第３号は現存するとされた深江免南の股833―1の地点である。かって発見されたという遺構の痕跡を求めたが，現状がかなり変っていて，位置確認に至らなかった。同番地の東手に続く植林地および雑木林についても，遺構の存在が考えられ，検土杖による試錐調査を実施した。その結果，遺構包蔵状態が予察される地点数箇所が指摘され，試掘調査は昭和58年度にもちこした。

Ｅ地点は，深江免字北平 635 ― 1 および 634 番地の山林である。昭和56年，新たに10基の遺構が発見され，従前の知見に加えてＥ地点の名称を付した地点で大野池西岸に位置する。昭和57年度においては，前記２地番のうち，635― 1 と 634 の一部について調査を実施した。発掘作業は，現地を５メートルの方眼に割りつけて実施した。発掘作業は先述の目的から最少限にとどめ，遺構の発見に主眼をおいて実施した。この年度内において確認し得た遺構は総数34基であり，このうち撑石を有する第14号については完掘し，下部構造が土壙墓であることを確認した。周辺の地形実測は 500 分の１で実施し，遺構の配置状況図を 100 分の１で別途作成した。遺構の実測は10分の１で作成した。

昭和58年度における調査

前年度の調査結果をふまえて，昭和58年５月９日～24日の16日間実施した。調査の対象としたのは，昭和38年，20基の石棺が発見されたとされるＡ地点，前年度の検土杖探査によって遺構の埋蔵可能性を指摘したＢ地点，およびＥ地点西半の部分である。

Ａ地点は，深江免北平 755― 2 ―帯の水田であり，Ｅ地点とＣ・Ｄ地点の中間にあたる。かっては緩い傾斜地であったが昭和38年に水田化のため削平された。関係者の記憶が鮮明で，20基の箱式石棺が発見され，１基が水田の畦畔に遺存するといわれた地点である（第４図）。畦畔の断面に水田化以前の土層が残されており，損壊以前の地形は南から北方向に緩く傾いていたことが知られた。調査の結果，畦畔中に玄武岩板状石を用いた箱式石棺１基を確認した。ただし，水田化作業に際して一部損壊されており，石棺の蓋石は失われ，南側の側壁材と西側小口材が失われていた（Ａ地点第１号遺構）。１号とは別に畦畔断面において土壙の切りこみ線が残されており，Ａ地点の墳墓群包蔵範囲は，南北約30メートル，東西約20メートルの広さを有していたらしいことが知られた。Ａ地点の東側の小径の片側には棺材が多数残され，土地所有者金崎与吉氏宅にも，多数の石棺材が方形に積みあげて祀られているが，十数基以上の石棺

材の分量であることからして，昭和38年当時の関係者の記憶の確かなことと，墓地の規模と位置が知られる（第４図）。

Ｂ地点における調査は，前年度の検土杖探査によって予察された５～６箇所について発掘調査を実施したが遺構を検出するに至らなかった。このことから，Ｂ地点における遺跡の規模は，昭和39年発見当時の４基にとどまるものと考えられる。

Ｅ地点の調査は，主として西半部（字北平734番地）の雑木林における遺構検出に重きをおいた。Ｅ地点は遺構遺物が他地点に比して多く，５メートルの方眼割りによって遺構遺物の把握を行った。方眼割りは，南北方向を北から順にＡ・Ｂ・Ｃ～Ｇとし，東西方向を西から順に１・２・３～10として，Ａ－１，Ｂ－３等の符号をつけた。

Ｅ地点における昭和58年度の調査においては，第35～38号の４基を検出し，２年度において確認した遺構数は38基となった（第５図）。

ここで，従前の知見と，昭和57～58年度の調査結果をまとめてみると，大野台遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅの４地点における遺構の数は次表のとおりとなり，旧状４群71基の墳墓遺構を擁していたことになる。

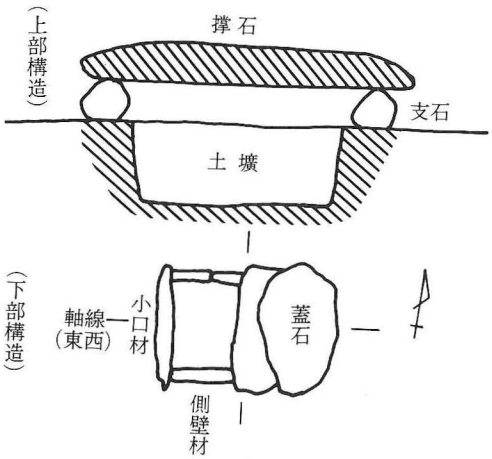
第２表　大野台遺跡の規模

地点	下部構造	発見時の状況	損壊された遺構の数	現存数
A	石棺	20	19	1
	甕棺			
	その他			
B	石棺	4	4	
	甕棺			
	その他			
C	石棺	8		8
	甕棺	1		1
	その他	撑石状巨石 1		1
E	石棺	32	1	31
	甕棺			
	その他	土壙墓１・祭祀遺構１ 積石墓１・不明３		6
計	石棺	64	24	40
	甕棺	1		1
	その他	7		7

PL. 11　大野台遺跡Ｅ地点遺構検出状況

Ⅳ　遺構

以下に，各遺構について述べることにするが，遺構各部の名称を，第６図のごとく統一して表記する。



第６図　遺構説明についての表記

大野台遺跡Ａ地点

第１号遺構

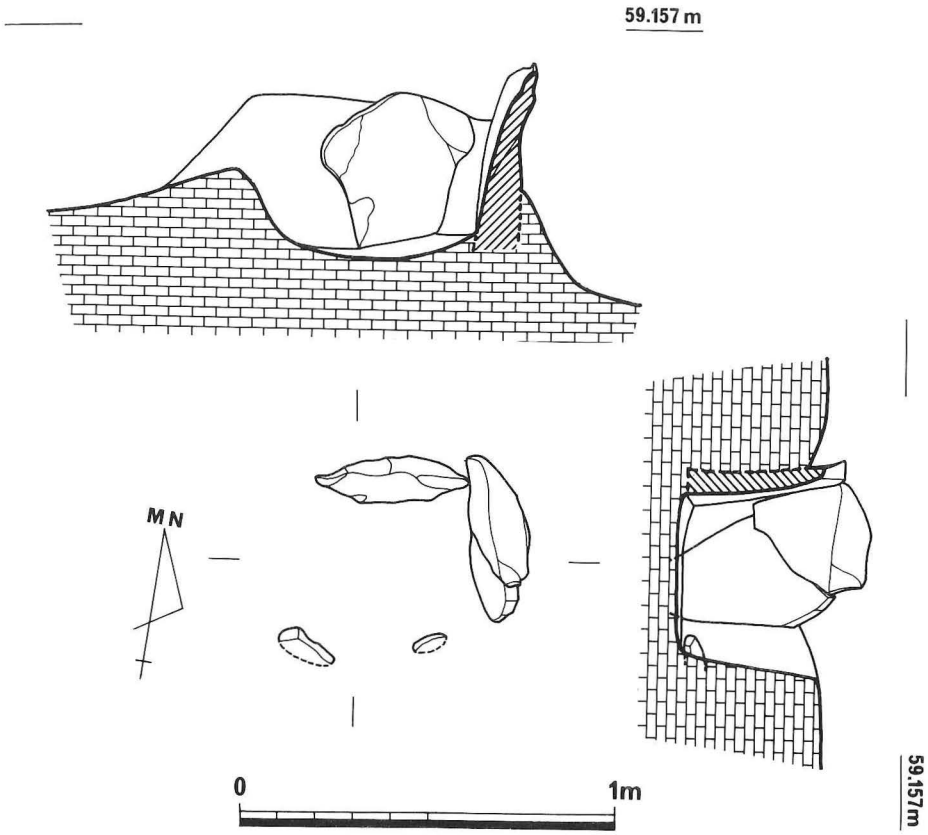
遺構（第７・８図，ＰＬ12）

昭和38年の畑地水田化作業時に総数20基の石棺が発見され，水田の畦畔に１基が残されたという遺構である。Ｅ地点からＣ・Ｄ地点に至る小径と直交する方向に設定された水田畦畔中において遺存状態を確認した。遺構の長軸方向はほぼ東西方向と考えられる。西側および南側の石材は失われており，長軸内法は確認できないが，土壙底の状況よりして短軸内法は33センチメートル程度であったと推測される。土壙底に敷石はない。東側小口材のレベルから土壙底までの深さは約50センチメートルを測る。昭和38年当時の関係者の記憶によれば，Ａ地点から土器の他に磨製石剣と石包丁が出土した可能性があるが，全く不明である。

なお，Ａ地点の石棺材は，土地所有者金崎与吉氏邸内に祀られ，一部はＡ地点南側の小径の路傍に現存する。（ＰＬ13）

第7図　大野台遺跡A地点地形実測図

大野台遺跡A地点地形実測図



第８図　大野台遺跡Ａ地点　第１号遺構実測図

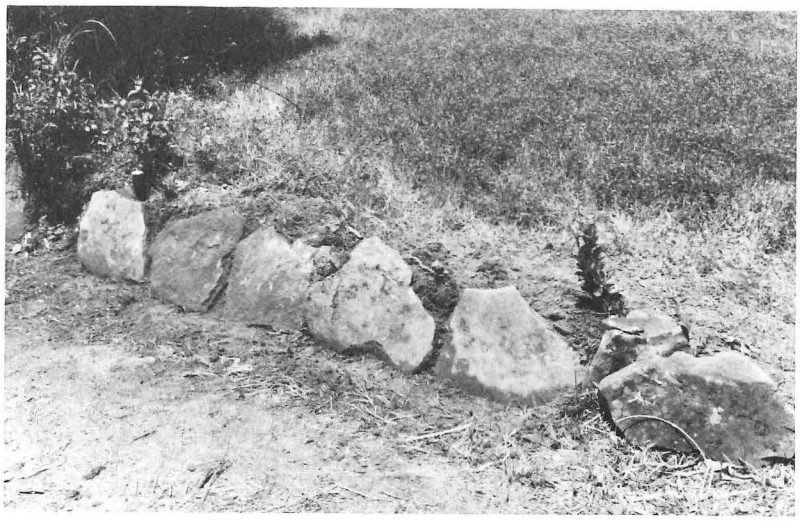
PL. 12　大野台遺跡Ａ地点　第１号遺構

PL. 13

大野台遺跡A地点石棺材

金崎与吉氏邸内に祀られたA地点の石棺材

同　上



A地点南側の小路に並べられた石棺材

大野台遺跡E地点

第1号遺構

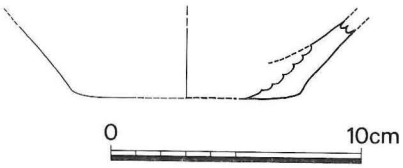
遺　構

E－6区の南東隅に位置している。この遺構は，昭和56年3月，農作業着手時に発見され，当遺跡の昭和57・58年の2年度にわたる調査を行う契機となった箱式石棺である。現在，石棺は形を残しておらず，石棺材を抜き取った跡が確認できるだけである。抜き跡から，石棺は長軸方向をほぼ南北とし，小口材2，側壁材3より成っていたことを知り得る。側壁材は，一部重なるように組み，側壁の両端は小口材と接している。小口間の長さは78センチメートルである。残念ながら，西側の側壁の状態は，抜き跡が残っておらず，明確ではないが，小口の位置から見て，側壁間は42センチメートル位であったと考えられる。（PL14）

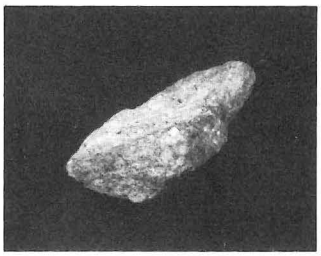
土　器

遺構周辺から土器底部1点が出土した（第9図，PL15）。平底からの立ち上がりはゆるやかで壺形土器の底部であろう。底部の推定径9センチメートル，茶褐色の胎土に石英の微粒を混入する。焼成はややもろい。

PL. 14　第1号遺構（西側から）



第９図　第１号遺構周辺出土土器実測図



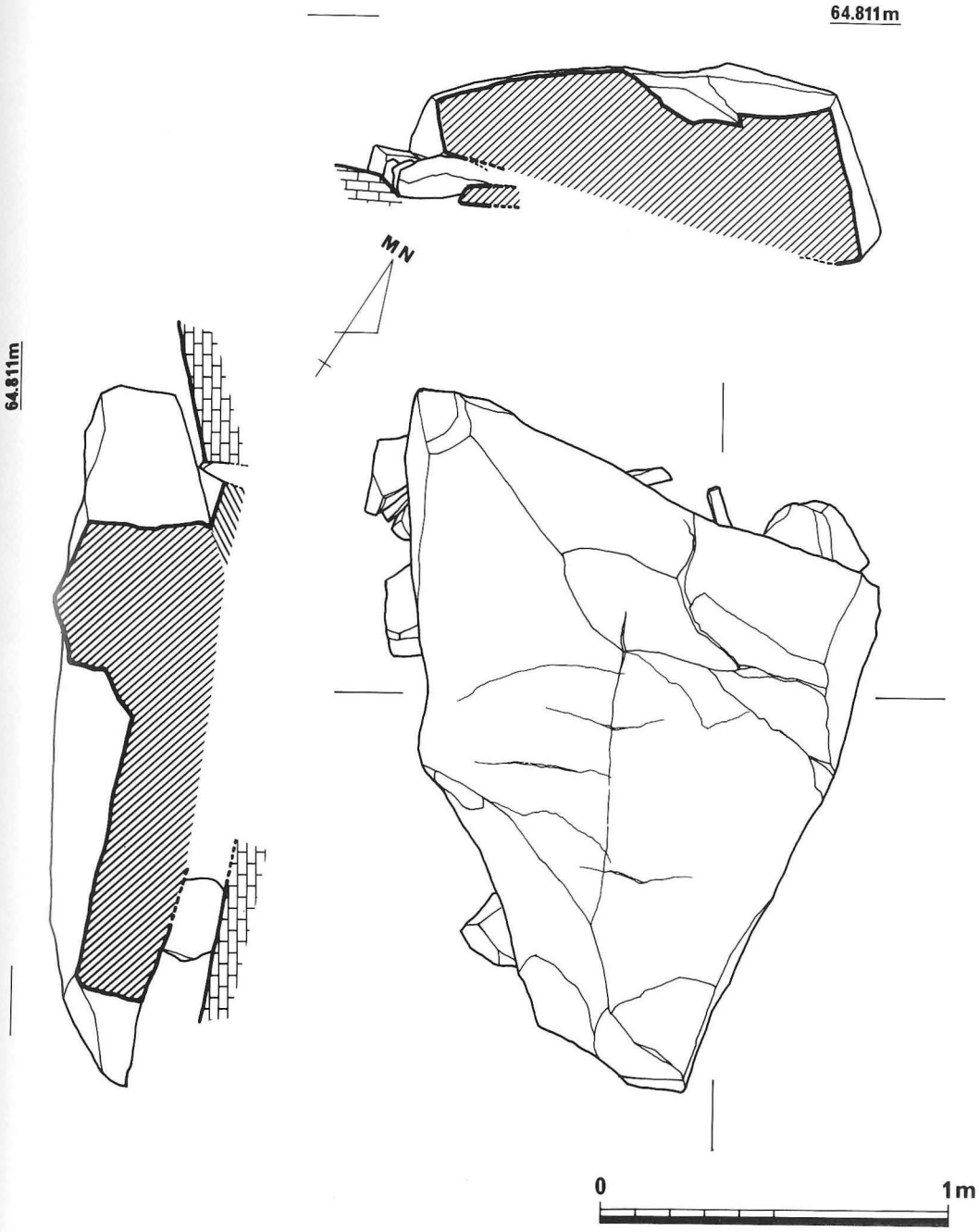
PL. 15　第１号遺構周辺出土土器

第２号遺構

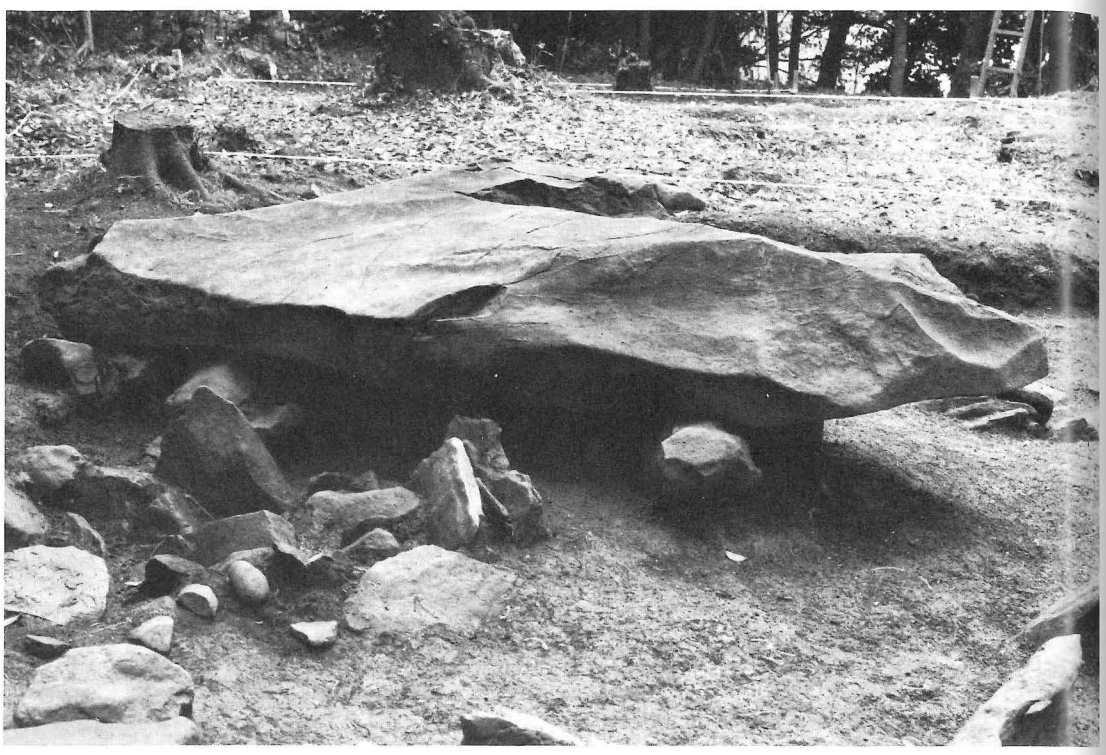
遺構（第10図・ＰＬ16）

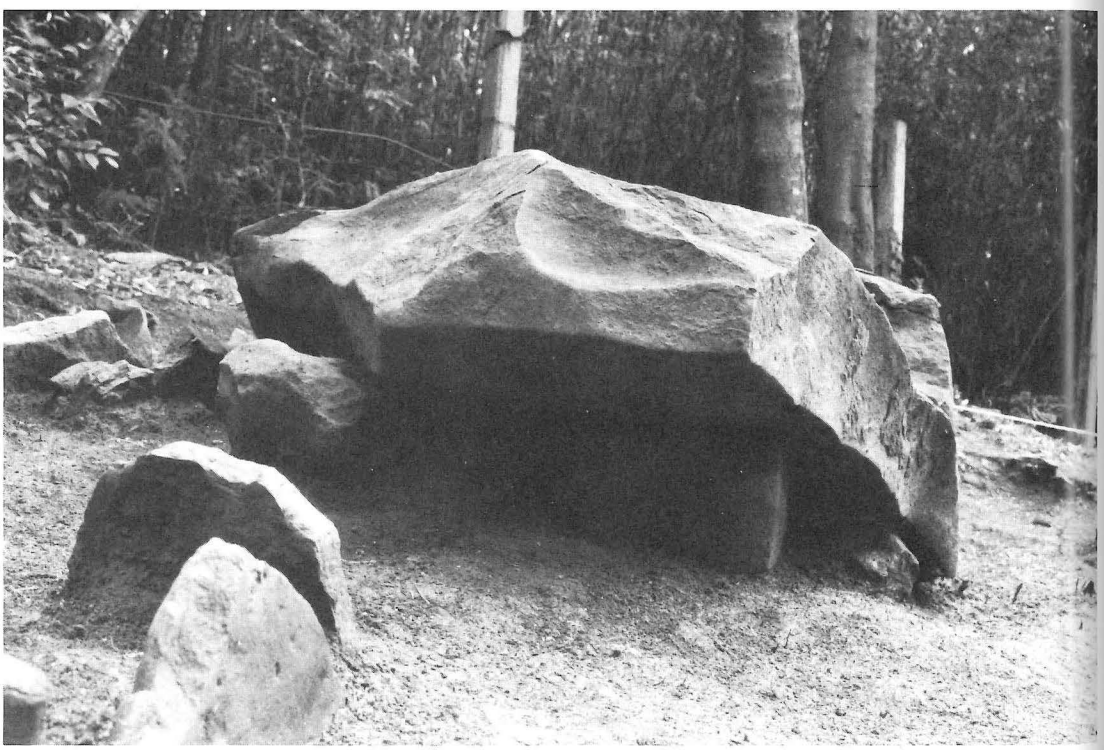
Ｅ地点のＧ－６区のほぼ中央部において検出した。昭和56年，本地点発見当時，撑石の一部が地表面に露出しており，試錘によって支石墓撑石の可能性を確信した遺構である。Ｅ地点にある支石墓のうち，撑石を残すものが５基（第２，12～15号）あるが，円形ないし楕円形の盤状石が選択使用されているなかで，本遺構の撑石のみは三角形の平面観をもつ。本遺構撑石の北側は，折損した跡をとどめており，現状より北側に張り出す平面観であったと考えられる。このことは，支石群の位置が撑石の直下に配されていること，さらに，下部構造である石棺の一部が撑石の外に出ている現状から首肯される。他の撑石群に比して，規模と形状が著しく異る撑石である。支石は５個以上が使用され，人頭大の礫が用いられている。

下部構造は箱式石棺であり，長軸方向，規模等は未発掘のため不明である。



第10図　第２号遺構実測図





PL. 16　第２号遺構（上：西側から）（下：南側から）

第3号遺構

遺　構

E地点のG－6区西辺において検出した。長軸方向は略東西に近く，N74°Wである。南側壁材を1枚失っているが，側壁材（南北）それぞれ2枚，小口材各1枚で構築された箱式石棺である。棺材はいずれも玄武岩板状石である。支石，撑石ともにない。石棺内法は長軸で70センチメートル程度であり，棺の上面や直接周辺に遺物が出土した。（第11図，ＰＬ17）

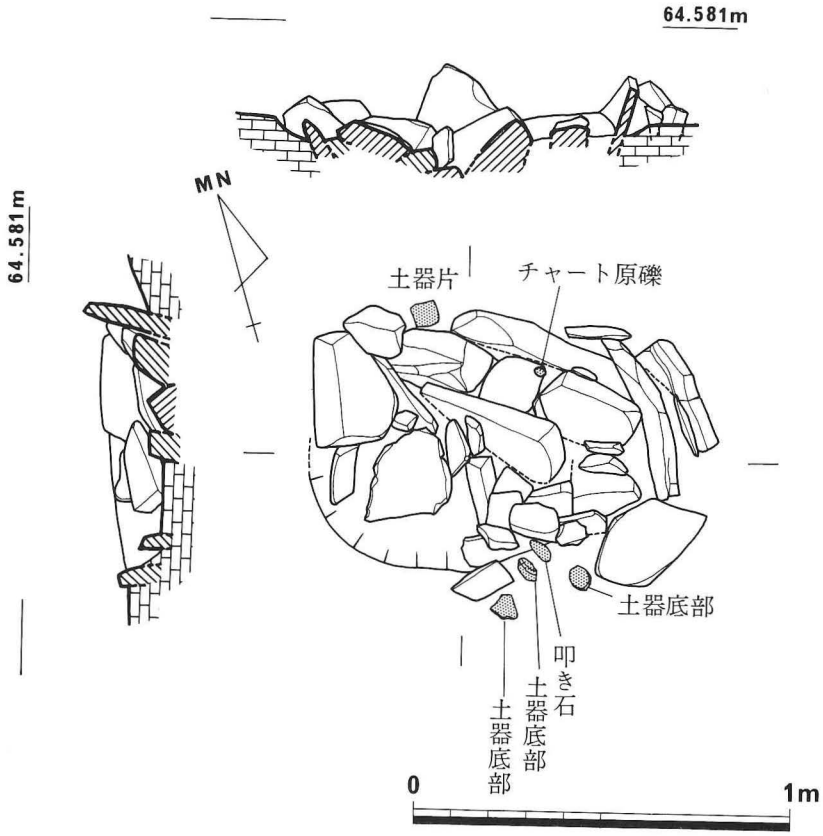
土　器

第3号遺構周辺から出土した土器は3点である（第12図，ＰＬ19）。**1**は甕形土器の底部で径7.5センチメートルを計り，あげ底で，底部からの立ち上がり部分に刻目突帯1条をめぐらしている。茶褐色の胎土に石英の微粒が混入し，焼成良好である。**2**は，立ち上がりの急な土器底部である。赤褐色の胎土中に，石英粒を主とした砂粒を多く含んでいる。焼成はやや粗い。**3**は安定のよい壺形土器の底部で，わずかに上げ底気味になる平底で，立ち上がりはゆるやかである。器面の色調は黄灰色で焼成は堅緻である。石英粒を多く混入している。

石　器

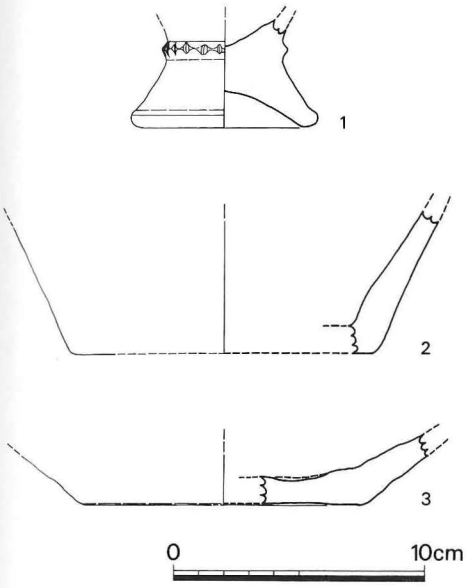
第13図およびＰＬ20・21の石器2点が遺構の周辺から出土した。**1**は，やや肉厚の頁岩を利用した剝片石器である。片面は主要剝離面の粗大な打瘤痕を残し，両面とも下際に二次加工を施している。**2**は安山岩の卵形の長円礫を利用した敲石で下際にわずかに使用痕がみえる。なお，図示してはいないが，ＰＬ17に示したチャートの原礫1点が，遺構上面から出土した。濃い紫紅色の径4センチメートル程度の原礫である。研磨などの加工痕はないが，「八の久保砂礫層」に含まれるものである。大野台遺跡E地点からは他にも同様の原礫が2点出土しており，なんらかの意図をもって，鹿町町外から搬入された公算が大きい。

PL. 17　第3号遺構出土
チャート原礫

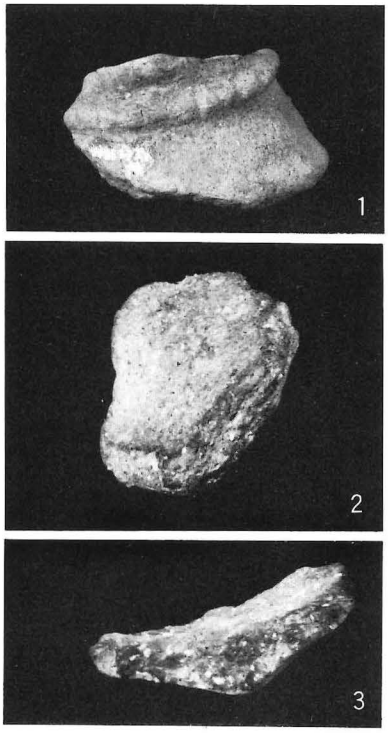


第11図　第３号遺構実測図

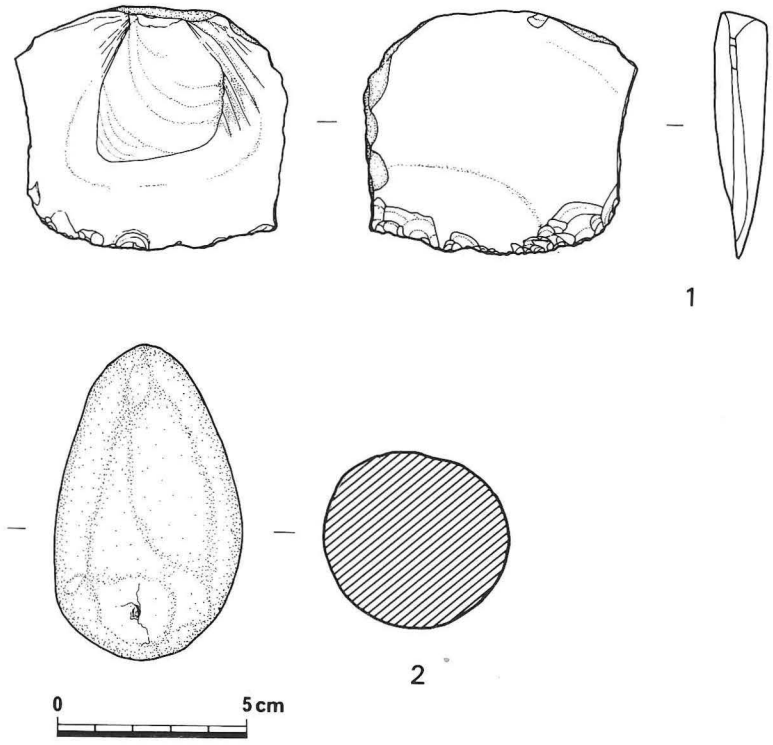
PL. 18　第３号遺構



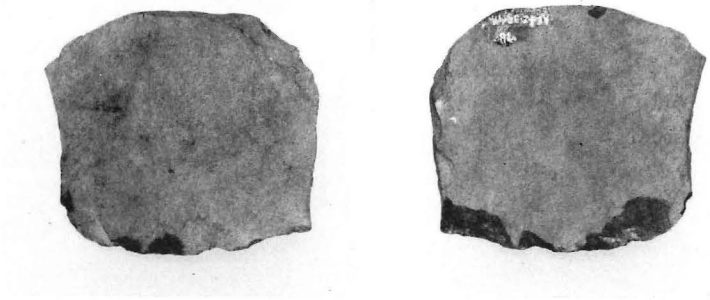
第12図　第３号遺構周辺出土土器実測図



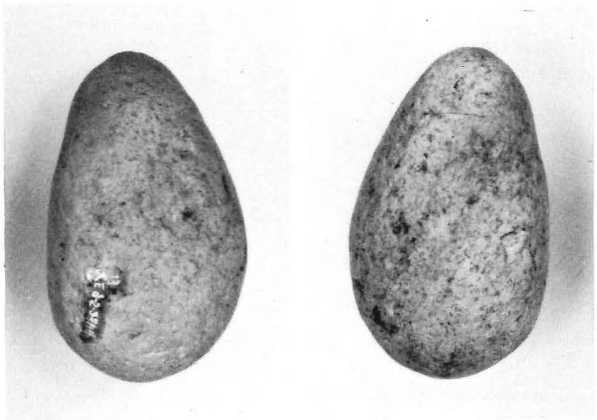
PL. 19　第３号遺構周辺出土土器



第13図　第３号遺構周辺出土石器実測図



PL. 20　第３号遺構周辺出土石器



PL. 21　第３号遺構周辺出土石器

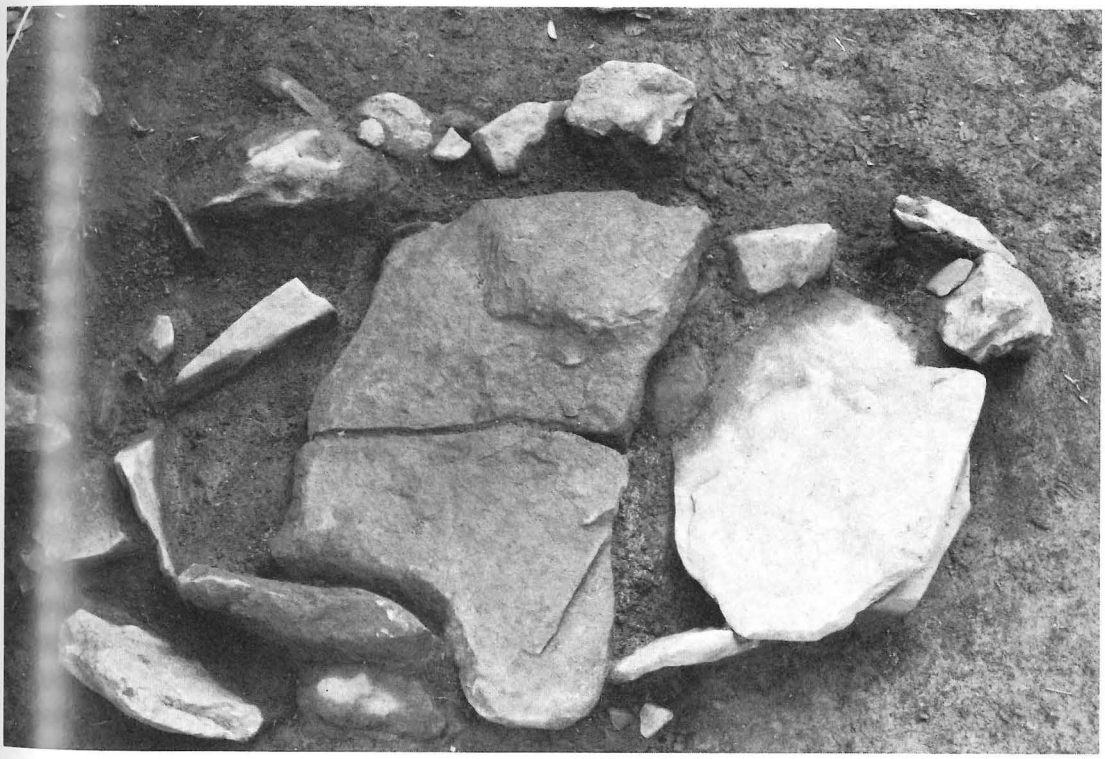
第4号遺構

遺　構

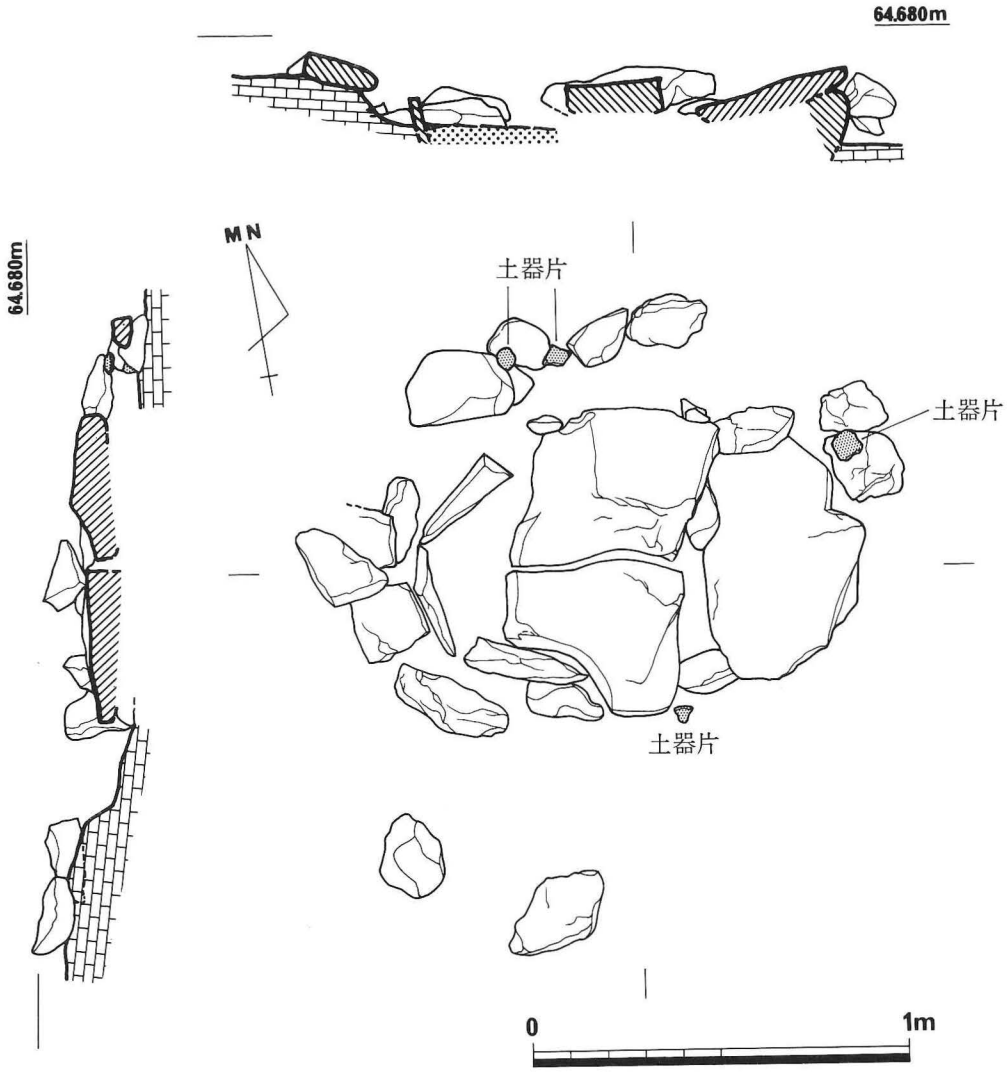
G－6区の南西隅に位置する。撑石はすでに取り去られており，支石6個と，長軸方向をほぼ東西（N81°W）とする石棺が残る。支石は，北側に2個，南側に2個，東側に2個，石棺を取り囲むように並ぶ。石棺東部には3枚の蓋石が被せてあり，石棺の約3分の2を覆っているが，石棺の西側では側壁材3枚が観察できる。側壁材は直角に組まれているのではなく，各々2枚の側壁材のなす角度が120°前後となるように組んでいる。東側の蓋石下にも2枚の側壁材が見えるが，これらにも同じ様な傾向が見受けられ，石棺の形状は，六角形に近い形になると考えられる。（第14図，ＰＬ22）

土　器

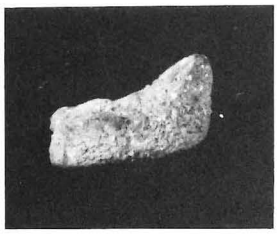
第4号遺構の周囲からは4点の土器片が出土している。内1点が底部片であり，他は胴部片である。この底部は，明赤褐色の平底である。底面からの立ち上がりは急であり，甕の底部と思われる。器表内面には指頭による圧痕が認められる。焼成は良くない。（第15図，ＰＬ23）



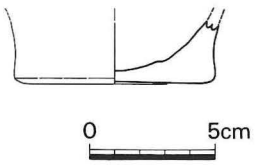
PL. 22　第4号遺構



第14図　第４号遺構実測図



PL. 23　第４号遺構周辺
出土土器

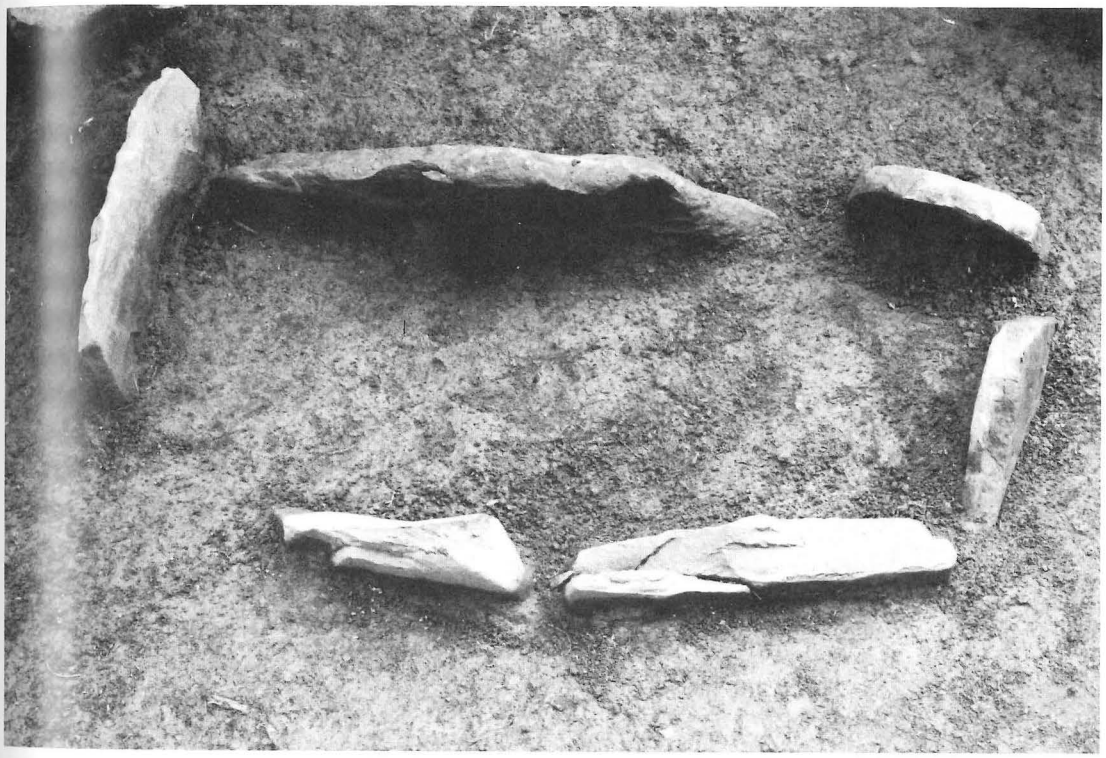


第15図　第４号遺構周辺
出土土器実測図

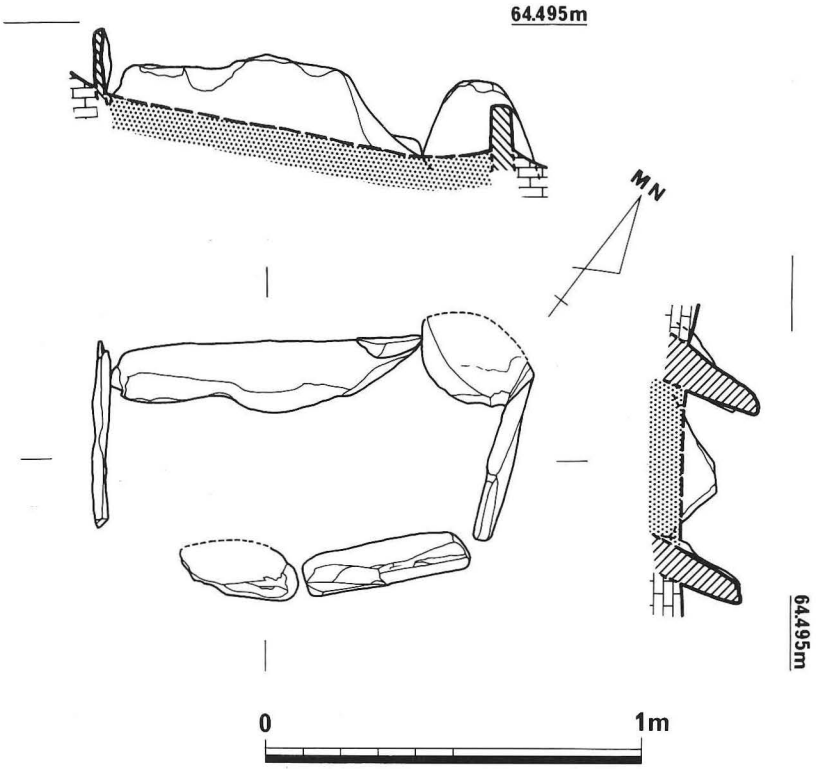
第５号遺構

遺　構

Ｅ地点Ｇ－６区において検出した。長軸方向はＮ52°Ｅである。内法は長軸106センチメートル，短軸38センチメートル。側壁材は北側は完存するが，南側は３枚あったと思われるものが２枚しか残っていない。小口材は２枚あり，計６枚の玄武岩板状石で箱式石棺を構築している。形状は⊢⊣を呈している。蓋石はなく，支石，撑石の存否も不明である。（第16図，ＰＬ24）



PL. 24　第５号遺構



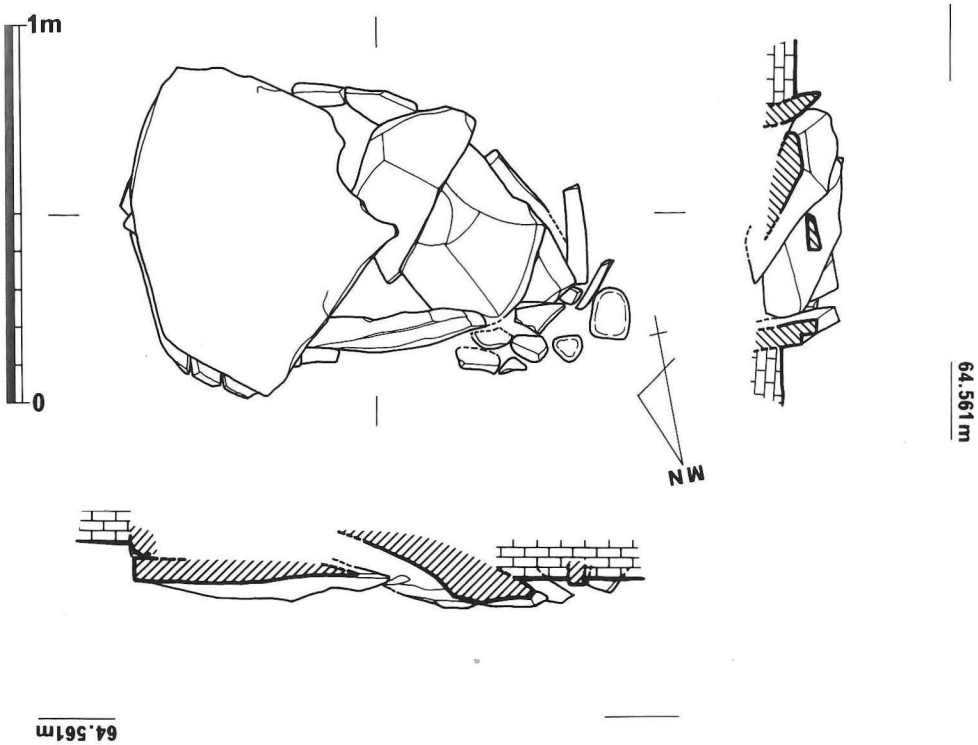
第16図　第５号遺構実測図

第６号遺構

遺　構

Ｅ地点のＧ－６区東南隅において検出した箱式石棺である。撑石，支石ともにない。玄武岩の板状石の蓋石３枚が残り，棺身内に一部は落ちこんでいるが，元来３枚の蓋石材が使用されたらしい。西側の小口材が外側に倒れているが，旧状は四角形以上の多角形平面のプランであった可能性がある。長軸方向はＮ79°Ｗであるが長軸内法は不明である。（第17図，ＰＬ25）

PL. 25　第６号遺構



第17図　第６号遺構実測図

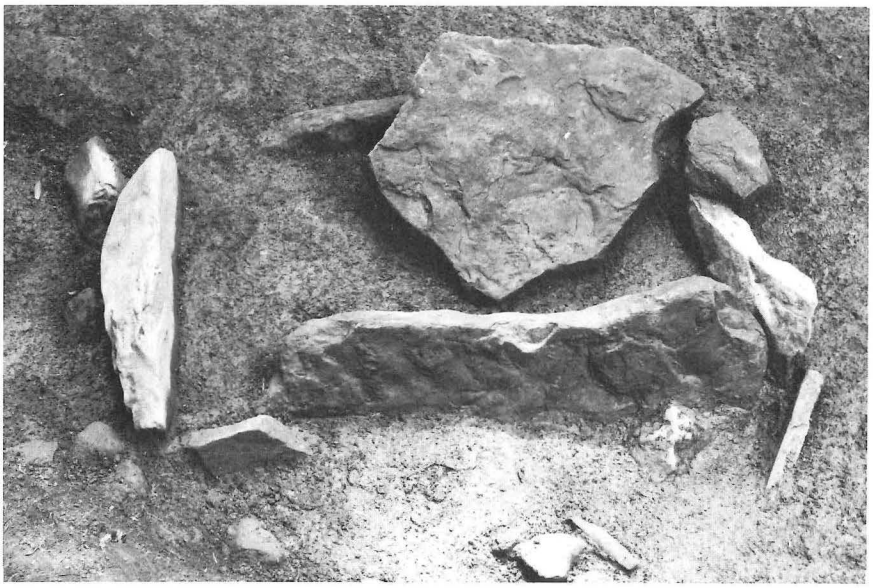
第７号遺構

遺　構

Ｅ地点のＧ－６区東辺において検出した。長軸方向をＮ28°Ｗとする箱式石棺であり，玄武岩の板状石材４枚を主材として構築している。蓋石は，一部を残して失われている。遺構の南西辺に小児人頭大の礫を配するが，規模と頂点のレベルよりして，支石として利用されたものか否か不明である。棺身の長軸内法は92センチメートルであり，長方形の平面観を示す。（第19図，ＰＬ26）

土　器（第18図，ＰＬ27）

遺構の周辺から土器底部１点が出土した。底部の径6.5センチメートルを計る。立ち上がりは比較的強く，甕形土器の底部である。赤褐色の胎土に，微粒の輝石片を含み，焼成良好である。

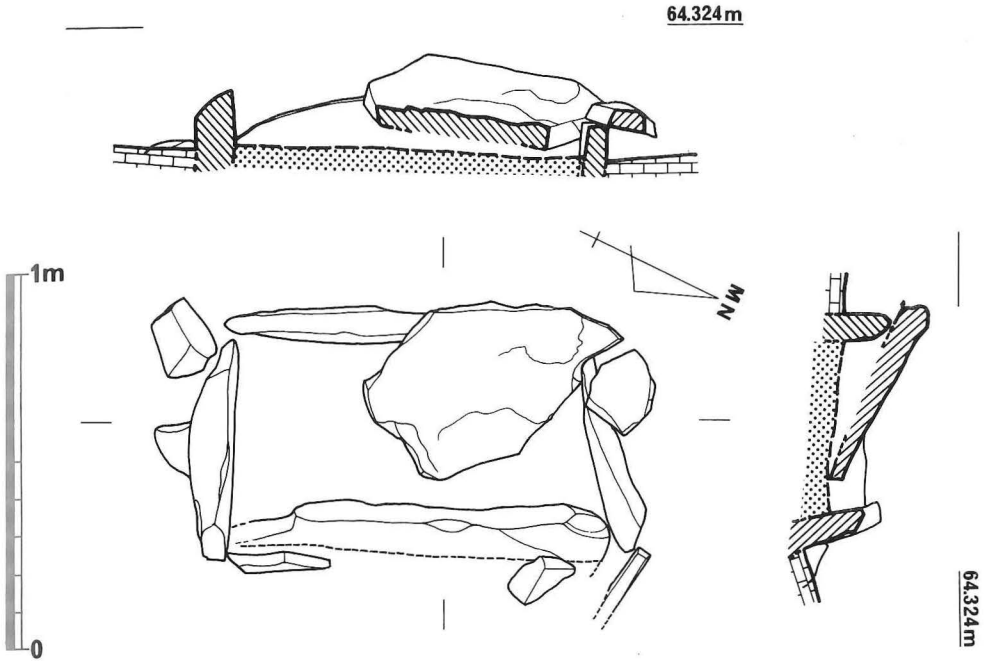


PL. 26　第７号遺構

PL. 27　第７号遺構周辺
出土土器

第18図　第７号遺構周辺
出土土器実測図

0　5cm

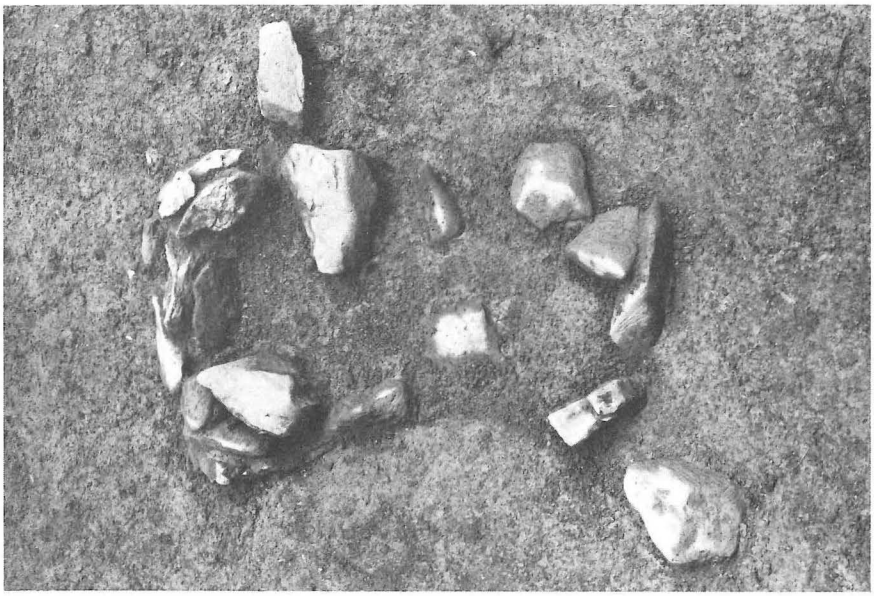


第19図　第７号遺構実測図

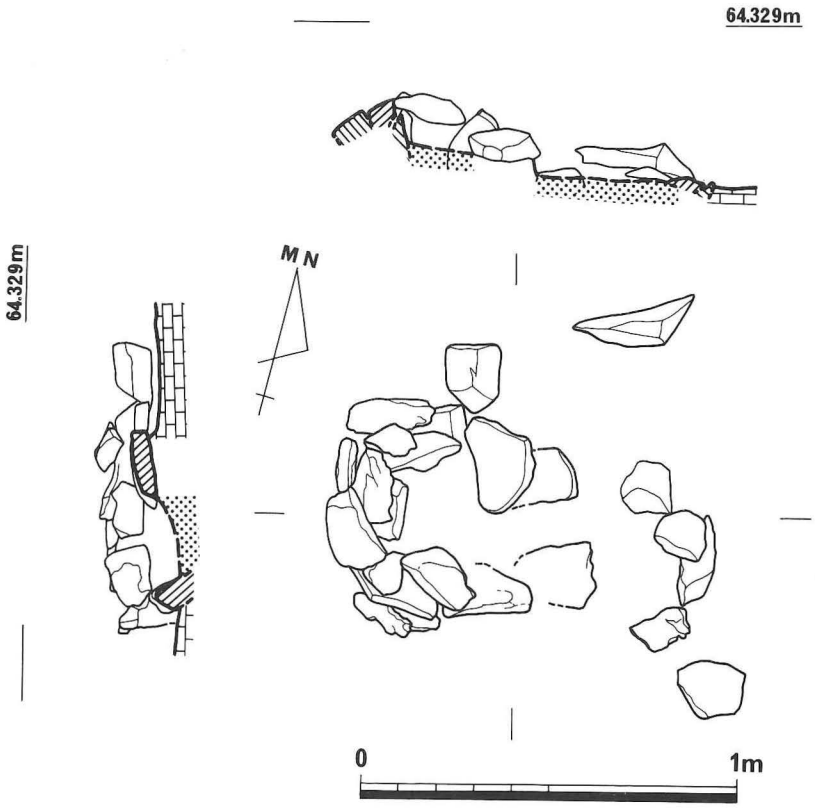
第８号遺構

遺　構

Ｅ地点Ｇ－６区において検出した。損壊していて旧状はわかりにくいが，長軸の方向はおよそＮ77°Ｅである。内法は小口材２枚が確認できることから長軸がおよそ75センチメートル，短軸は不明である。石棺の東側半分は礫が散乱している。蓋石はなく，支石，撑石の存否は不明である。（第20図，ＰＬ28）



PL. 28　第８号遺構（東から）



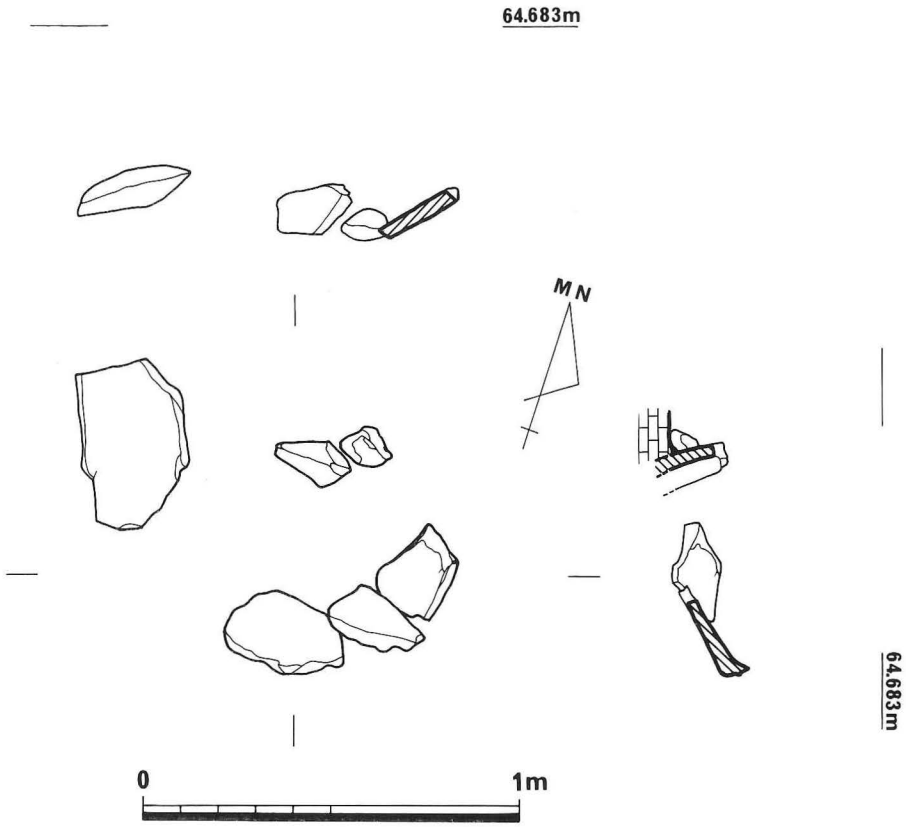
第20図　第８号遺構実測図

第９号遺構

遺　構

Ｅ地点Ｈ－６区において検出した。側壁材が遺存していたので箱式石棺であったと推定できるものの，石棺の長軸，規模，形状等は損壊していてわかりにくい。長軸の方向はおおよそＷ17°Ｓを示す。石棺の蓋石はなく，支石，撑石の存否等も不明である。（第21図，ＰＬ29）

PL. 29　第９号遺構（南から）



第21図　第９号遺構実測図

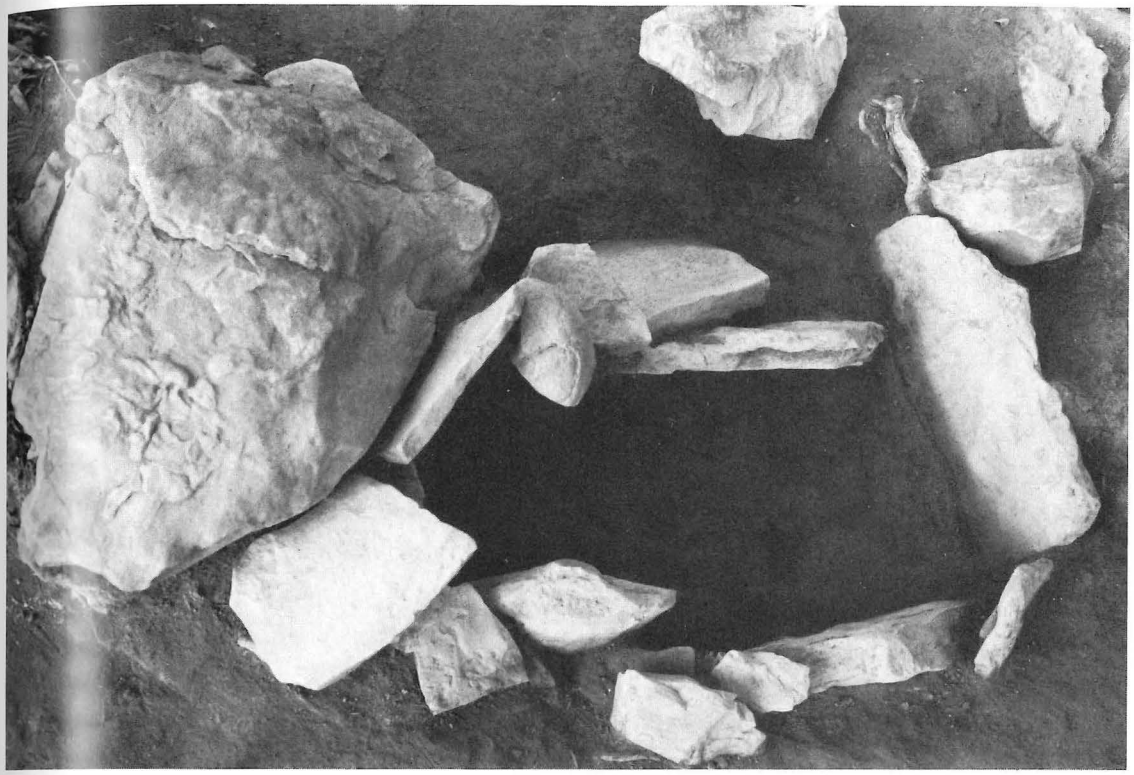
第10号遺構

遺　構

Ｅ地点のＨ－６区東南隅において検出した箱式石棺である。主軸方向をＮ56°Ｗにとっており，内法95×43センチメートルを計る。側壁材各２枚，小口材各１枚の玄武岩板状石で構築しており，棺の蓋は１枚を残している。支石は棺の北東辺に，人頭大の玄武岩礫を１個残しているが，撑石は失われている。これらの点よりして，本遺構が支石墓の下部遺構であることは推定可能である。（第24図，ＰＬ30）

土　器

第22図およびＰＬ31に示した１点が遺構の蓋石の下から出土した。逆「Ｌ」字形に近い断面形をもち，口縁下際に突帯を一条横走させる甕形土器の口縁部である。表面がやや荒れているが焼成はよい。黄灰色の胎土に微細な石英粒を混入している。流れ込んだものと考えられる。

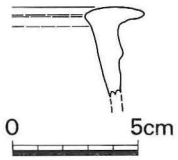


PL. 30　第10号遺構

石　器

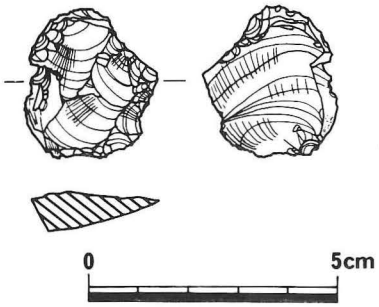
土器と同じく蓋石の下から，第３図およびＰＬ32に示した黒曜石の剝片１点が出土した。長さ３センチメートル，幅2.6センチメートルを計る。

PL. 31　第10号遺構出土土器

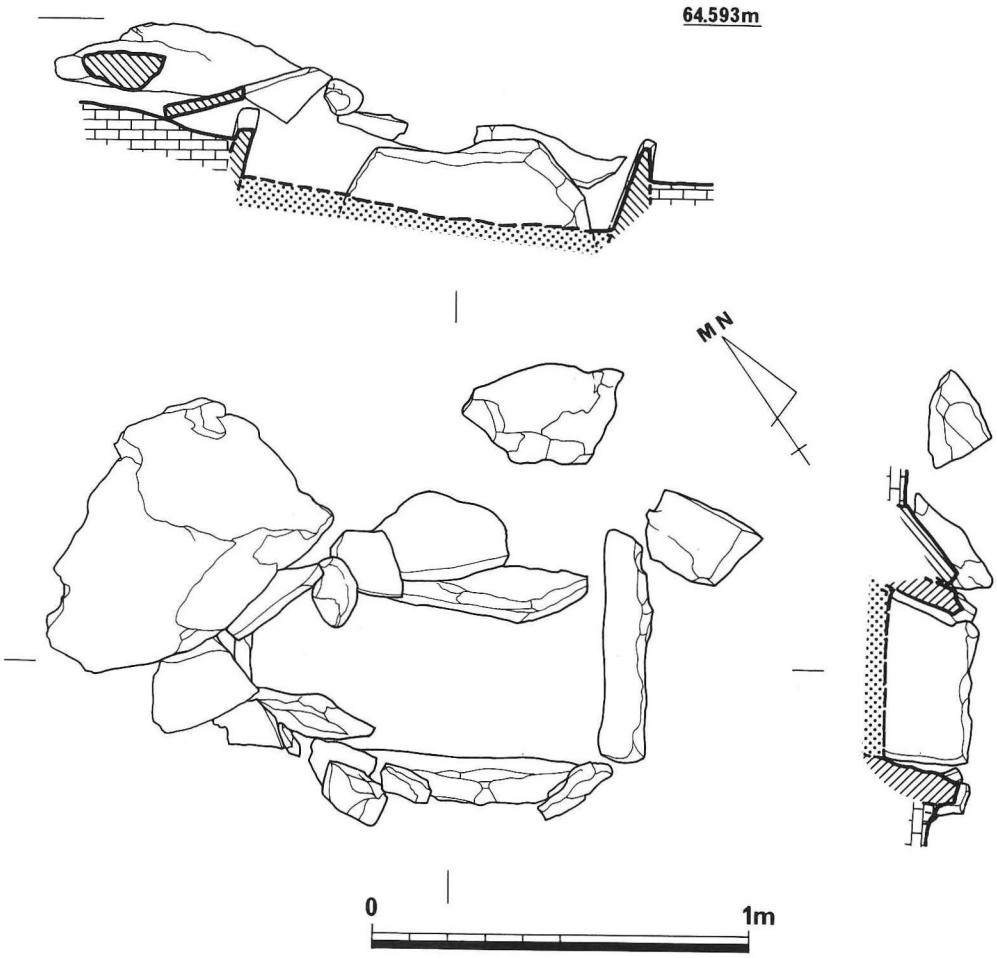


第22図　第10号遺構出土土器実測図

PL. 32　第10号遺構出土石器



第23図　第10号遺構出土石器実測図



第24図　第10号遺構実測図

第11号遺構

遺　構

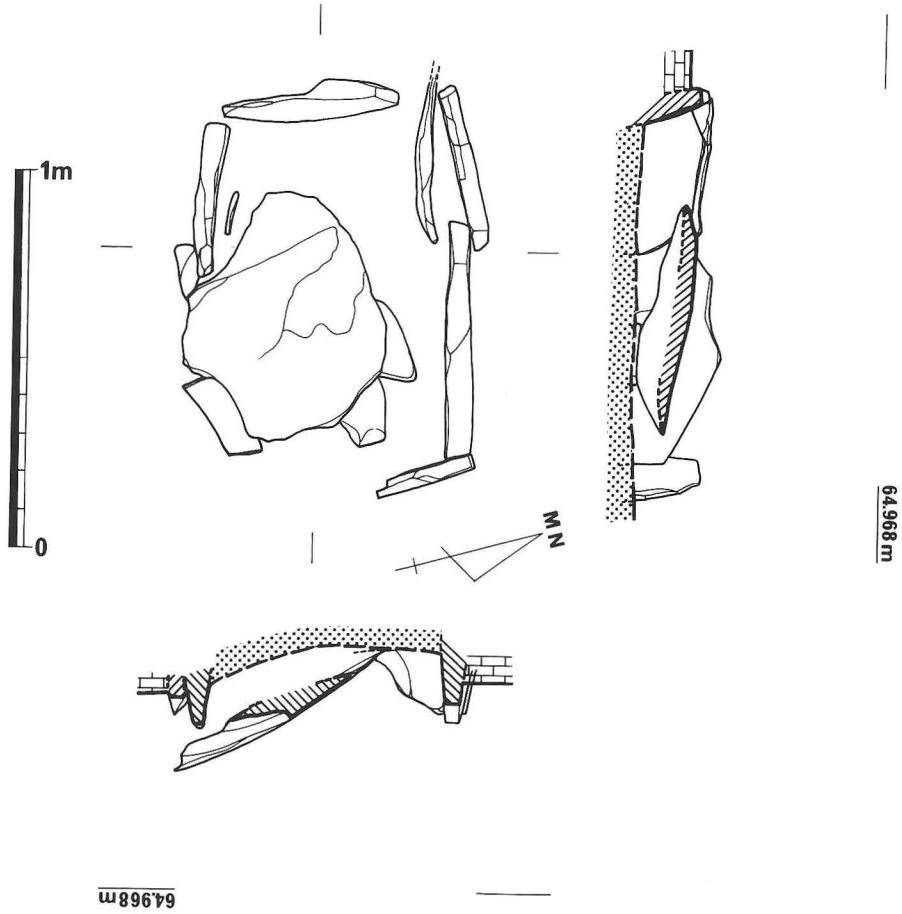
E地点のH－6区南西隅において検出した箱式石棺である。北側の側壁材は玄武岩板状石3枚，南側は1枚の側壁材が残っている。西側小口材は，南北側壁材の間に1枚が残っているが，小口の間隔を閉鎖できない規模である。北側側壁材のうち1枚が，元来は西側小口材で，90°移

動した可能性がある。東側の小口材も１枚を残して失われている。蓋石材は１枚を残して，あとは失われている。支石，撑石ともにない。長軸方向はほぼ東西に近くS74°Eである。長軸内法は85センチメートル程度であったと考えられる。（第25図，ＰＬ33）

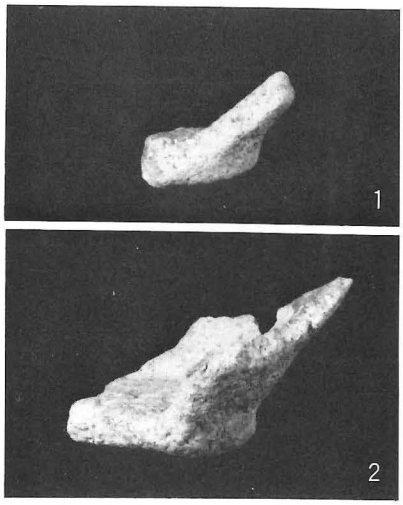
土　器

遺構周辺から第26図およびＰＬ34に示した底部２点が出土した。**1**は甕形土器の底部で推定径10.2センチメートルを計る。平底からの立ち上がりはスムーズである。器面はやや荒れているが，焼成は堅緻である。黄灰色の胎土に石英等の微粒は混入している。**2**は形状，胎土等１と酷似している。

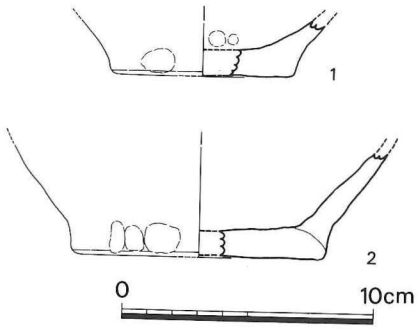
PL. 33　第11号遺構



第25図　第11号遺構実測図



PL. 34　第11号遺構周辺出土土器



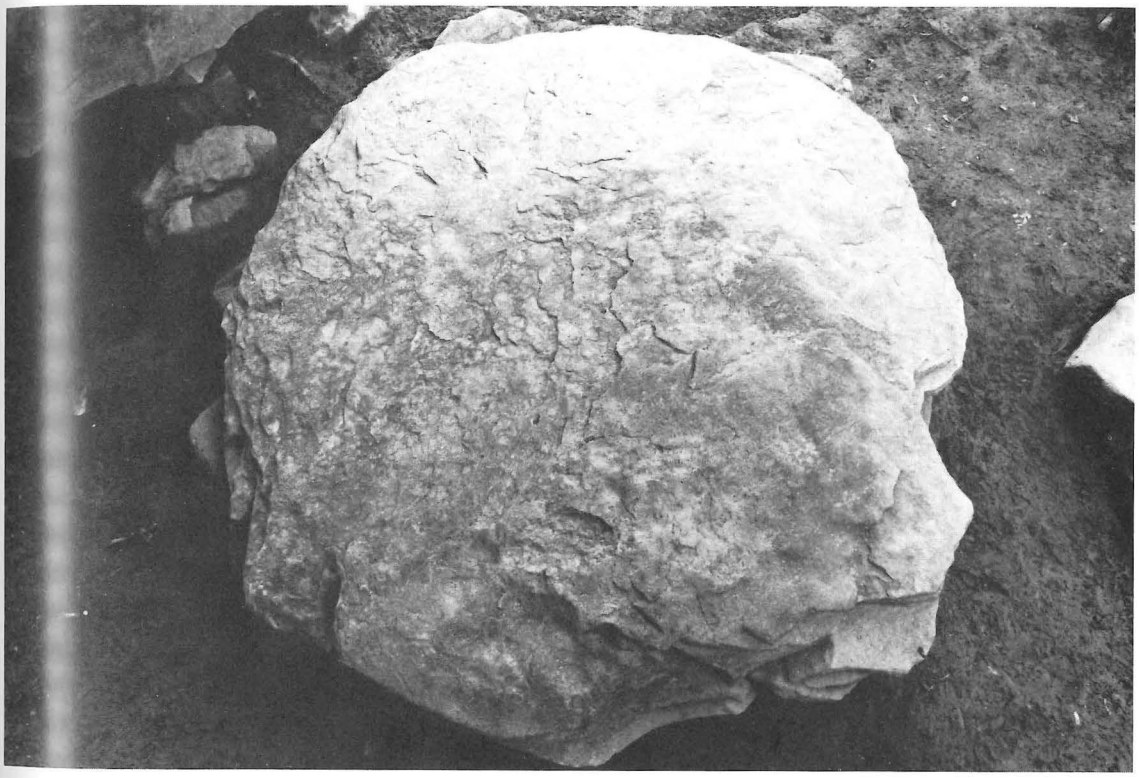
第26図　第11号遺構周辺出土土器実測図

第12号遺構

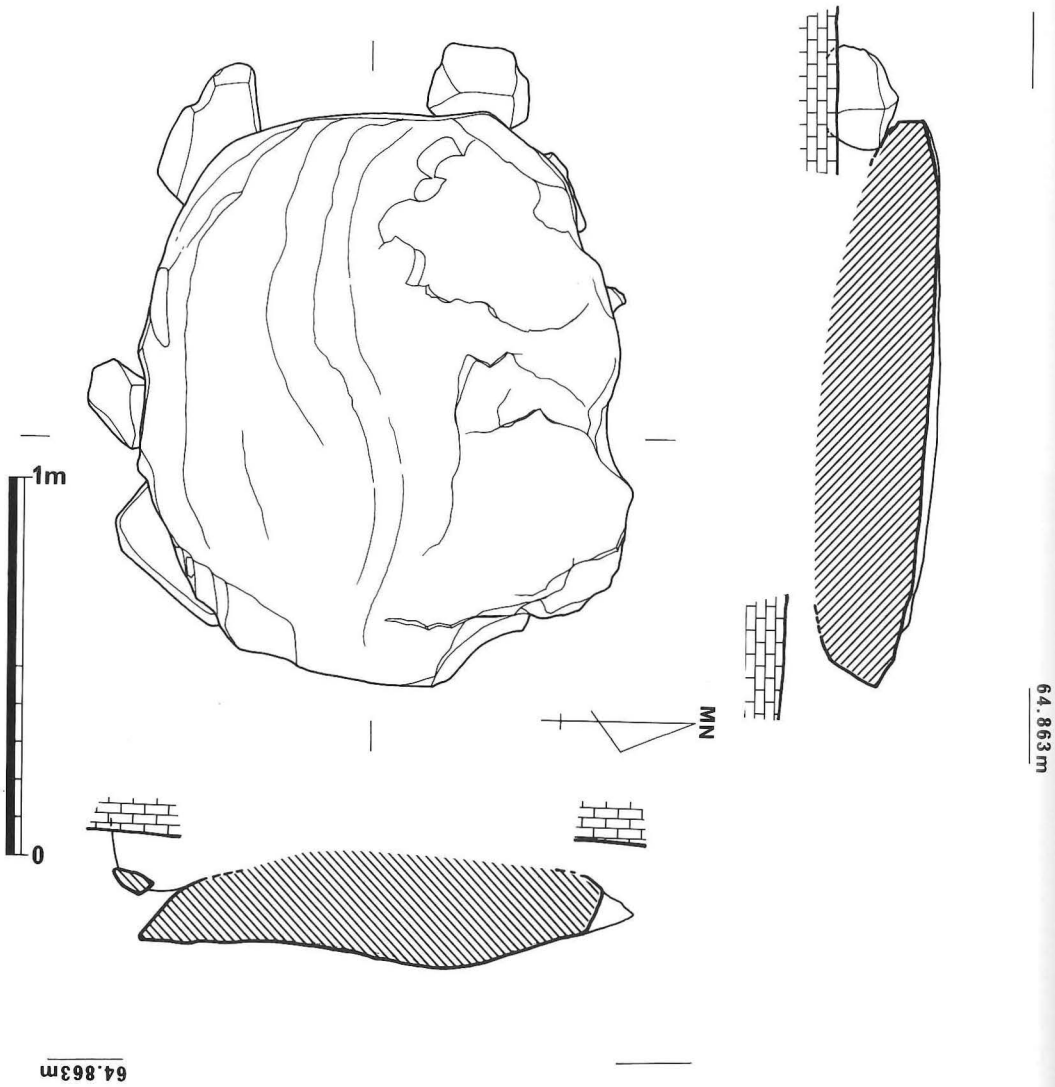
遺　構

E地点のI－6区において検出した。東西軸1.5メートル，南北軸1.3メートル，厚み0.3メートル程度の円形玄武岩の巨石を撑石とする支石墓である。撑石の表面は風化による剝離がすすんでいる。人頭大の支石6個をほぼ撑石の周縁下際に配している。未発掘のため下部構造細部は不明であるが検土杖による試錐によれば箱式石棺を下部構造としており，撑石の長軸線（ほぼ東西方向）に石棺長軸がなっているものと考えられる。（第27図，PL35）

本遺構に近接して第13号および第14号が併列状態で検出され，撑石の規模と形状が似ている。



PL. 35　第12号遺構（東から）



第27図　第12号遺構実測図

第13号遺構

遺　構

Ⅰ－6区に位置し，第12号遺構，第14号遺構に隣接する。撑石は厚みが30センチメートル，大きさ135センチメートル×125センチメートルで，当遺跡内の撑石では最も小形である。支

石は，今のところでは北・東・西に各１個，合計３個が確認できる。北側の支石（ＰＬ38下の左の支石）は石２個を重ねているが，西側の支石（ＰＬ38下の右の支石）と高さを比較した場合，あまりにも差のあることから後世に重ねられたと考えられる。（第30図，ＰＬ38）

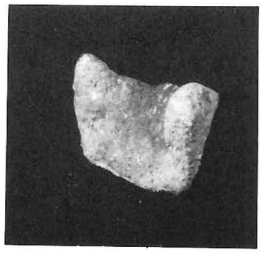
又，第13号遺構下の西側に，箱式石棺（第29号遺構）が検出されているが，北側蓋石の端が，第13号遺構の支石下に入り込んでいることから，第13号遺構の下部構造とも考えられる。しかし，樹根や土砂が多く，これ以上の観察はできず詳細は不明である。尚，第29号遺構については，後に別稿で述べることにする。

土　器

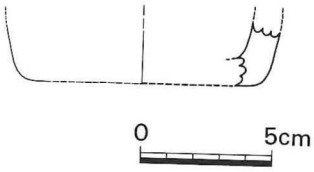
遺構周辺から底部１点が出土している。底面がごくわずか残り，器形細部は不明であるが，内湾する壺の底部と思われる。器表外面は赤褐色，内面は灰褐色を呈する。又，内外面とも荒れが著しく調整痕は分らない。焼成は良くない。（第28図，ＰＬ36）

石　器

黒曜石の剝片が１点出土している。同じ方向からの剝離を加えている。使用痕と思われる跡が認められる。（第29図，ＰＬ37）

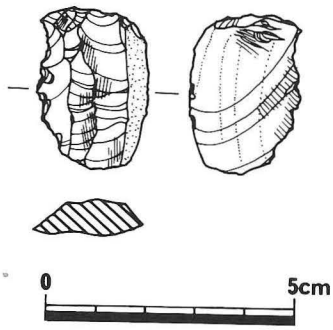


PL. 36　第13号遺構周辺出土土器

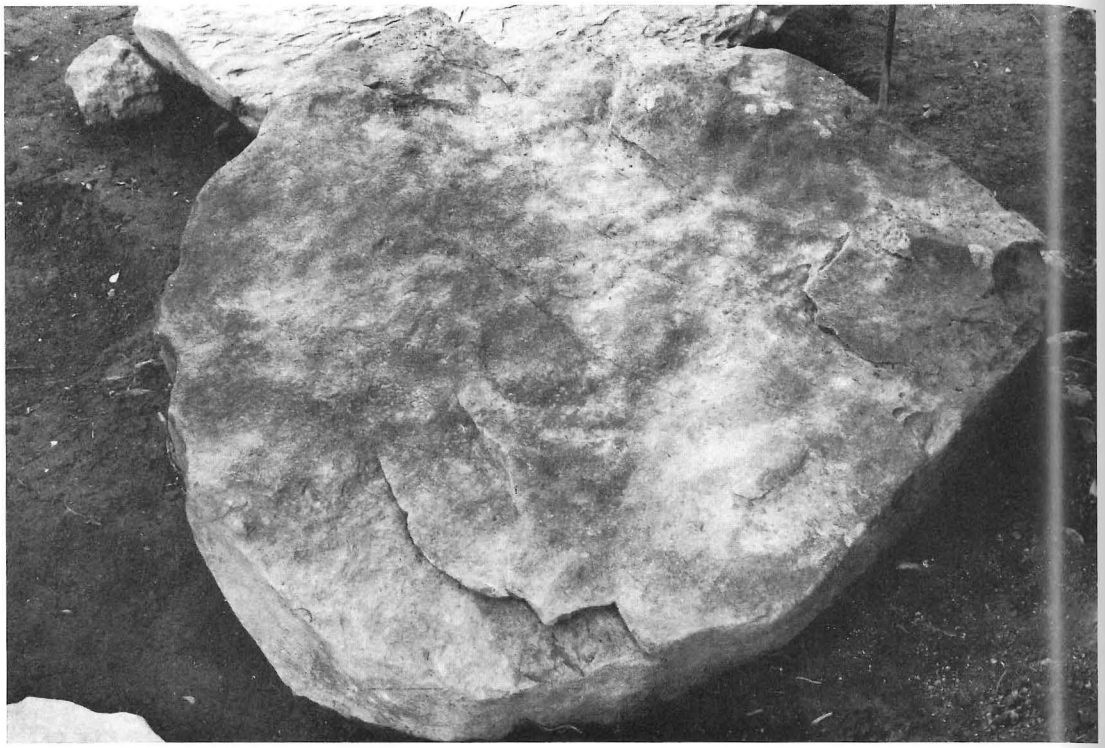


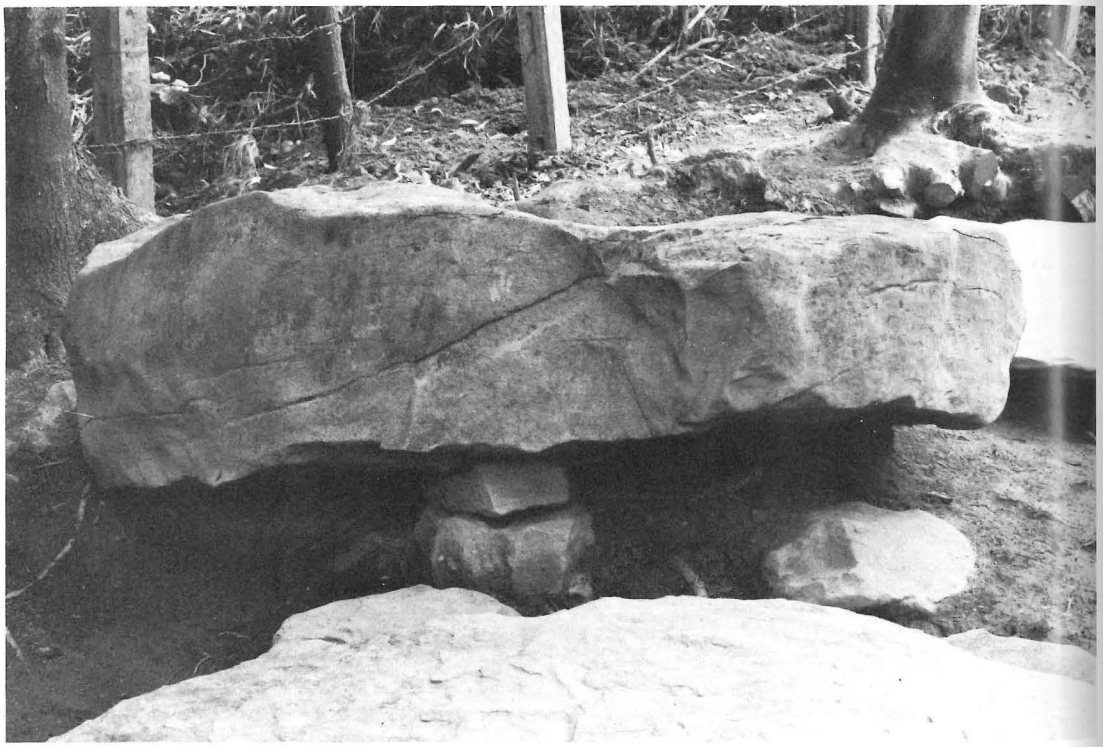
第28図　第13号遺構周辺出土土器実測図

PL. 37　第13号遺構周辺出土石器

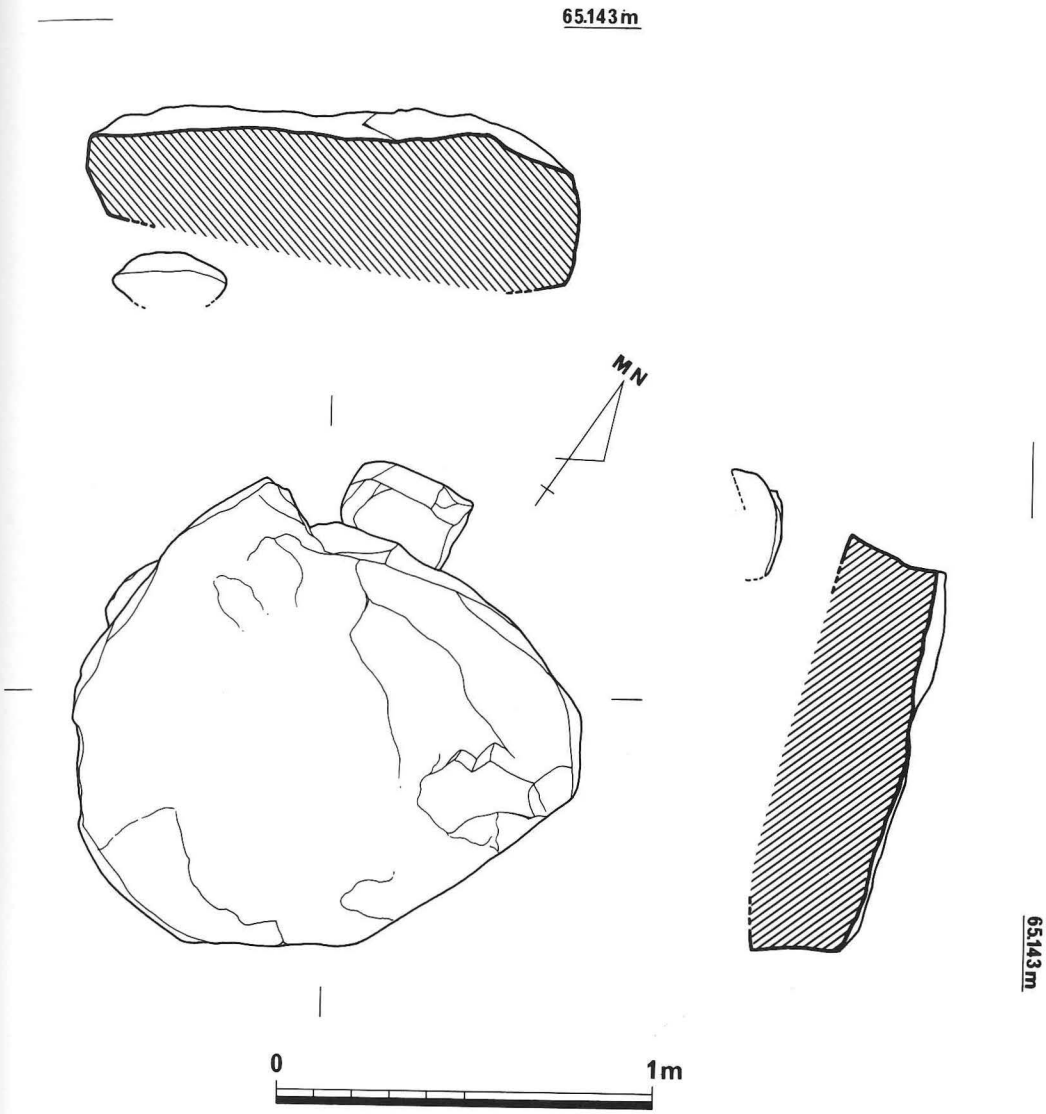


第29図　第13号遺構周辺出土石器実測図





PL. 38　第13号遺構（上：南から，下：北から）



第30図　第13号遺構実測図

第14号遺構

遺　構

Ⅰ－6区の西側に位置する支石墓で，第12号遺構，第13号遺構に隣接している。第14号遺構は本遺跡内で唯一下部まで発掘した（昭和57年8月）支石墓である。

この支石墓は，これまで全く手が触れられておらず，撑石，支石とも完全な形で残っていた。撑石は，厚さ15センチメートルで，長さ167センチメートル，幅115センチメートルの楕円形

であるが，ほぼ中央部あたりに樹根が入り込んでいるため横に割れて２枚になっている。支石は，ほぼ同じ位の大きさの塊石５個を使い，撑石の四隅と，撑石西端に１個ずつ据えている。西端の支石は，ほとんど撑石に触れておらず，撑石が土圧で少しずれたものと考えられる。

下部構造は，撑石を取り上げ，支石の周辺を清掃したところで，土壙であることが判明した。長軸方向をほぼ東西（N85°E）とし，土壙上面では，長軸70センチメートル，短軸65センチメートルを計る。土壙の埋土は，２層に分かれており，下層は赤褐色粘質土であった。土壙の掘り下げに際して，黒曜石剝片，小指の先程の土器小片が深さ５～10センチメートルの所で出土したが，土壙内でも上部の浅い所であるため，流れ込んだ可能性が高い。土壙は，深い所で48センチメートル，底面は53センチメートル×50センチメートルを計り，底に直径10センチメートル程度の礫群があった。

第14号遺構は，土壙を下部構造とする支石墓であり，当遺跡では第14号遺構の他に，第35号遺構として支石と土壙を検出している。当遺跡の支石墓の下部構造に土壙という形態があることが明らかになった訳である。第14号遺構は調査終了後埋め戻し，元の状態に復した。（第32図，ＰＬ40）

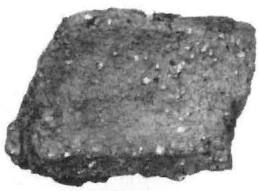
土　器

遺構の周辺より土器片１点が出土している。断面三角形の貼付突帯を施した壺の頸部と思われる。胎土に直径１～２ミリメートル程の砂粒を多量に含み，器表面は内外面とも黄褐色を呈する。内面は荒れが著しいが，外面には突帯付近にわずかながらも横方向の刷毛目が残る。突帯下から肩が張り出し，口縁が著しく外反する壺であろうか。（第31図，ＰＬ39）

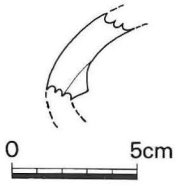
石　器

遺構の周辺より凹石１点，磨石１点が出土している。**1**は淡黄色の花崗岩製の凹石で，重量870グラムを量る。厚さは4.8センチメートルであり，両面とも均等に使用したように２ミリメートル程度の深さに凹む。側面に２ケ所程敲打したらしい痕跡が見られる。**2**は気泡が多い茶褐色の玄武岩製の磨石である。片面のみが平になっている。重量630グラムを量る。

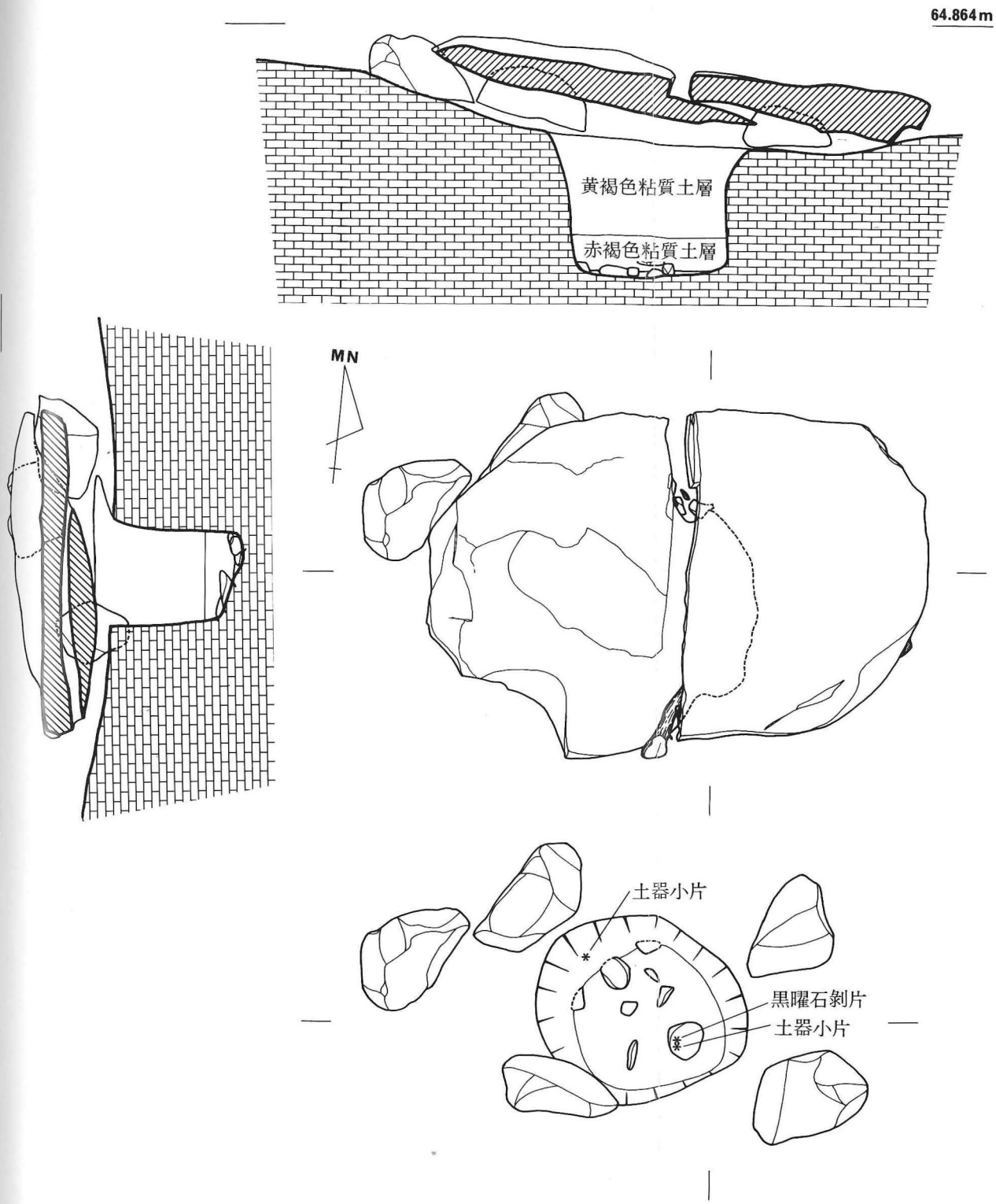
（第33図，ＰＬ41）



PL. 39　第14号遺構周辺出土土器

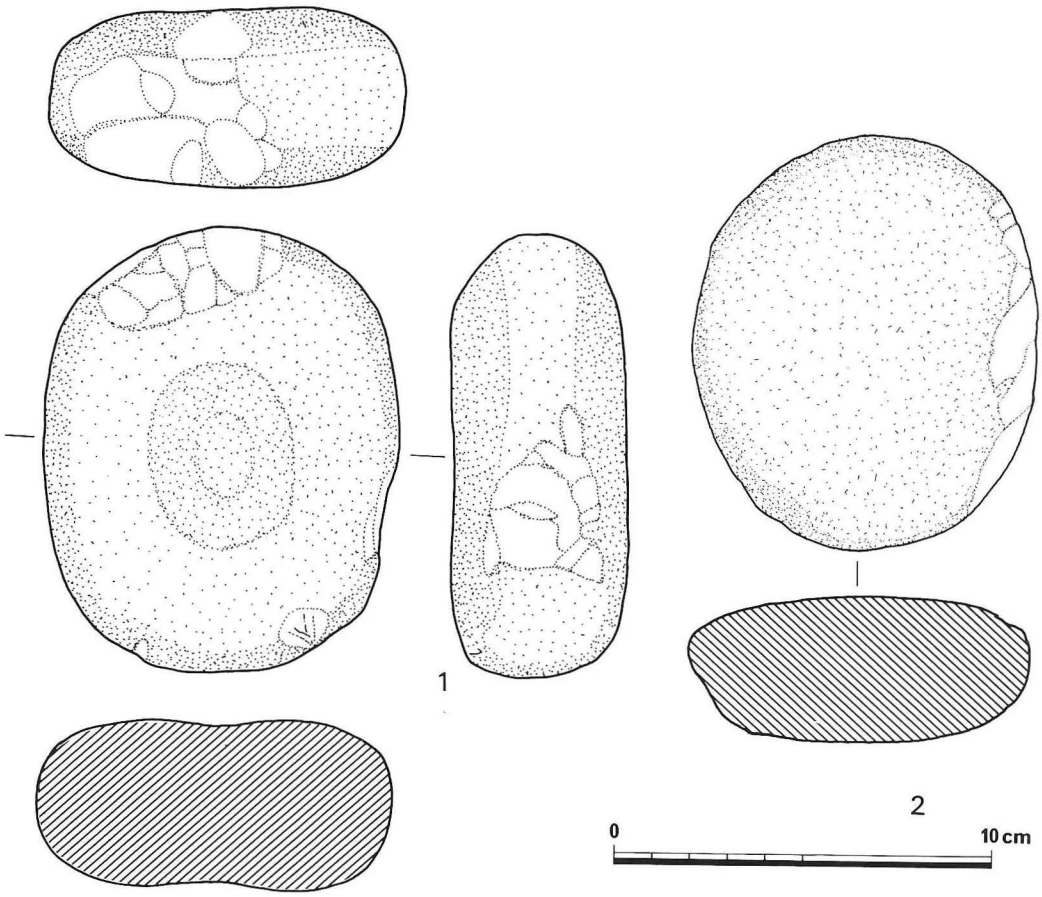


第31図
第14号遺構周辺出土
土器実測図

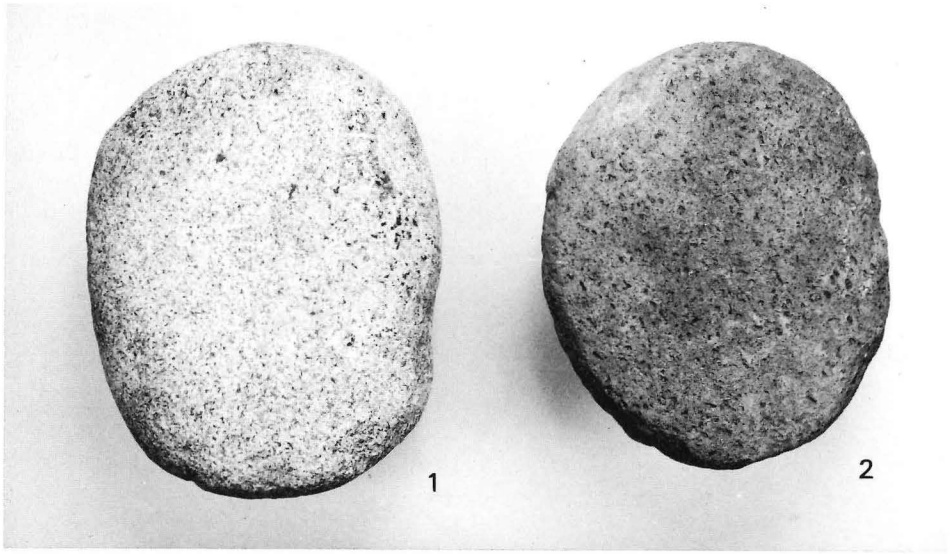


第32図　第14号遺構実測図

PL. 40 第14号遺構



第33図　第14号遺構周辺出土石器実測図



PL. 41　第14号遺構周辺出土石器

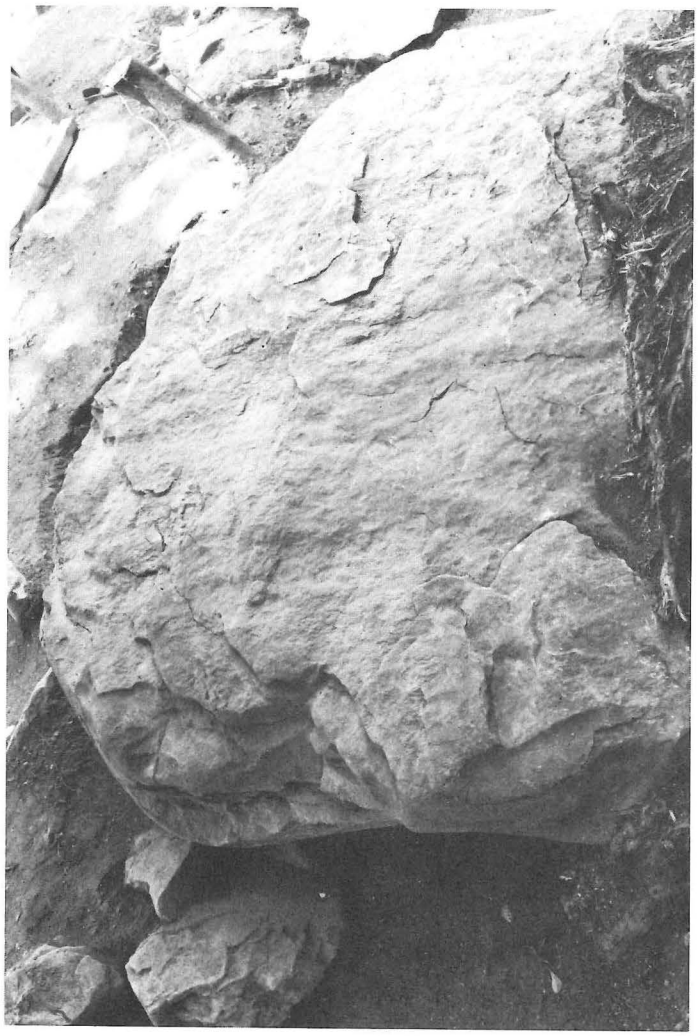
第15号遺構

遺　構

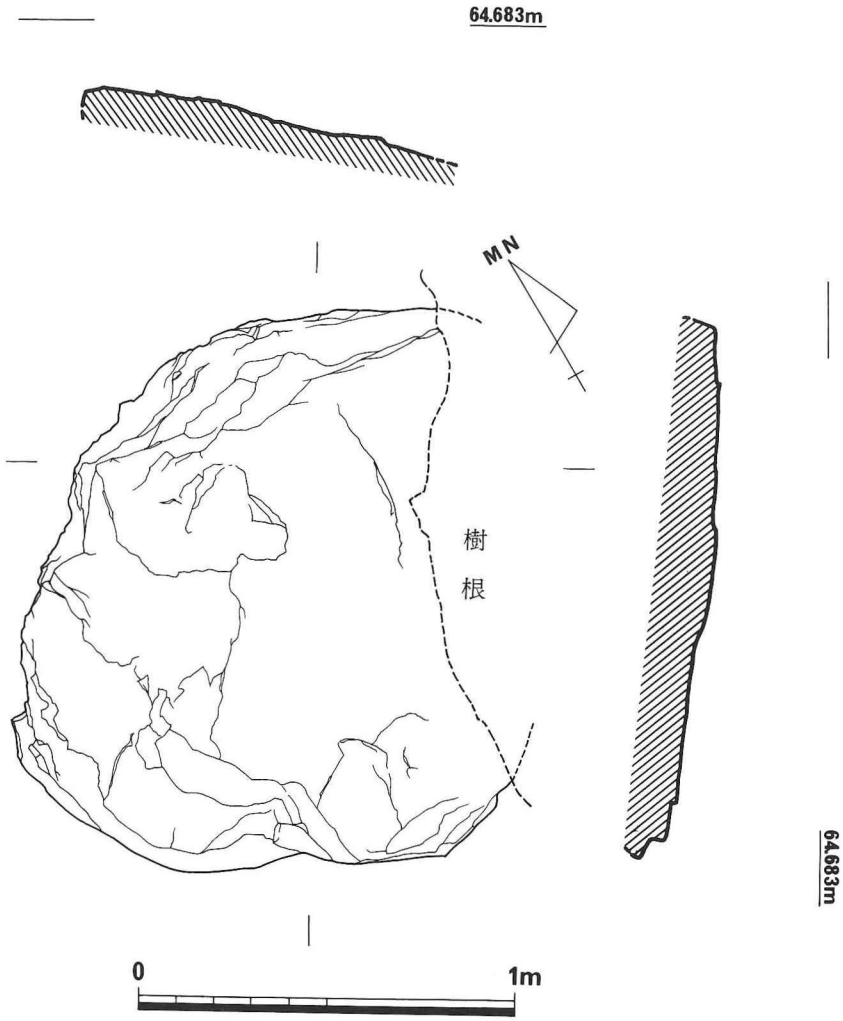
E地点H－6，H－7区の両区にわたって位置する。平面形は円形で，径147センチメートルあり扁平な撑石である。撑石の北側縁に縁を打ちかいた跡がみえ，丸く整形する事を意図したものかもしれない。本撑石は28号石棺の東側小口にかぶさっており，28号石棺の撑石の可能性もある。石材は玄武岩である。（第34図，ＰＬ42）

土　器

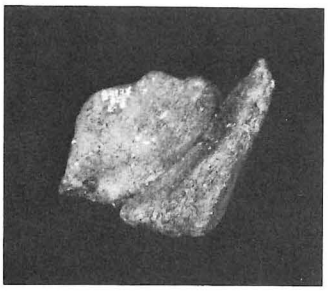
遺構の周辺から壺の底部１点が出土した。若干上げ底で，全体的に暗赤褐色を呈する。器表内面には指頭による押圧がよく残っているが，外面の調整は不明である。（第35図，ＰＬ43）



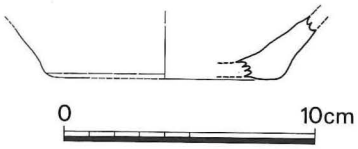
PL. 42　第15号遺構



第34図　第15号遺構実測図



PL. 43　第15号遺構周辺出土土器



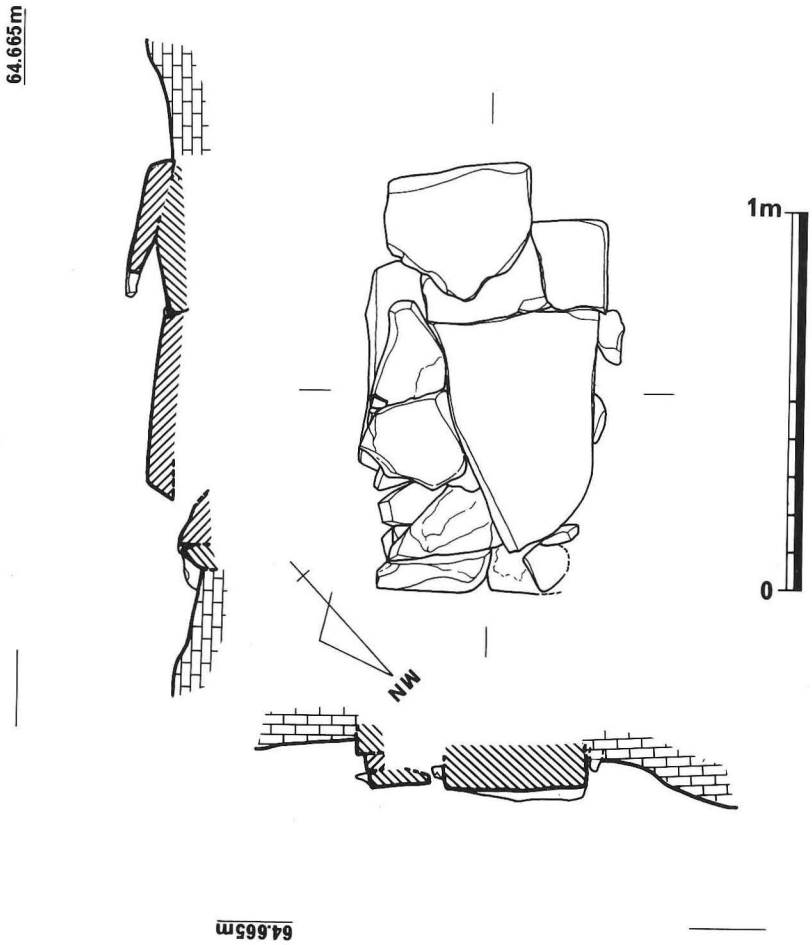
第35図　第15号遺構周辺出土土器実測図

第16号遺構

遺　構

H－6区に位置する遺構である。支石，撑石はなく，長軸方向をN43°Eとする蓋石に覆われた石棺が残る。下部の石棺の構造は全く不明である。西側端に板石1枚を被せ，その下に2枚の板石を置くことによりほぼ全面を覆っている。更に下部にも蓋石と思われる石材が見える。第16号遺構の蓋石は割れている状態のものが多く，下部の状態も確認できないため，数は分らない。北側端に見える長さ55センチメートル程の石材は，直立するように据えられており，石棺の側壁とも思われる。遺物は出土していない。（第36図，ＰＬ44）

PL. 44　第16号遺構（北東から）



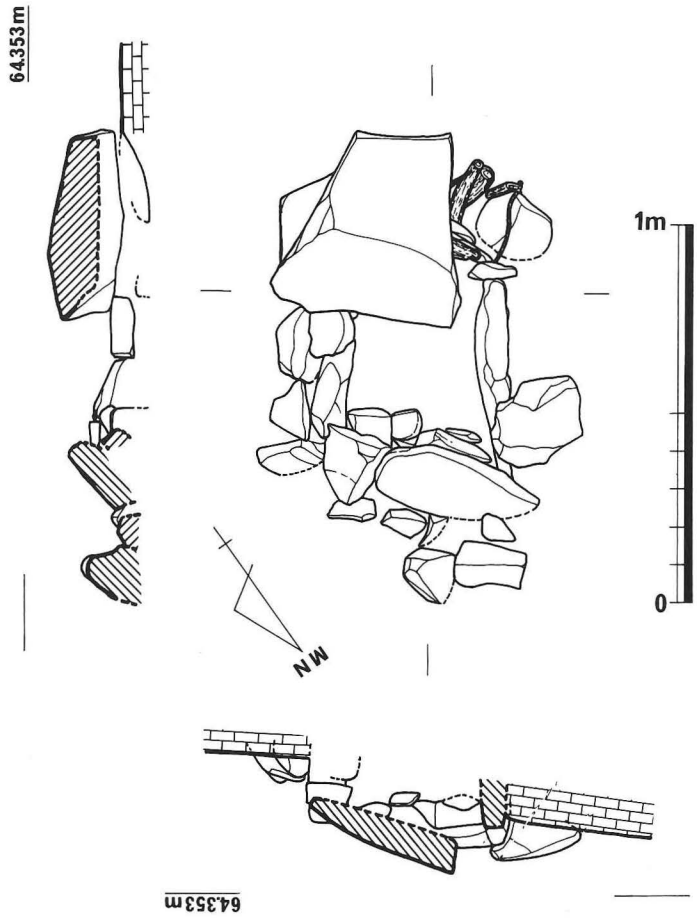
第36図　第16号遺構実測図

第17号遺構

遺　構

Ⅰ－6区の東端にある箱式石棺で，N36°Eを長軸方向としている。撑石はないが，遺構北側に支石らしき石1個がある。石棺の南側小口の上に蓋石が被さっており，細部状況は不明であるが，北側小口，および，東西の両側壁は観察できる。北側小口の板石は，西側では側壁よりも外側に出ており，東側では長さが足りないためか，側壁との隙間に10～20センチメートル程の石を補充している。遺物は出土していない。（第37図，ＰＬ45）

PL. 45　第17号遺構（北東から）



第37図　第17号遺構実測図

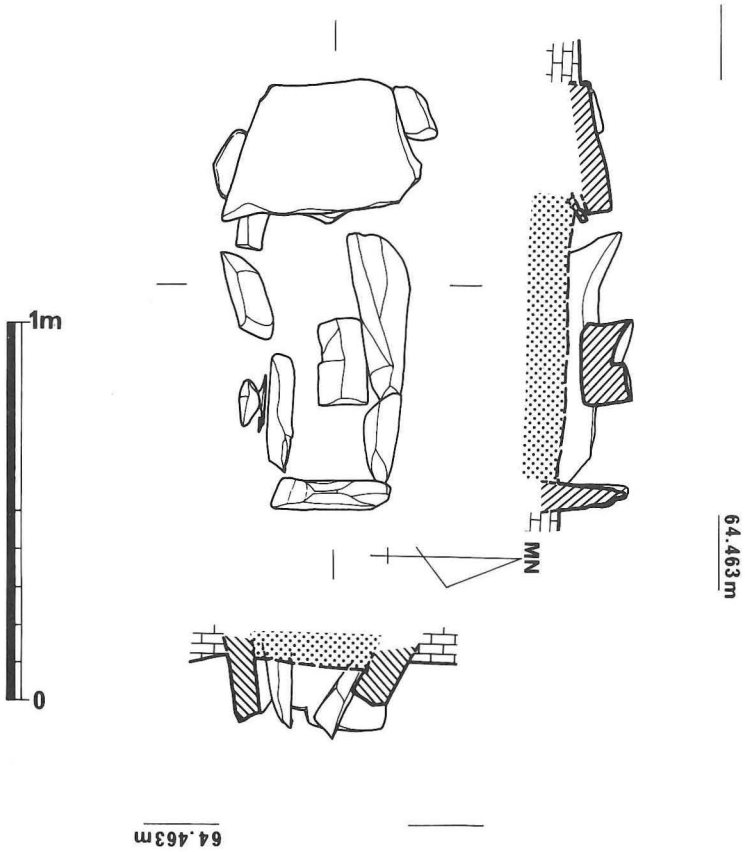
第18号遺構

遺　構

E地点H－6，I－6両区にわたって位置する。長軸方向はほぼ東西，N89°Eである。本遺構は小形で細長い箱式石棺で，蓋石1枚が残っている。内法は西側小口が傾いていてわかりにくいが，長軸がおよそ70センチメートル，短軸が34センチメートルである。側壁材は北側が2枚，南側3枚，東側の小口材1枚，西側を1枚とすると計7枚の玄武岩板状石で構築している。小口材は側壁材の外側に出しており，⊐の形状を呈している。支石，撑石の存否は不明である。

（第38図，PL46）

PL. 46　第18号遺構



第38図　第18号遺構実測図

第19号遺構

遺　構

H－5，H－6区の中央に位置し，第11号遺構，第24号遺構に隣接する。長軸方向を東西（W 7° S）とする箱式石棺で，6枚の板石を組み合わせており，法量は長軸98センチメートル，短軸43センチメートルを計る。支石，撑石はない。各々の板石は，5センチメートル程の間隔を開けて組まれており，板石が接して立てられているのは南側の側壁のみである。北西隅の側壁は倒れてしまっている。東西両方の小口材は，側壁の外側に立てられている。また使用されている板石には北側・東側と南側・西側ではばらつきがみられ，北側・東側の方が大きく，厚みがある。（第39図，ＰＬ47）

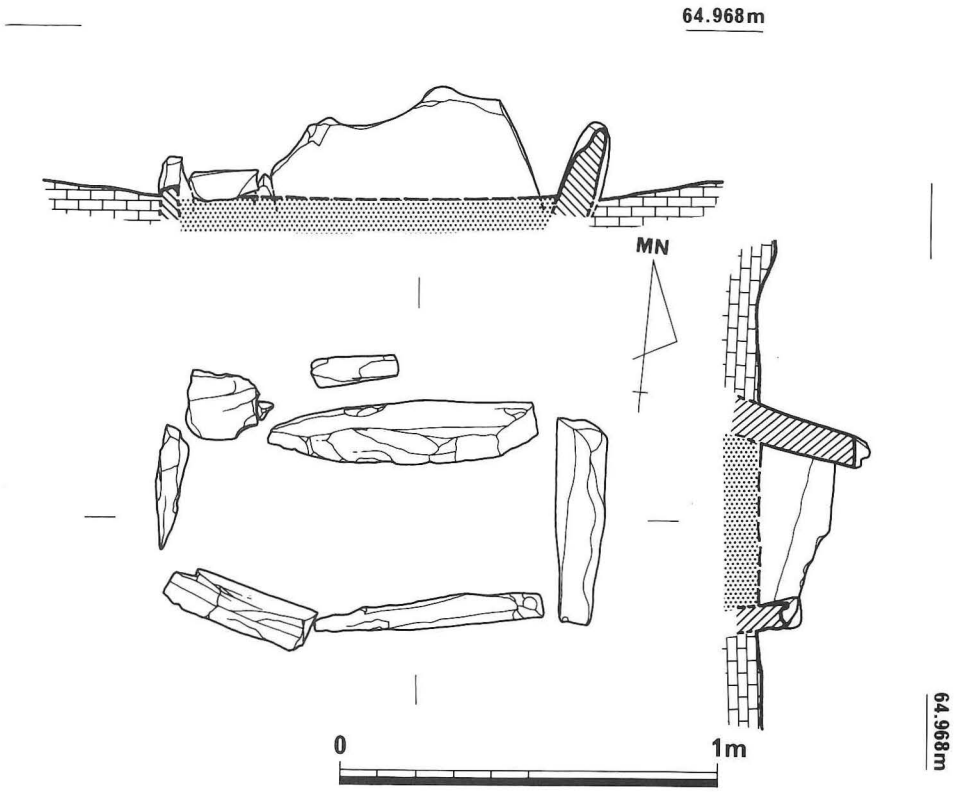
土　器

第19号遺構の西側から土器底部２点が出土している。１は若干上げ底となる甕の底部である。器面は荒れが著しく，所々剝離してしまっている。内面底部に一部指頭で押さえつけた跡がある他は，調整痕は分らない。外面は暗赤褐色，内面は明茶褐色を呈し，胎土中には微小な砂粒を含む。焼成は良くない。断面三角形の底面から外に反りながら立ち上がる底部である。２は上げ底の底部で，底面からの立ち上がりが急であるため，甕と思われる。外面は赤褐色，内面は明茶褐色を呈し，胎土中には３ミリメートル内外程の大粒の砂粒を含む。器表面は荒れており調整痕は明らかでない。焼成も良くない。（第40図，ＰＬ48）

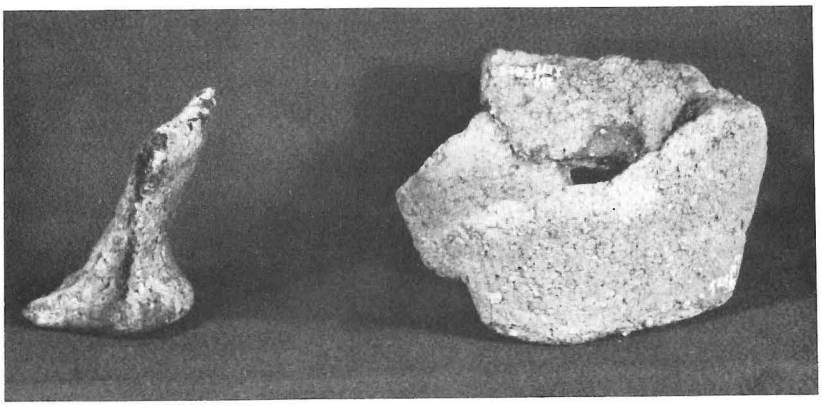
石　器

土器と同じく第19号遺構の西側から磨石が出土している。灰色の玄武岩製で半分以上欠損している。片面は平になっているが，反対の面は丸味をおび，頭頂部がわずかにくぼんでいる。重量は405グラムを量る（第41図，ＰＬ49）

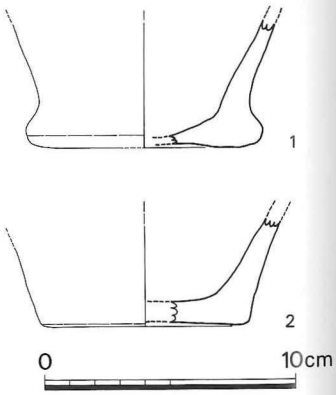
PL. 47　第19号遺構



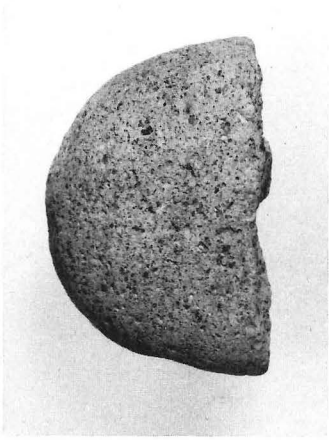
第39図　第19号遺構実測図



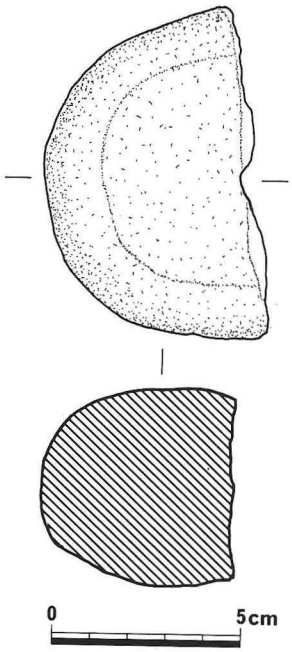
PL. 48　第19号遺構周辺出土土器



第40図　第19号遺構周辺出土土器実測図



PL. 49　第19号遺構周辺出土石器



第41図　第19号遺構周辺
出土石器実測図

第20号遺構

遺　構

E地点J－5区において検出した。長軸方向はN28°Wである。内法は長軸94センチメートル，短軸47センチメートルであり，側壁材は東側1枚，西側2枚，小口材2枚の計5枚の玄武岩板状石で箱式石棺を構築している。北側の小口材は側壁の外側に出しており⊏⊐の形状を呈している。石棺の蓋石はなく，支石らしき石が西側側壁のそばにある。撑石の存否は不明である。

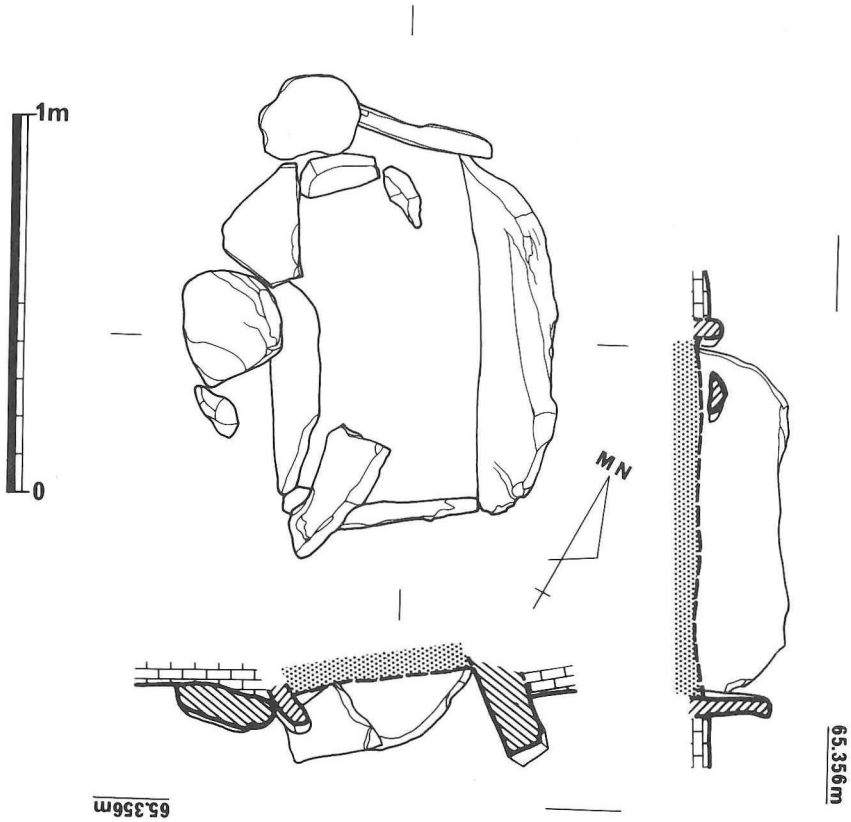
（第42図，PL50）

自然遺物（PL51）

本遺構の棺内からチャートの原礫1点が出土した。濃い紫紅色の径4センチメートル程度の不整形な原礫である。研磨などの加工痕はないが,「八の久保砂礫層」に含まれるものである。

PL. 50　第20号遺構

PL. 51　第20号遺構出土
チャート原礫



第42図　第20号遺構実測図

第21号遺構・第27号遺構

遺　構

共にH－6，Ⅰ－6区に位置し，第11号遺構，第12号遺構，第16号遺構に隣接する。

第21号遺構は，長さ40～50センチメートル程の石を重ねた積石状のものであり，周囲に，支石と思われる塊石2個がある。積石状のものは，遺構のある面よりも浮いた状態であり，巨石との高さの差は10～15センチメートルにもなる。下部は樹根が入り込んでいるため，検土杖による精査もできず，積石状のものの性格ははっぎりしない。

第27号遺構は，第21号遺構の西側にあり，石棺の蓋石と思われる板石2枚が確認できる。樹根の下にあるため，詳細は不明である。（第44図，ＰＬ52）

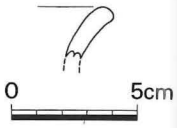
PL. 52　第21号遺構・第27号遺構

土　器

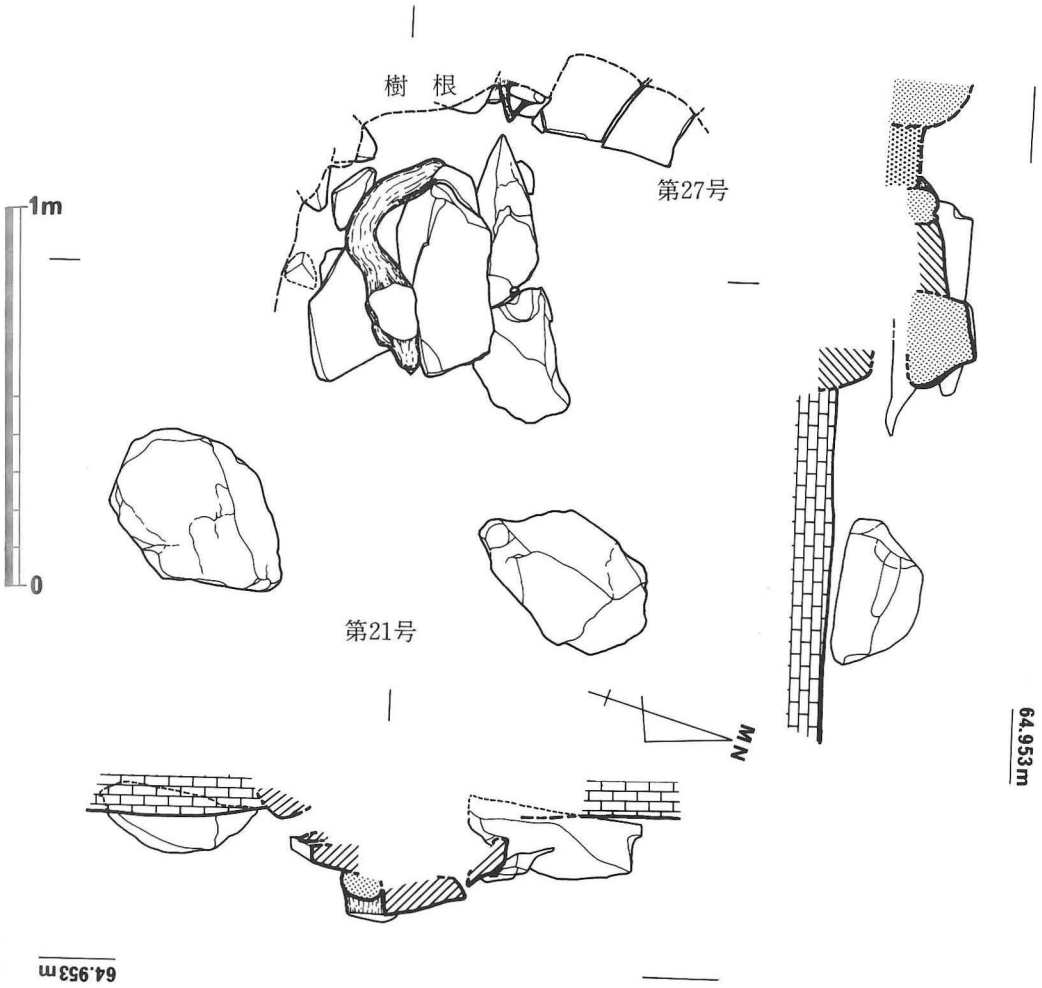
第21号遺構の周辺から甕の口縁と思われる土器片１点を採集している。外面は茶褐色を呈する。表面は荒れており，調整痕はわからない。焼成は良くない。

（第43図，ＰＬ53）

PL. 53　第21号遺構周辺出土土器



第43図　第21号遺構周辺出土土器実測図



第44図　第21号遺構・第27号遺構実測図

第22号遺構

遺　構

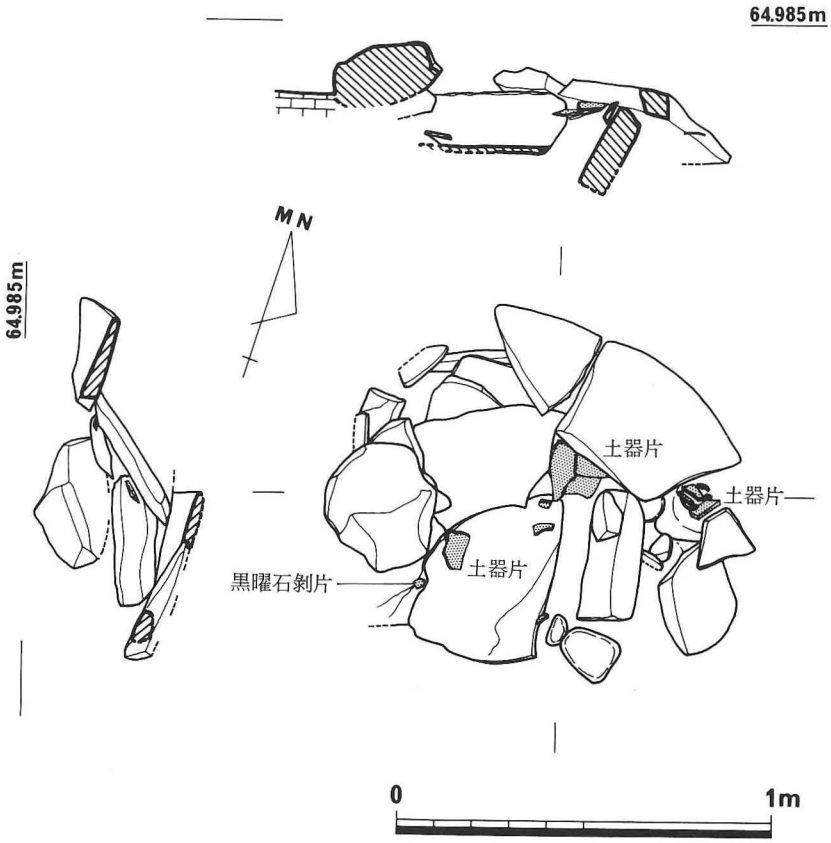
E地点のH－6区の北辺において検出した。人頭大の支石2個を残しており，下部構造は箱式石棺であり，方形に近い形状を呈している。未発掘であり定かではないが，6枚程度の板状石が，折り重なった状態で棺内に落ちており，長軸方向は東西に近い。折り重なった板状石群の間に大ぶりの土器片があり，旧状は遺構上に置かれていた可能性がある。

（第45図，ＰＬ54）

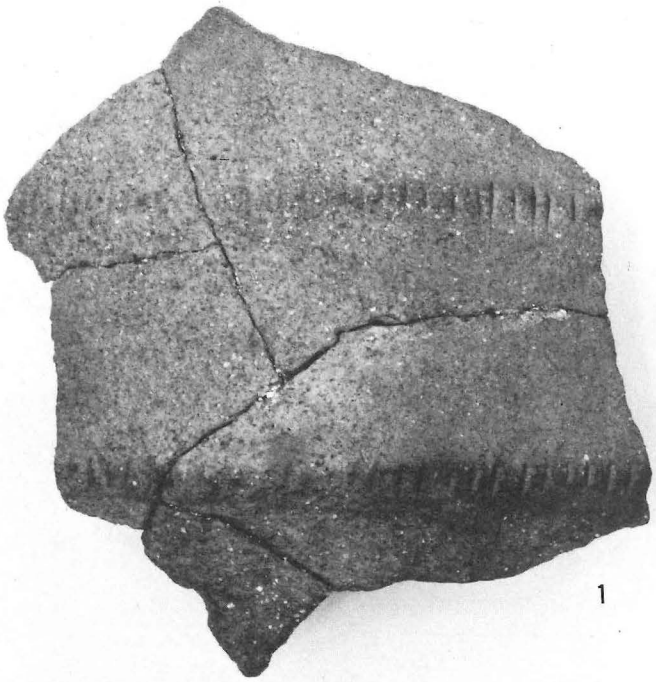
土　器

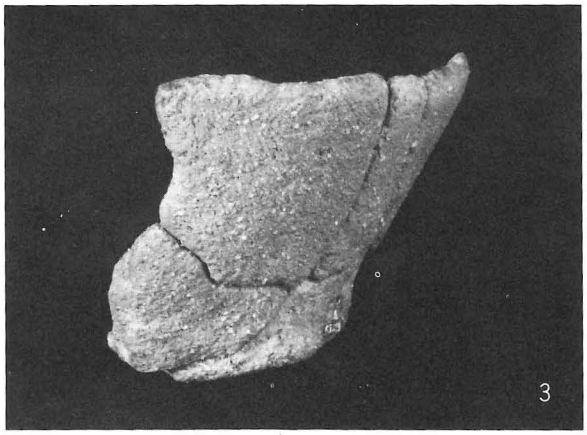
第46図およびＰＬ55に示した土器が遺構の上面および石材間にあった。**1**は推定径28.6センチメートルを計る。胴部に微弱なふくらみをもつ刻目突帯をめぐらした甕形土器と考えられる。上部突帯以上はゆるく内傾しながら立ち上がり，ゆるく外反する口縁部になるらしい。下段の突帯の所で逆「く」の字形に折れ，底部に連なる。刻目突帯は微弱であり，特に上段の突帯は弱い。茶褐色の胎土に石英粒の混入が見られる。**2**は１と同一個体と考えられる。**3**は甕形土器の底部で，底部径11センチメートルを計る。立ち上がりは直線的で，１・２の底部であった可能性がある。器壁はいずれも粗く，器面の調整方法は不明である。**4**は立ち上がりの弱い底部片で，壺形ないし碗形土器と考えられる。

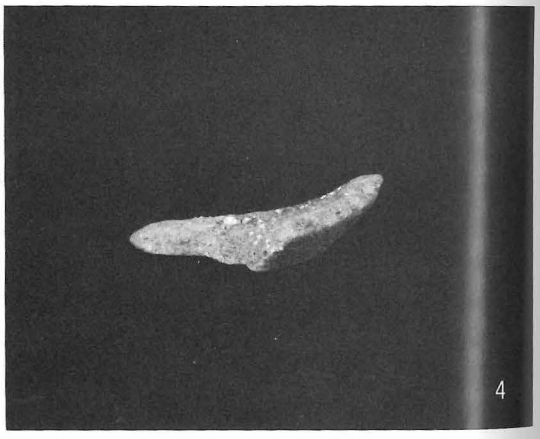
PL. 54　第22号遺構



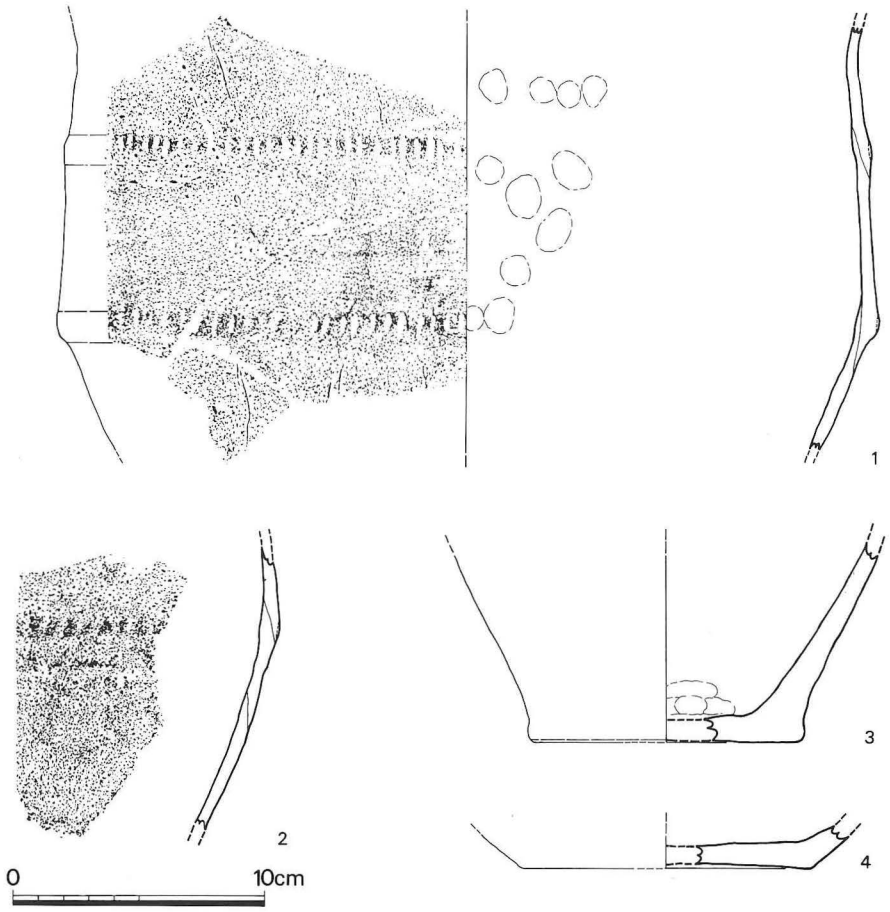
第45図　第22号遺構実測図







PL. 55　第22号遺構出土土器



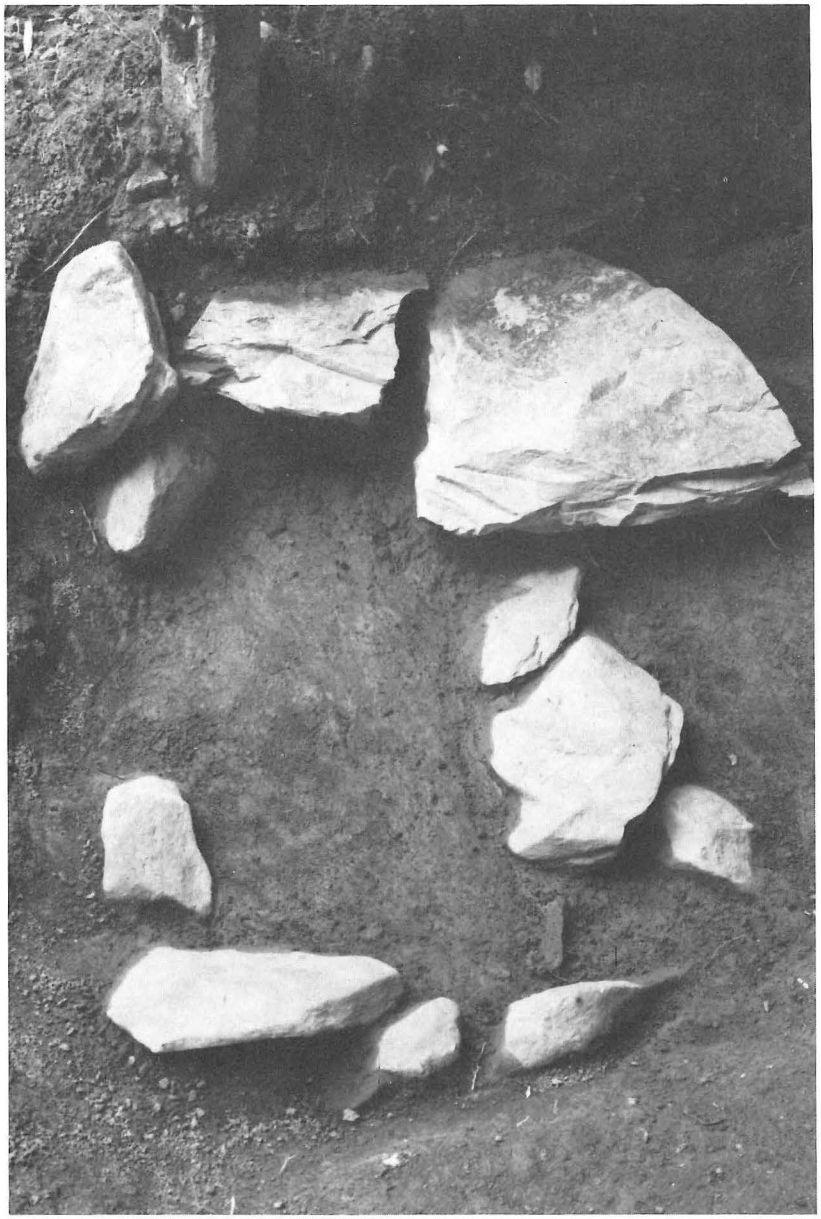
第46図　第22号遺構出土土器実測図

第23号遺構

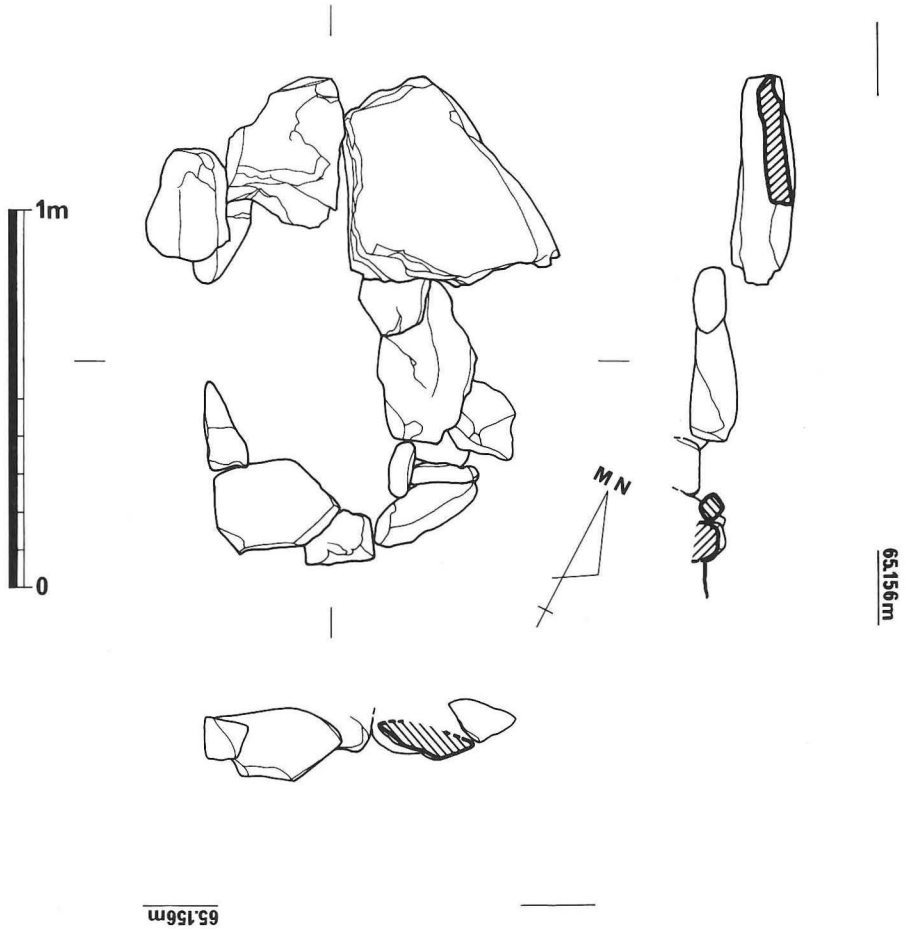
遺　構

E地点I－5区南東隅において検出した。N25°Wを長軸方向とする石棺と考えられる。蓋石1枚を含め，およそ80×50センチメートルの範囲に棺材がある。南側の小口材や側壁材の一部は現存している。石棺の形状は損壊しておりよくわからない。支石，撑石の存否は不明である。

（第47図，PL56）



PL. 56　第23号遺構（南から）



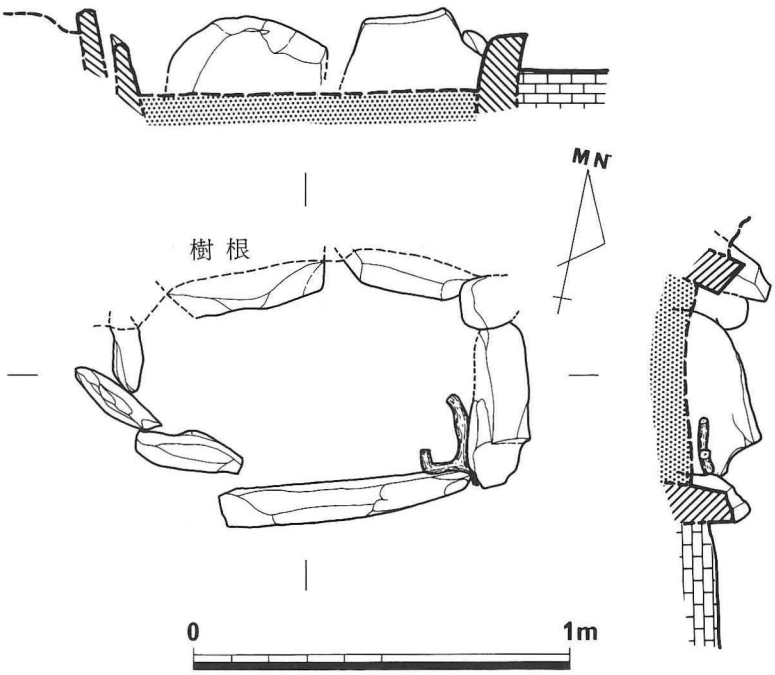
第47図　第23号遺構実測図

第24号遺構

遺　構

E地点H－5区において検出した。長軸方向はN78°Eである。内法は長軸87センチメートル，短軸54センチメートル，側壁材は北側2枚，南側3枚，小口材は東側2枚，西側1枚の計8枚の玄武岩板状石で箱式石棺を構築している。小口材は東側の片側だけ側壁の外に出しており，五角形の形状を呈している。石棺の蓋石はなく，支石，撑石の存否も不明である。（第48図，PL57）

PL 57 第24号遺構



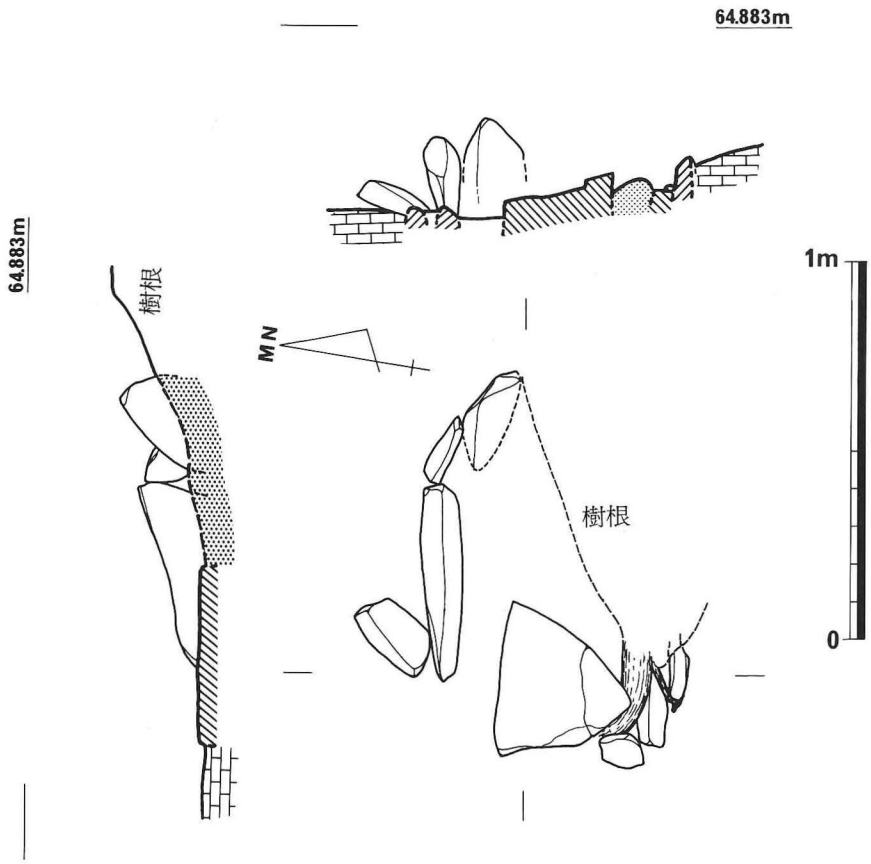
第48図　第24号遺構実測図

第25号遺構

遺　構

G－5区，H－5区に位置しており，第24号遺構，第26号遺構に隣接する。撑石，支石はなく，長軸方向を，ほぼ東西（N83°E）とする箱式石棺が，東側を樹根で覆われた状態で遺存している。蓋石1枚，側壁材5枚，補強材2個が確認できるが，西側の小口付近は，昭和30年代に造られた農道のために削り取られてしまったようで現存しない。側壁材は一部重ね合わせる組み方がとられており，大きな側石は外側から補強材をあてがい傾くのを防いでいる。側壁間の間隔は57センチメートルを計る。遺物は出土していない。（第49図，ＰＬ58）

PL. 58　第25号遺構（西から）



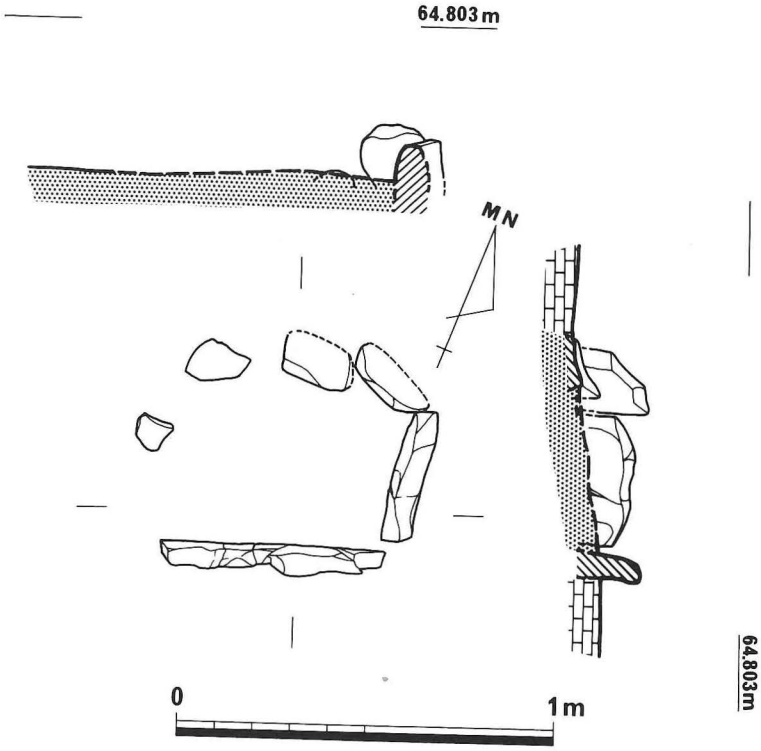
第49図　第25号遺構実測図

第26号遺構

遺　構

G－5区の南端に第25号遺構と並ぶように位置した箱式石棺である。撑石，支石はなく，小口材1枚，側壁材3枚のみが残る。石棺の西半分は，第25号遺構と同様，農道により破壊されたようであり，現存していない。現状では，小口は側壁の間に組み込まれ，北側の側壁1枚は倒れている。側壁間の間隔は49センチメートルを計る。長軸方向はN69°Eである。遺物は出土していない。（第50図，PL59）

PL. 59　第26号遺構

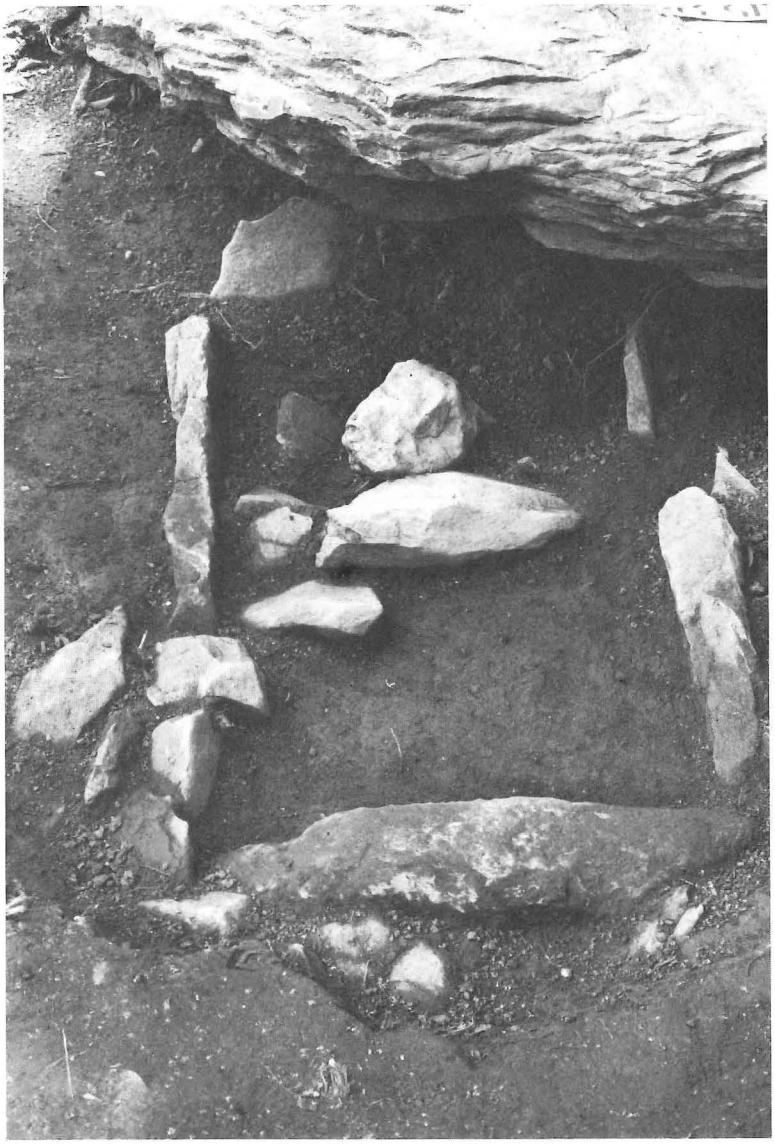


第50図　第26号遺構実測図

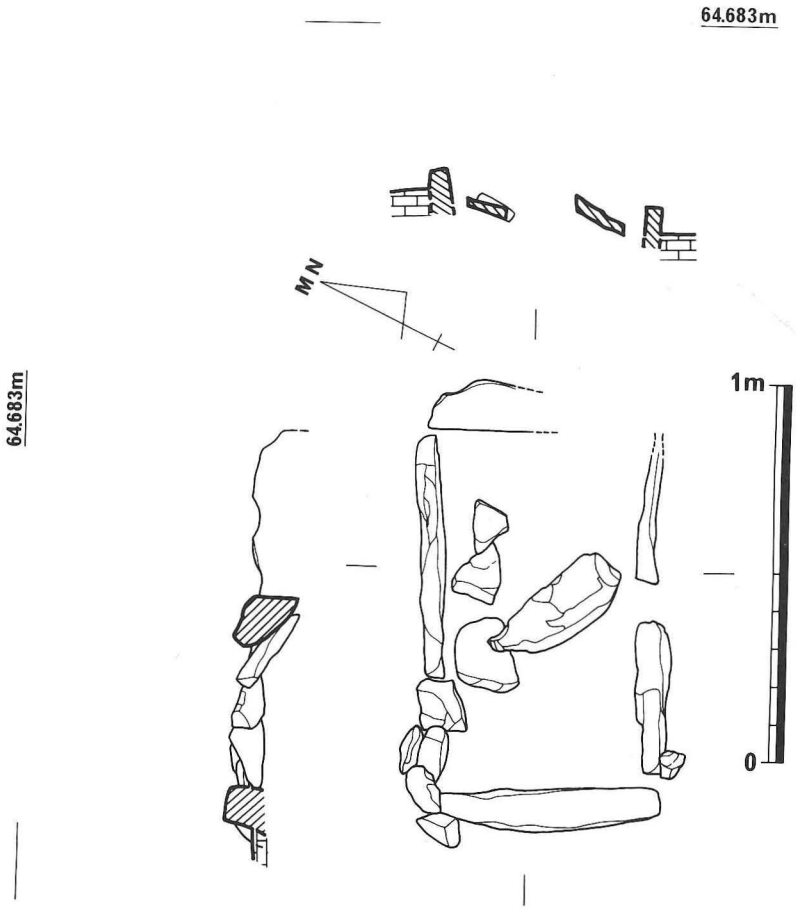
第28号遺構

遺　構

Ｅ地点北東隅において検出した。長軸方向はＮ65°Ｅである。内法は長軸95センチメートル，短軸54センチメートルである。北側の側壁材は３枚，南側は２枚，小口材は２枚の計７枚の玄武岩の板状石で箱式石棺を構築している。小口材は側壁材の外側に出しており⊢⊣の形状を呈している。なお本遺構は15号遺構（撑石）の下部構造の可能性がある。蓋石はなく，支石の存否も不明である。（第51図，ＰＬ60）



PL. 60　第28号遺構（西から）

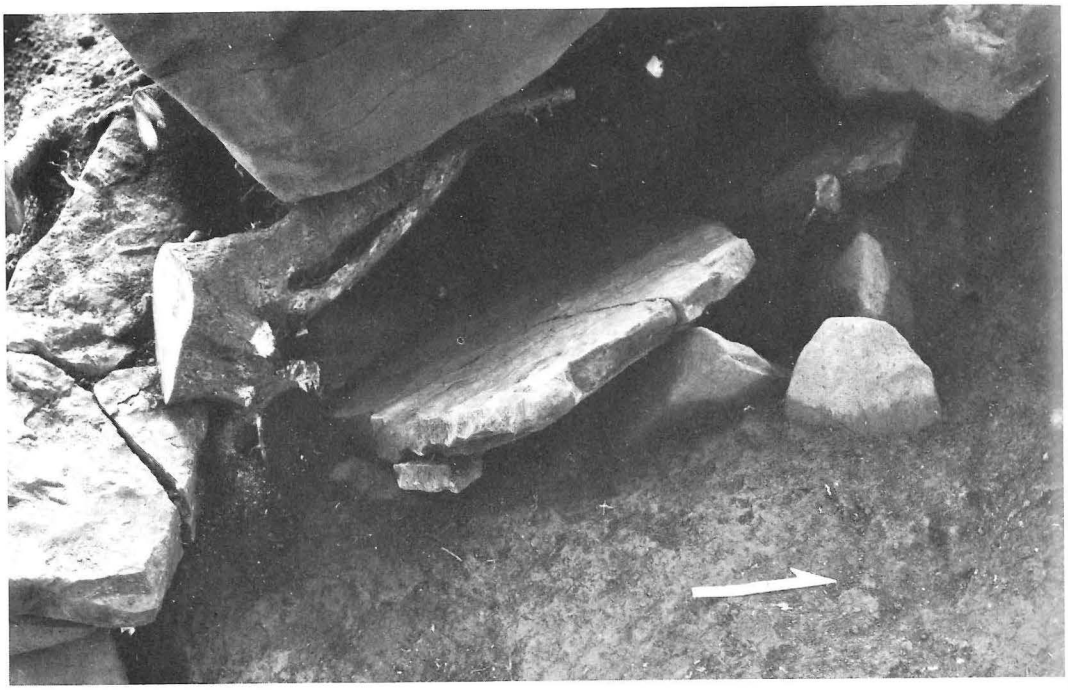


第51図　第28号遺構実測図

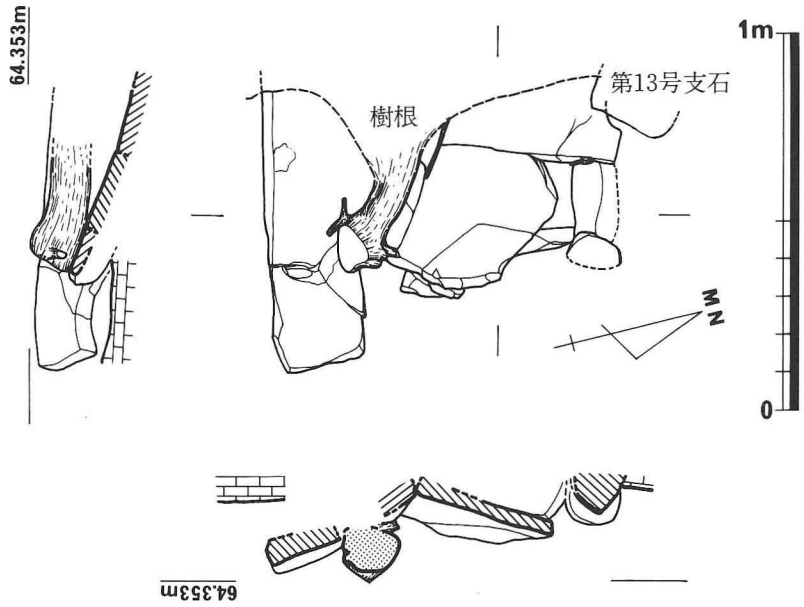
第29号遺構

遺　構

Ⅰ－6区のほぼ中央，第13号遺構下の西側に位置した箱式石棺である。周囲には第12号遺構，第14号遺構，第17号遺構がある。現状では，蓋石，側壁，小口の一部が確認できる。蓋石は幾つにも割れている様子で，元はかなり大きな板石であったと思われる。又，この遺構は，蓋石の北端が第13号遺構の支石の下になっており，第13号遺構の下部構造と考えられるが，土砂や樹根に隠されている所があり断定はできない。遺物は出土していない。（第52図，ＰＬ61）



PL. 61 第29号遺構（東から）



第52図　第29号遺構実測図

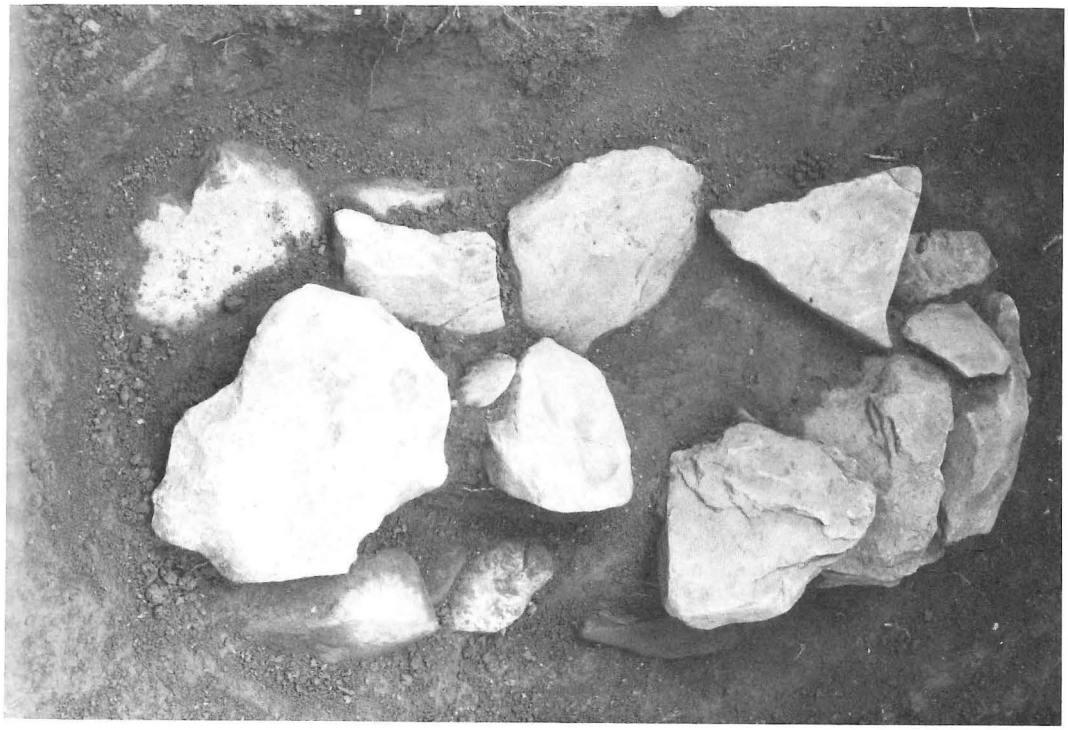
第30号遺構

遺　構

Ｅ地点のＦ－７区南西隅において検出した遺構である。遺構長軸はほぼ東西でN81°Wである。玄武岩板状石の蓋石は２枚が棺身内に落ちこんでおり，小ぶりの板石が重ねられているところからすれば，積石状に被覆された旧状が考えられる。本遺構が石棺であることは事実であるが，棺身規模等は未発掘のため不明である。（第54図，ＰＬ62）

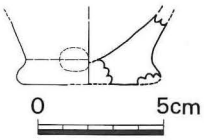
土　器

第53図およびＰＬ63に示した土器が直接周辺から出土した。推定径5.6センチメートルの平底で甕形土器の底部である。平底で，立ち上がりはスムーズで直線的である。外面は赤褐色，内面は茶褐色で，胎土に石英等の微粒混入物がある。器面はやや荒れているが焼成はよい。

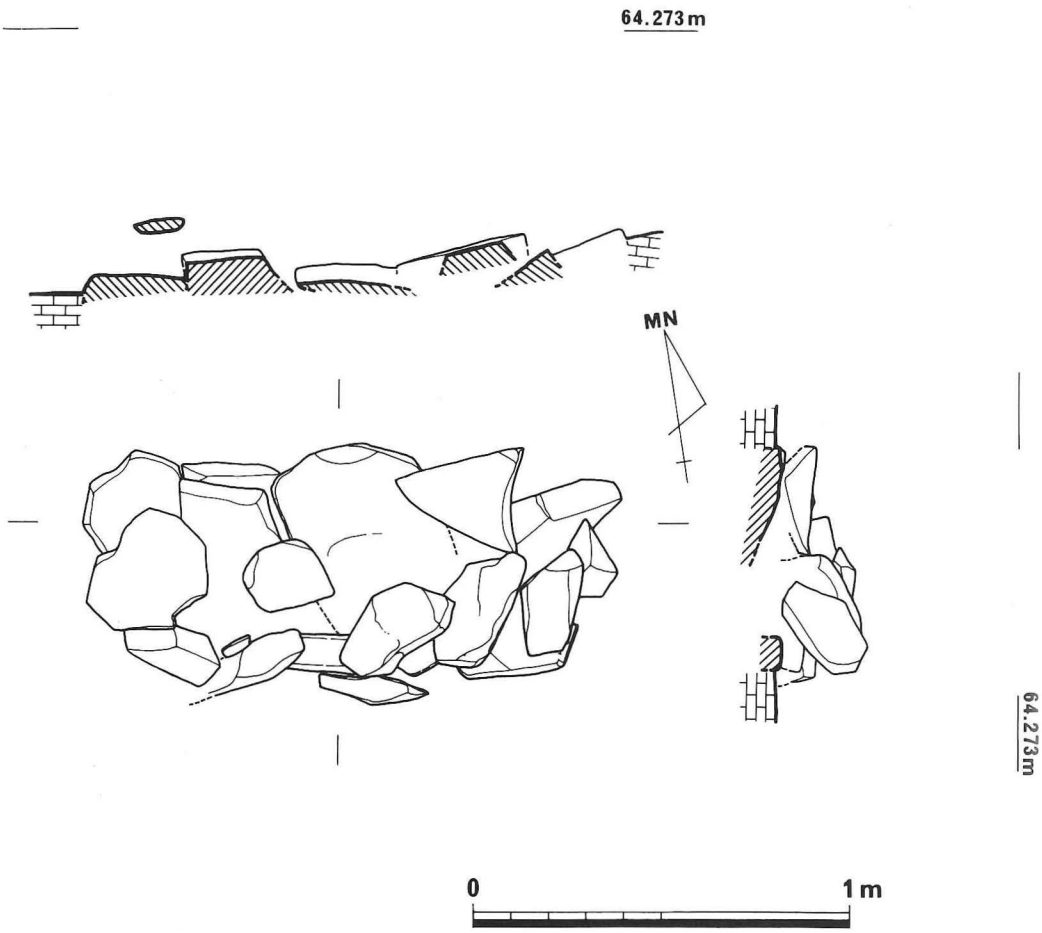


PL. 62　第30号遺構

PL. 63　第30号遺構周辺出土土器



第53図　第30号遺構周辺出土土器実測図



第54図　第30号遺構実測図

第31号遺構

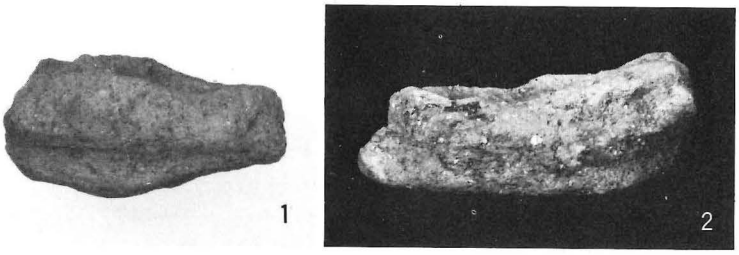
遺　構

Ｊ－９区の北東隅に位置し，第20号遺構と共に大野台遺跡Ｅ地点の遺構分布の南限をなす。第31号遺構は，Ｅ地点の中でも最も標高の高い所にある石棺である。長軸方向は，N55°Wと東西に近い。支石，撑石はなく，６枚の石材をほとんど重ならないように六角形に組み，大きな側壁には傾くのを防ぐため補強材を内外に据えている。東側の側壁１枚は棺内に入り込んでおり側壁間のすき間が大きく，別に石材をあてがっていたとも考えられる。（第56図，ＰＬ64）

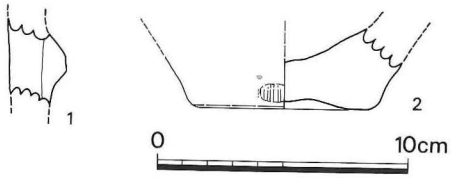
土　器

第31号遺構の周辺から２点の土器片が出土している。**1**は甕棺胴部の突帯である。断面が台形を呈する貼付突帯で，下部には横方向の刷毛目が残る。その他の調整は不明である。全体的に明赤褐色を呈し，焼成は良好である。**2**は上げ底の甕の底部である。器表外面は縦方向の刷毛目調整を施しているが，内面は荒れが著しく調整は不明である。胎土は大粒の砂粒を含み茶褐色を呈する。焼成は良くない。（第55図，ＰＬ65）

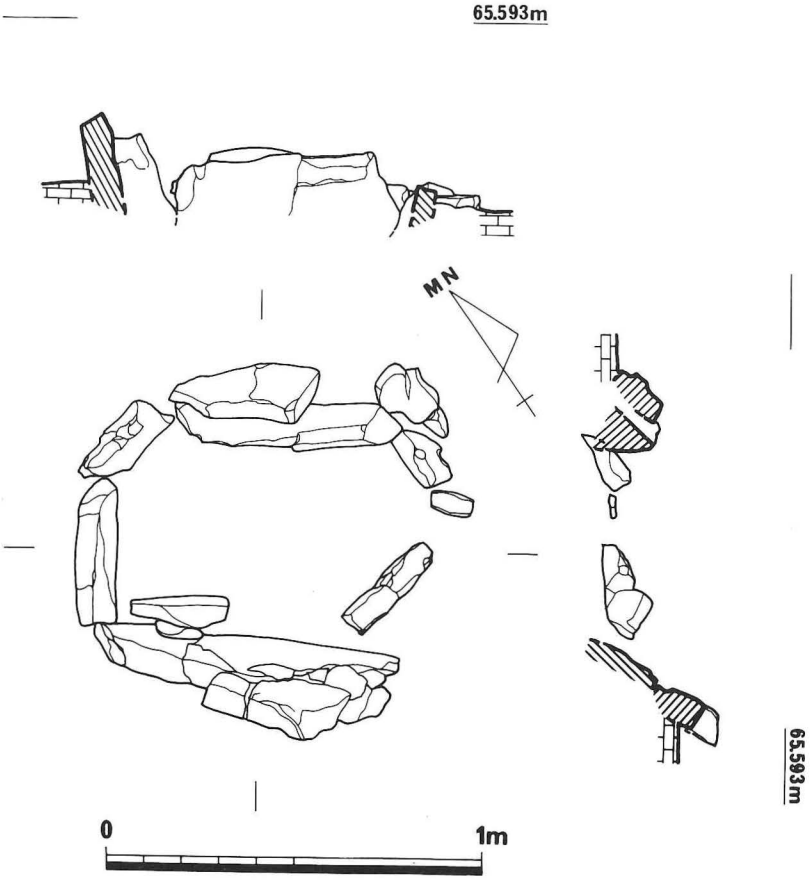
PL. 64　第31号遺構



PL. 65　第31号遺構周辺出土土器



第55図　第31号遺構周辺出土土器実測図



第56図　第31号遺構実測図

第32号遺構

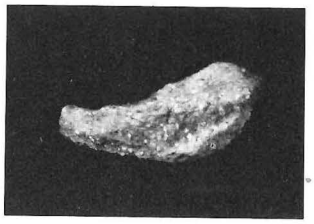
遺　構

Ｅ地点Ｂ－５区北西隅において検出した。長軸方向はほぼ東西N84°Wである。内法は長軸35センチメートル，短軸17センチメートル，極小形の箱式石棺で，側壁材２枚と小口材２枚の玄武岩板状石で構築している。小口材は側壁材の外側に出しており，▭の形状を呈し，古い石棺の形状をとどめている。石棺の蓋石はなく，支石，撑石の存否は不明である。（第58図，ＰＬ66）

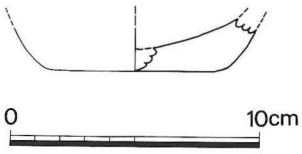
土　器

本遺構の棺内から出土した遺物はないが，本遺構周辺から出土した土器底部１点がある（第57図，ＰＬ67）。壺の底部と考えられ，推定径８センチメートル程度である。器壁は底部中央部位で厚さ８ミリメートル，立ち上がり部で９ミリメートル程度を計る。胴部への立ち上がりは急である。赤褐色の胎土中に石英の微粒を混入している。器壁が荒れていて器面調整の手法はわからない。

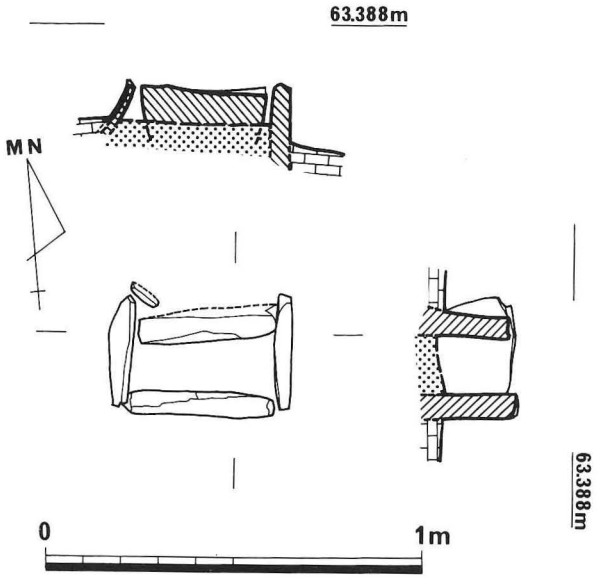
PL. 66　第32号遺構



PL. 67　第32号遺構周辺
出土土器



第57図　第32号遺構周辺
出土土器実測図



第58図　第32号遺構実測図

第33号遺構

遺　構（第59図，ＰＬ68）

Ｅ地点Ｂ－４区の北東隅に遺跡発見当時から巨石の一部が露出していたが，発掘調査によって遺構を確認した。長軸をほぼ東西にして，長方形の四角に40×30センチメートル程度の礫を配し，その間に人頭大以下の玄武岩扁平礫ないし板状石を無秩序に積みあげ，東辺に不整形の巨礫が乗った状態で検出した。内部の状態は未発掘であり不明であるが，元来は四角に配した角礫の間に板状石を小口積みにしてドーム状の空間を構築し，東辺に現存する巨礫を乗せていた可能性がある。板状石は最上部の巨礫の重みによって破砕されたものと考えられる。

土　器

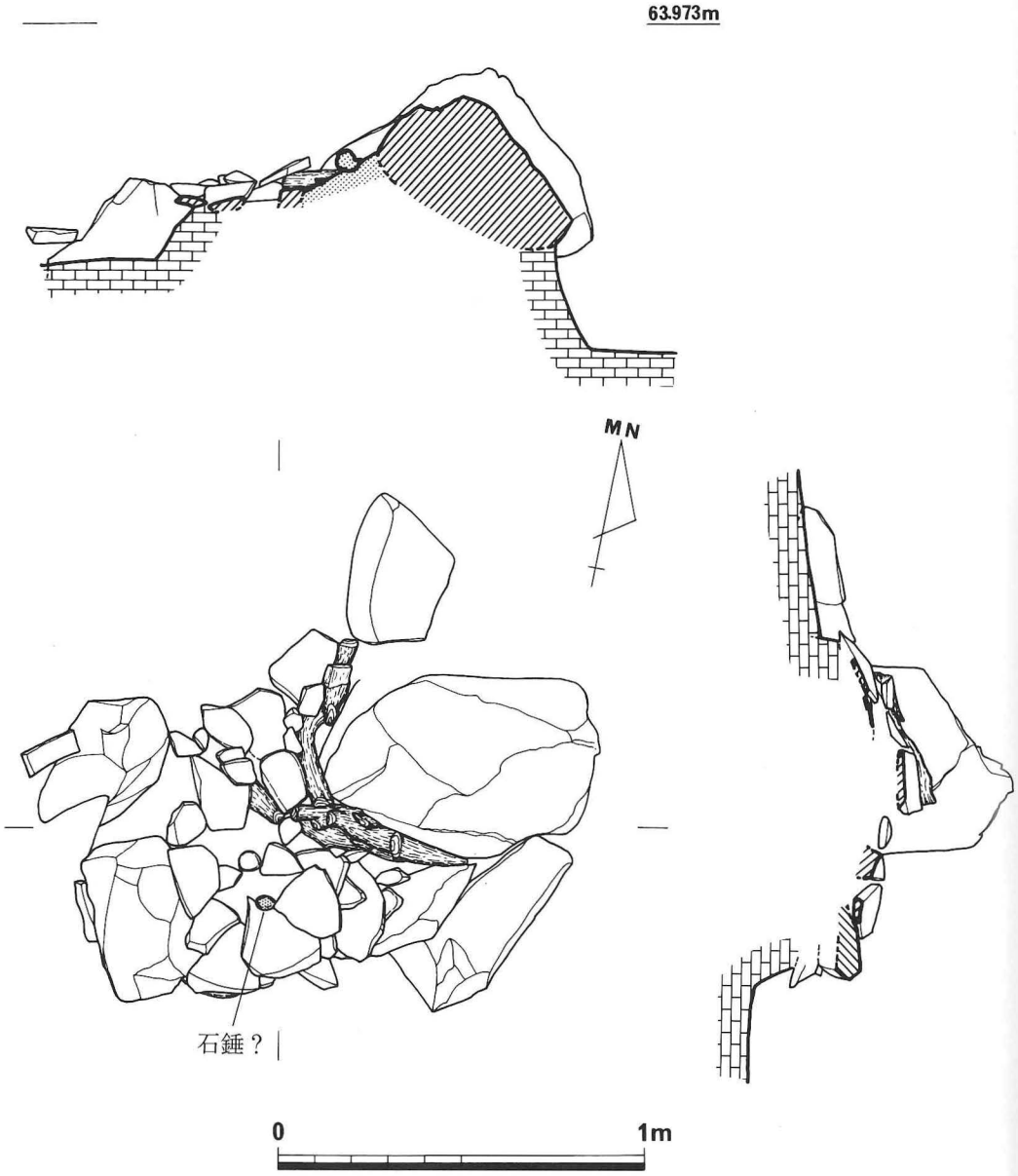
土器の底部１点が積石の南辺において底部を上にして出土し，遺構周辺から胴部突帯部分１点が出土した。（第60図，ＰＬ69）

同図１は，甕形土器の突帯部である。突帯下際での厚さ12ミリメートル，上際で10ミリメートルを計る。貼付突帯は断面形が下際に片寄った台形を呈する。赤褐色の胎土には石英微粒が混入している。同図２は甕形土器の底部である。底面は径８センチメートル程度で平底である。内側は指頭ないし鈍端の工具による調整が施され，器壁外側には縦位の刷毛目調整がある。底部外側には指頭による調整が施されている。茶褐色の胎土には粗い石英粒の混入が見られる。

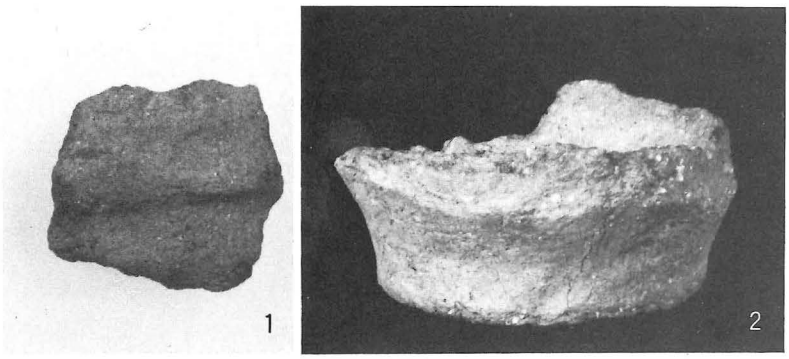
石　器

第61図およびＰＬ70の砂岩製石器１点が石積みの中から出土した。径５センチメートル弱の扁平礫を縦に半割した形状であるが，辺縁に二次加工がある。図の下際にも粗い打ち欠きがあり，石錘の損傷したものと考えられるが明瞭でない。

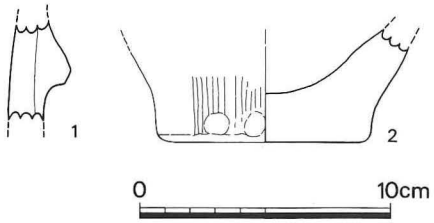
PL. 68　第33号遺構



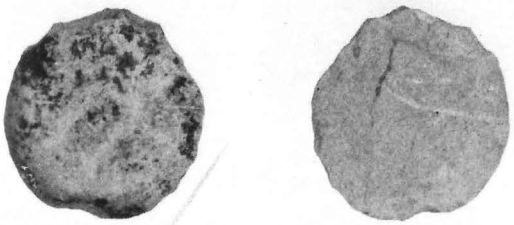
第59図　第33号遺構実測図



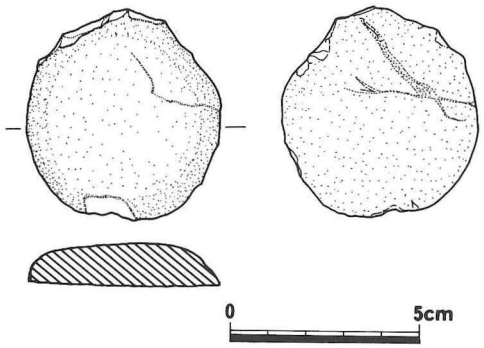
PL. 69　第33号遺構周辺出土土器



第60図　第33号遺構周辺出土土器実測図



PL. 70　第33号遺構出土石器



第61図　第33号遺構出土石器実測図

第34号遺構

遺　構

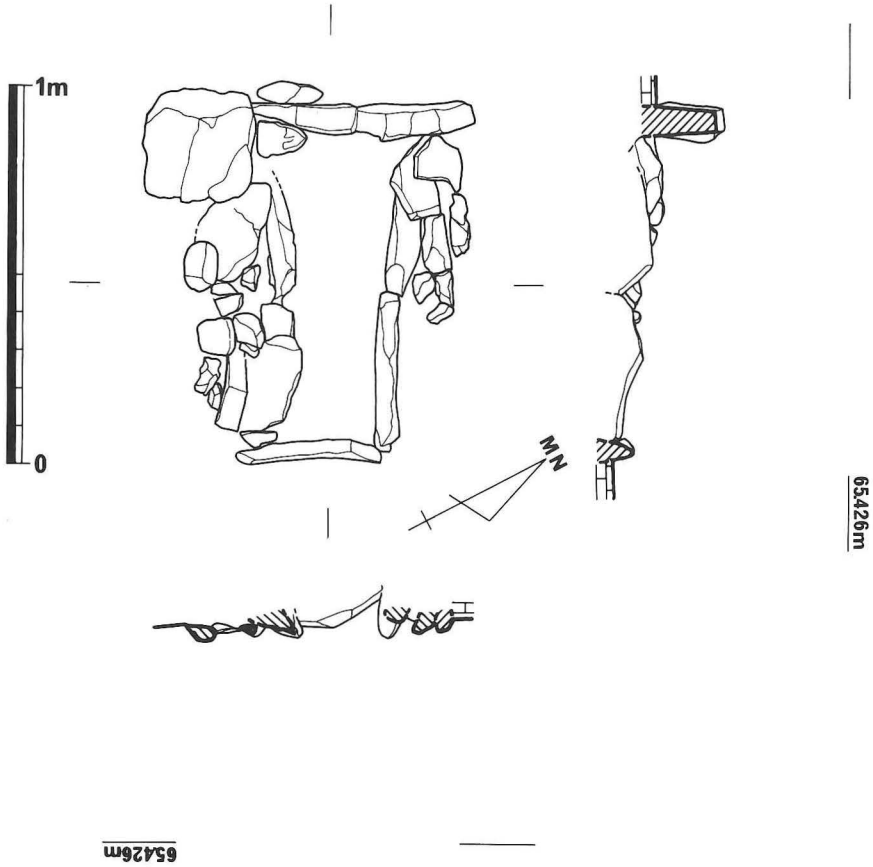
E地点のI－4・I－5区の中間において検出した箱式石棺である。検出地点は，かって農道がとおっていた場所にあたり，重機械使用による損傷が見られるが，全容は十分把握できる遺存状態である。撑石は失われているが支石が1個遺存し，本遺構が支石墓の下部遺構であっ

たことを明示している。長軸方向はN63°Wである。石棺の蓋石は，重機械の圧力によって破砕されており，残片が一部遺存している。棺身の側壁材および小口材も重機械使用の影響をかなり受けており，西側小口材は二分しているが長軸内法82センチメートル，短軸内法35センチメートルの規模は把握し得る。（第62図，ＰＬ71）

土　器

遺構周辺において第63図およびＰＬ72に示した土器３点を検出した。**1**は器面が荒れているが，甕形土器の口縁部である。断面は逆「L」字形をしておて，口縁端は平縁でなく，ややカーブする。黄灰色の胎土に石英の微粒を混入している。**2**は甕形土器底部で底面の推定径10.3センチメートルを計る。赤褐色の胎土に微細な長石粒を混入し，焼成は堅緻である。**3**は平底で，立ち上がりのゆるい壺形土器と考えられる。推定径は8.5センチメートルを計る。

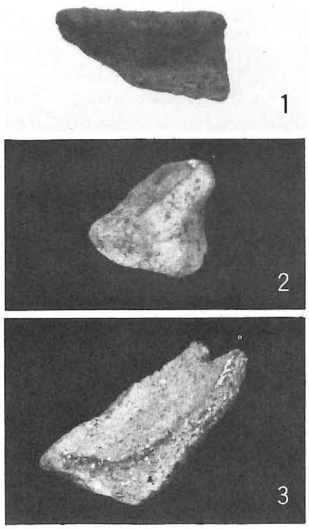
PL. 71　第34号遺構

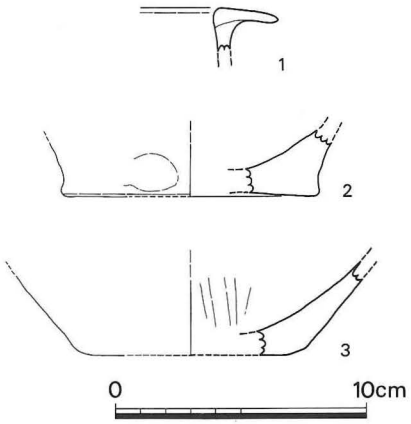


第62図　第34号遺構実測図

PL.
72

第34号遺構周辺出土土器





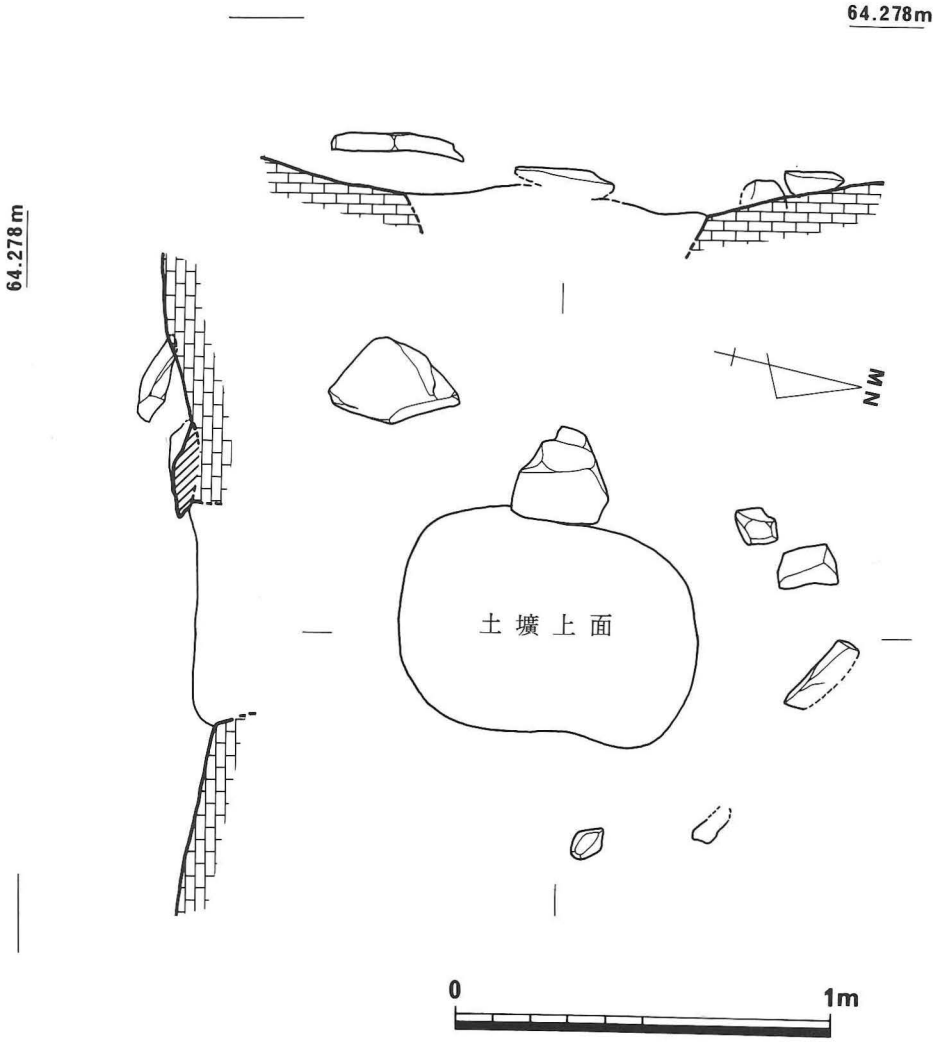
第63図　第34号遺構周辺出土土器実測図

第35号遺構

遺　構

G－6区，G－7区の北に位置し，第7号遺構，第8号遺構，第30号遺構と隣接する。撑石はすでに取り去られており，支石らしい扁平な石2個が遺存している。東寄りの支石付近を清掃中，支石に接するように，南北80センチメートル，東西63センチメートルの楕円形の土壙を検出した。この土壙は，第14号遺構の土壙に比べ，短軸はほぼ同じ位であるが，長軸は10センチメートル程長い。又，土壙の周囲には10～20センチメートルの大きさの石が土壙を取り巻くように並ぶ。なお，この遺構から遺物は出土していない。（第64図，ＰＬ73）

PL. 73　第35号遺構



第64図　第35号遺構実測図

第36号遺構

遺　構

E地点B－3区東南隅において検出した。玄武岩の巨大な自然石2個が並行して直立するが北側の巨石は突出しており，南側の巨石は茶褐色土層（第2層）に埋没した状態で直立してい

る。北側の巨石より上面が30センチメートル弱低く，上面はやや平担である。さらに北側の巨石の背後（北側）には，人頭大の礫３個があり，巨石を支えているかのように密着しているが未調査のため巨石と人頭大の礫群が人工のものか天工の配列か判然としがたい。南側巨石の下際から不整形の土壙が掘られており，壙底には拳大の礫数個があり，土器片が集中的に出土した（第65図，ＰＬ74～76）。同一個体と考えられる土器片が並立する巨石の間隙と北側巨石の下際にも，それぞれ少量認められ，土壙中に集中する土器は，かって北側の巨石の上にあった可能性を留保しておきたい。なお，土壙内における土器片群中央部，南側巨石寄りに広形銅矛の袋部１点を検出した（ＰＬ74・75）

土　器（第65図，ＰＬ77～79）

並立する巨石南側において，第２層面から切りこまれた浅い土壙内に集中的に土器片を検出し，巨石の間隙と北側にも数片の出土があった。**1**は口唇部径19センチメートルの甕形土器口縁であり，胴部の張りは弱い。断面は逆「Ｌ」字形を呈しており，胎土には石英の微粒を混入している。**2**は土壙辺に近い位置で検出したもので，強く外反する壺ないし坏の口縁部である。口唇下際に弱い沈線を一条横走させる。胎土は黄褐色で堅緻，混入物はごく微量である。**3**は，ゆるくくびれた頸部からゆるく外反する口縁部で，口唇部外側に稜を有する。器壁が荒れていて調整痕は明確でない。茶褐色の胎土に石英の微粒を混入している。**4**もゆるくくびれた頸部以上の口縁部で，６・10と同一個体の可能性がある。頸部から強く外反し，口唇外側に弱い稜を残している。内面に横方向の刷毛目調整を残しているが，外面の調整方向も同じ横方向に施している。茶褐色の胎土に微粒の砂を含み焼成はやや良い。**5**は，６・10と同一個体である可能性があり，調整痕・色調・焼成度とも酷似している。**7**は口縁部から胴部にかけて断面をよく示す資料で，推定口径21.8センチメートル，内面には横方向の刷毛目調整痕が残り，外面は縦方向の刷毛目調整を施している。茶褐色の胎土に微粒の砂を含み，焼成は比軽的よい。**8**は推定口径18.4センチメートルの土器口縁部であるが，器壁が荒れていて調整痕はよく判らない。茶褐色の胎土に微粒砂を混入している。７と同一個体であるかもしれない。**9**は壺形土器の底部片で，立ち上がりはきわめてゆるやかである。茶褐色の胎土には微粒の砂を含み，焼成はやや良い。**10**は７と同一個体の可能性がある。**11**は器壁が荒れているが，器形を十分に窮い得る接合資料である。口縁径17.7センチメートル。胴部径が16.9センチメートルを計り口縁部径以下である。胴部の張り出しは比較的弱く，頸部のくびれも弱い。口縁部はわずかに内湾しながらゆるく外反している。口縁外側の稜は弱い。茶褐色の胎土には微粒の砂を含み，胴部の最大径部以下には斜方向に，外面には縦方向の刷毛目調整を施す。

12～15は，第26号周辺で出土した土器で，遺構との関係は不明である。**12**はうす手の口縁部で，赤褐色の胎土に滑石の粉末を混している。口縁部直下に，指頭もしくは鈍端な棒状施文具による太い凹線を幾何学的に配している。縄文時代中期の阿高式土器であるが，肉のうすい点

が指摘できる。13は袋状口縁部で，強くくびれた頸部から，口縁部が強く外反しつつ，強く内側に折れている。頸部下際に断面三角形の突帯が一条横走する。焼成は良好で，赤褐色の胎土は堅緻で横方向の器面調整が施されている，14・15ともに甕形土器の底部で，径はそれぞれ6.2・9.8センチメートルを測る。14の底部には軽い指頭によるおさえが施されている。ともに赤褐色の胎土に石英の微粒を混入している。

石　器（第67・68図，ＰＬ80～83）

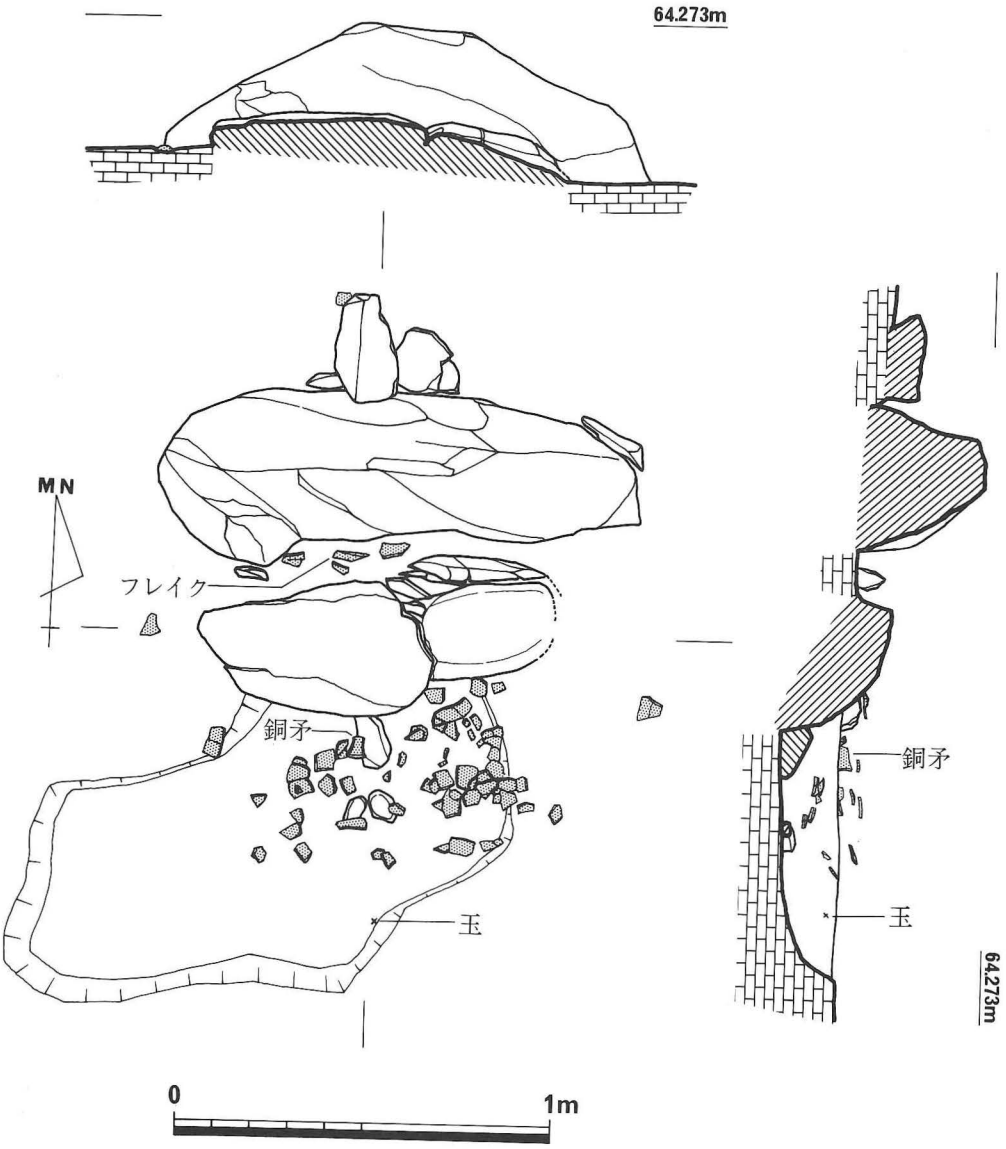
土壙から４点の黒曜石製石器が出土した。1は台形石器である。幅広の剥片を折断し，両側に直角に近い調整痕を残している。2は一辺2.2センチメートル程度の正三角形に近い打製石鏃で，両脚の端部が折損している。抉りは浅い。3は横広の剥片を利用しており，表裏面とも主要剥離面をわずかに残している。二次加工はほぼ全面におよび，形状は二等辺三角形に近い。掻器と考えられる。4は幅広の縦長剥片に微細な二次加工を施している。なお，図示していないが，土壙中から大豆～指頭大の美麗な小礫３個が出土しているが，材質的にはスレート１，石英２である。これらは，上下２層からなる北松溶岩の中間層にあたる八ノ久保砂礫層中に含まれる礫と考えられるところからして，大野台以外の北松浦郡から人為的に運ばれたものと考えられる。

また，本遺構の周辺から，第68図およびＰＬ81～82の石器が出土した。5は側縁に使用痕のある剥片，6は片側に二次加工のある掻器，7も同様であるが，いずれも安山岩の剥片を利用している。8はバチ形の磨製石斧で流紋岩製。9は緑色岩製の大珠である。中央部の両面から空ける穿孔部で半折しているが，復原長９センチメートル，同幅2.2センチメートル，厚み1.8センチメートルを計る。縄文晩期の所産であろう。色調は淡緑色を呈する。同種石材は西彼杵（にしそのぎ）半島西岸の現長崎市三重海岸で散見される。

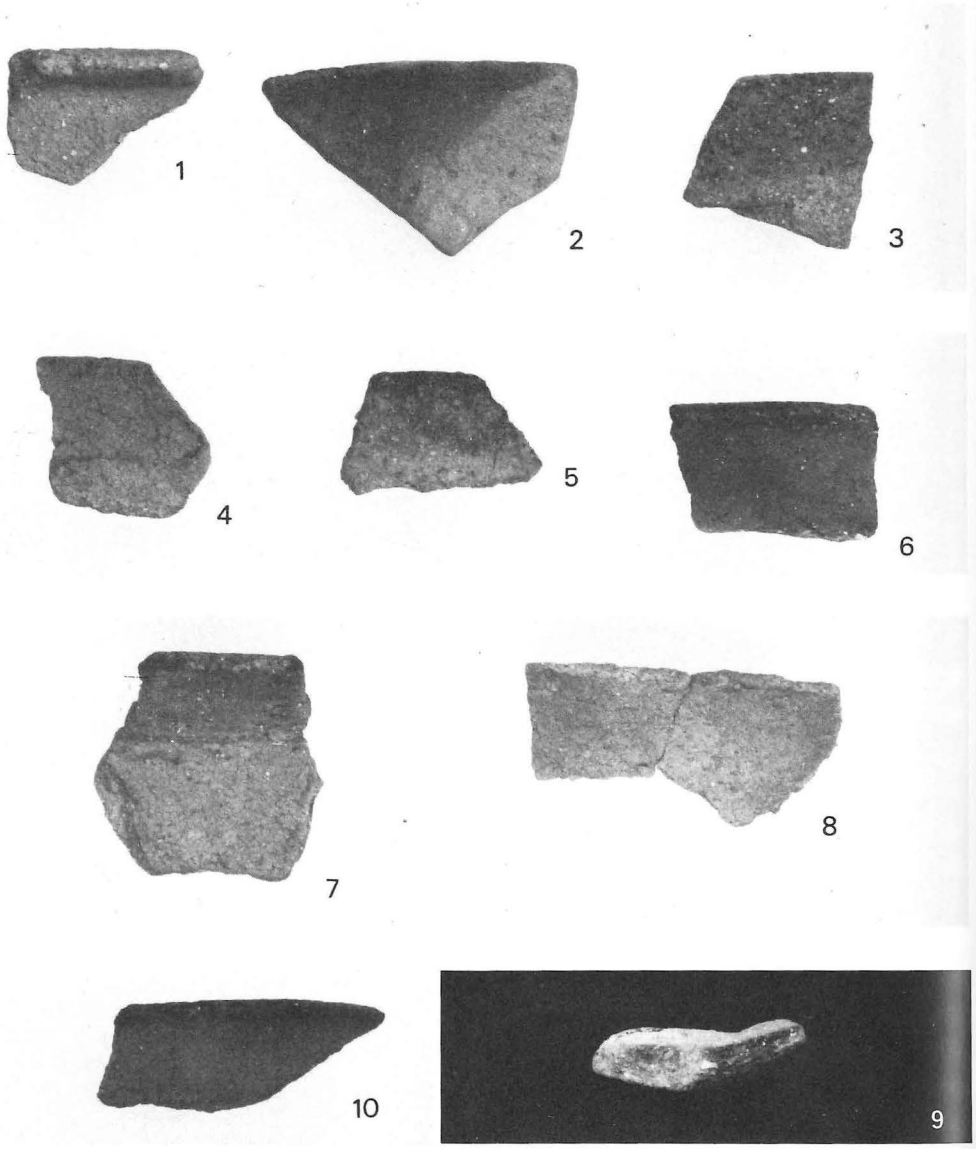
PL.74　第36号遺構　銅矛片出土状況（矢印）

PL. 75 第36号遺構（南東から）

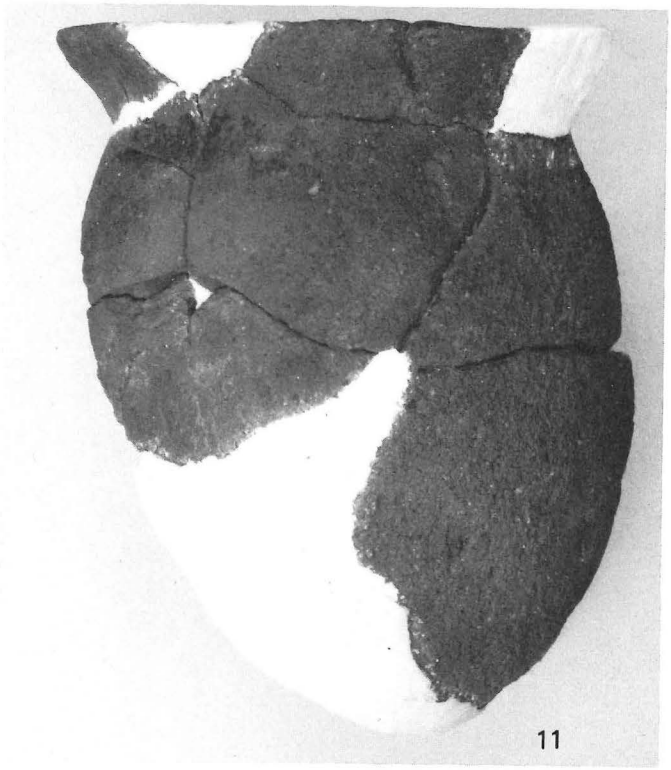
PL. 76 第36号遺構土壙検出状況



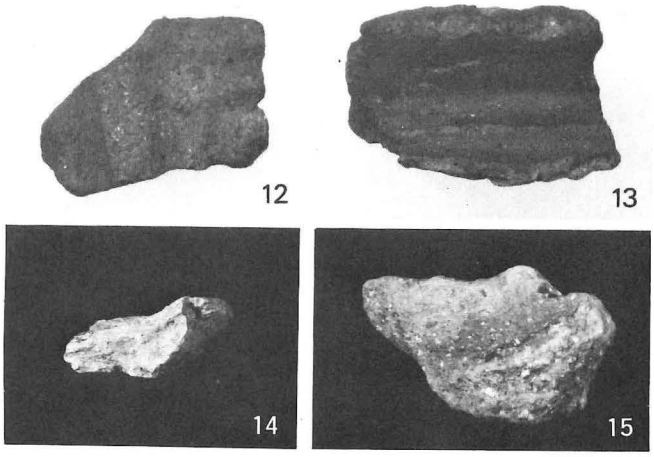
第65図　第36号遺構実測図



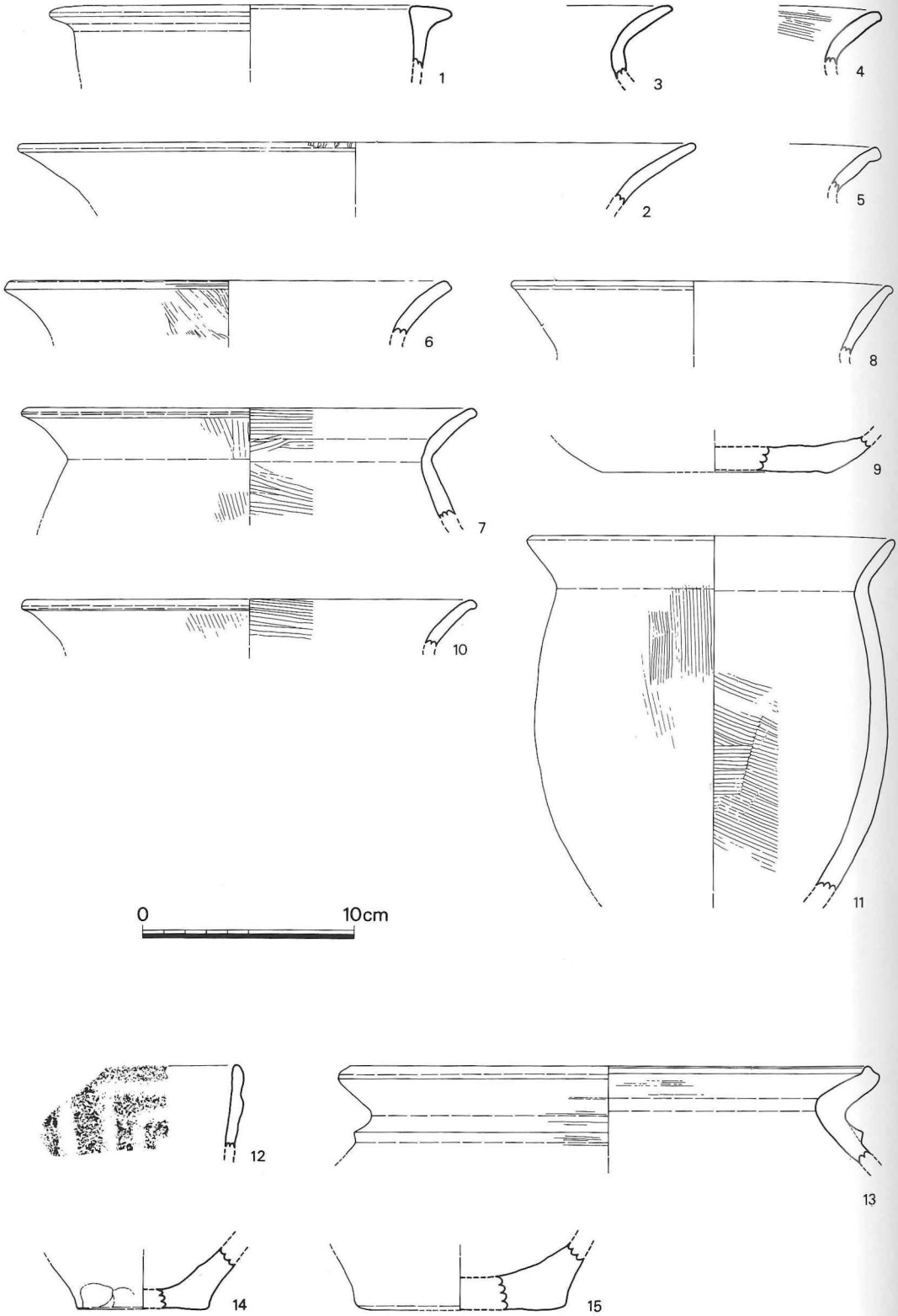
PL. 77　第36号遺構出土土器　（番号は第66図と同じ）



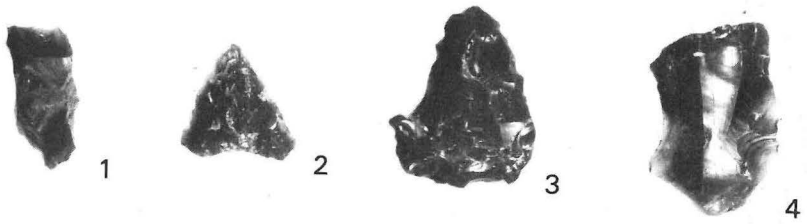
PL. 78　第36号遺構出土土器
（番号は第66図と同じ）



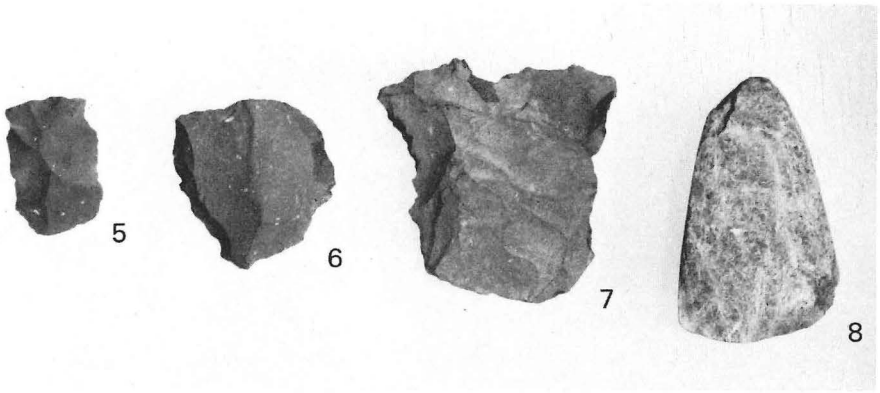
PL. 79　第36号遺構周辺出土土器
（番号は第66図と同じ）



第66図　第36号遺構関係土器実測図

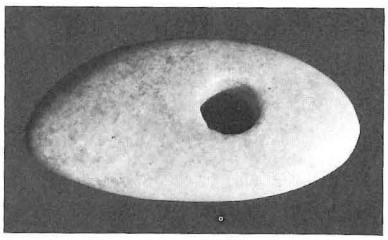


PL. 80　第36号遺構出土石器（番号は第67図と同じ）



PL. 81　第36号遺構周辺出土石器（番号は第68図と同じ）

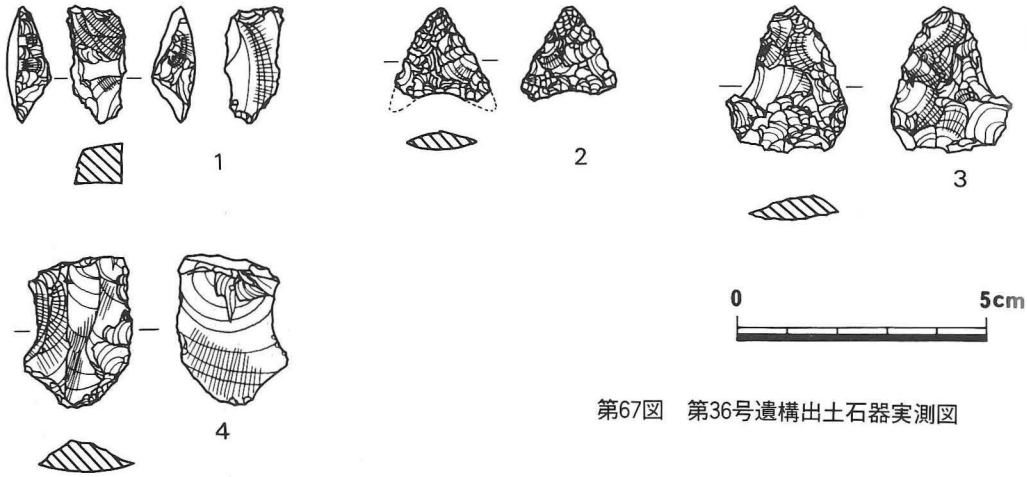
PL. 82
第36号遺構周辺
出土大珠（番号
は第68図と同じ）



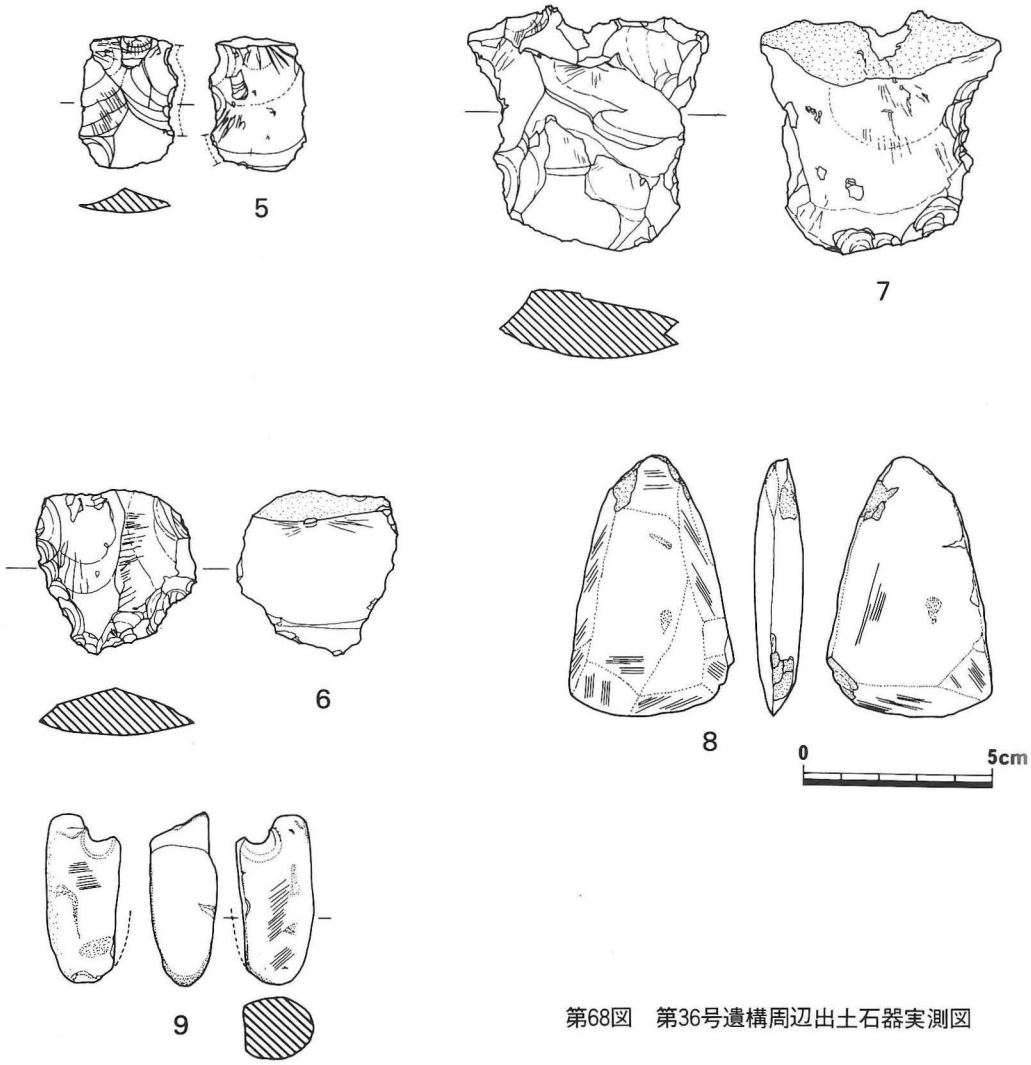
PL. 83　佐々町狸山支石墓群第３号支石墓
出土の大珠（長さ44.15㎜，幅1.94㎜，
厚み9.95㎜，重さ18.35g）
佐々町教育委員会提供

第３表　長崎県内の大珠出土地

出土地名	遺跡名	出土状況	点数	全長×全幅×厚み	時期	石材	文献地
北松浦郡佐々町	狸山支石墓	第３号支石墓	1	mm mm mm 44.15・19.4・9.95	縄文晩期	緑色岩	森貞次郎「長崎県狸山支石墓」九州考古学 5・6 1956
諫早市小野町		表面採集	1	37・15・9	不明	蛇文岩	稲田三千年氏所蔵
西彼杵郡外海（そとめ）町	出津遺跡	包含層	1	70・32・10	縄文後期	滑石	外海町教育委員会「出津遺跡」1983



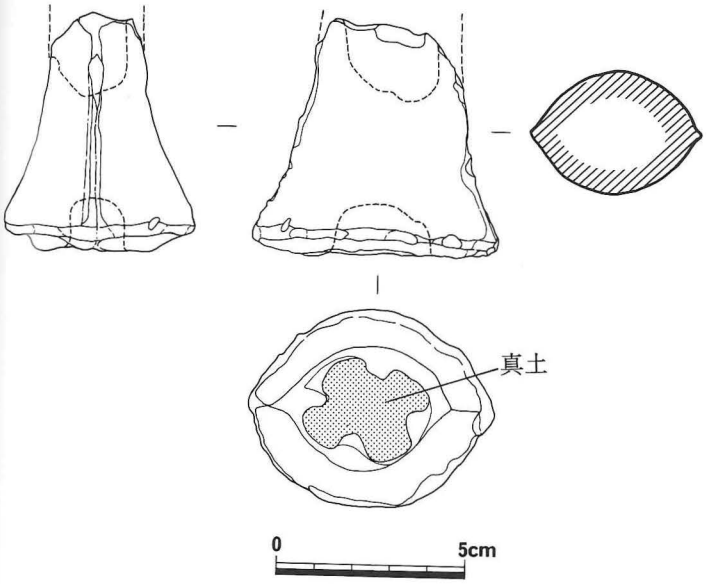
第67図　第36号遺構出土石器実測図



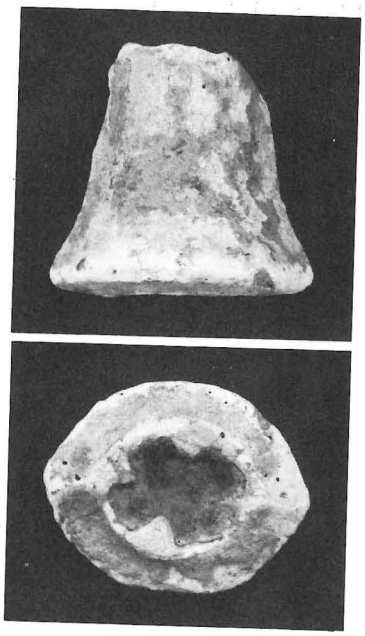
第68図　第36号遺構周辺出土石器実測図

金属器

第36号遺構の巨岩南側の土壙から広形銅矛袋部が1点出土した（第69図，ＰＬ84）。第66図およびＰＬ77・78に示した土器片とともに出土したもので，現存長6センチメートル余，末端面は6.6×5.4センチメートルを測る。耳は欠落している。真土は下端から1.3センチメートルほど除去されているが，以上は充塡状態のまま放置されている。土器の中に納められていたとも考えられるが憶測の域を出ない。



第69図　第36号遺構出土銅矛片実測図



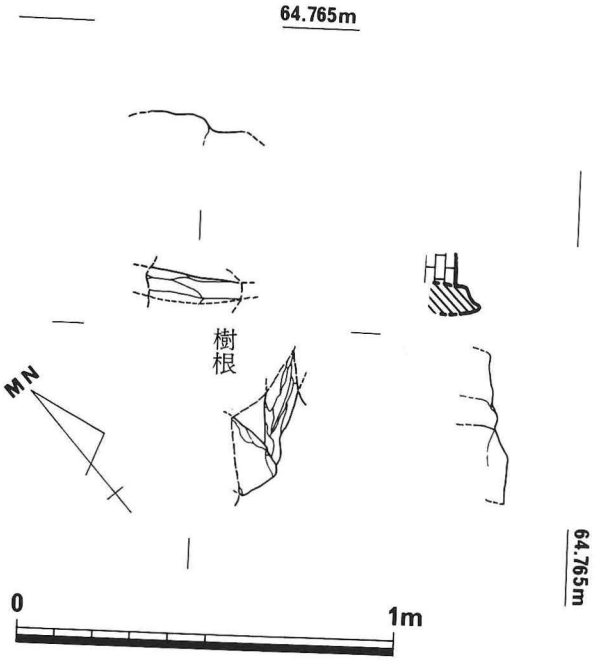
PL. 84　第36号遺構出土銅矛片

第37号遺構

遺　構

Ｈ－６区の中央に位置する箱式石棺である。樹木の下に大部分が隠れており，石棺材３枚が樹根の間にわずかに見えるだけであり，石材が直行するように並んでいるため石棺の存在を知り得る程度である。長軸方向は定かでなく，遺物の出土もない。（第70図，ＰＬ85）

PL. 85　第37号遺構

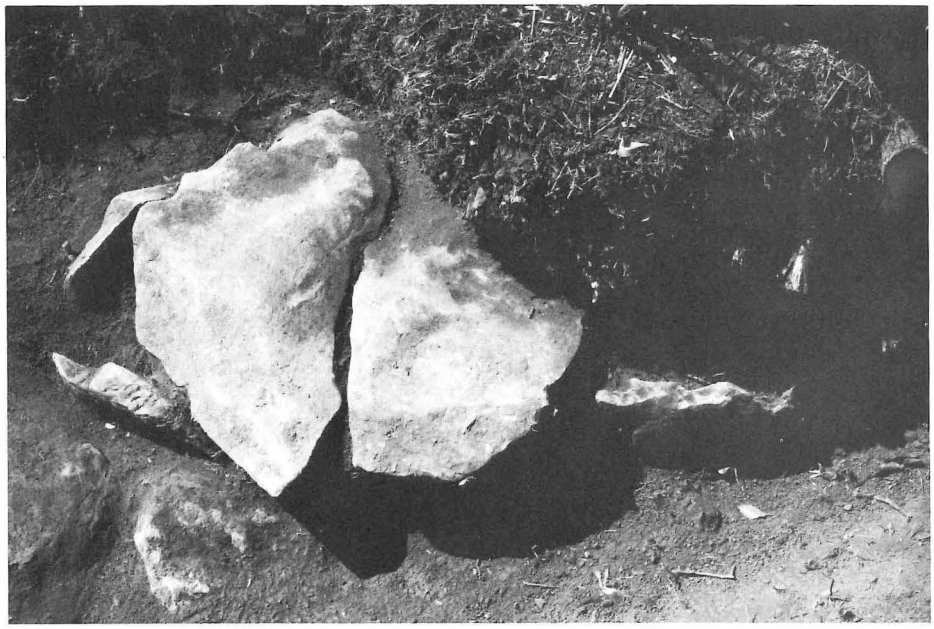


第70図　第37号遺構実測図

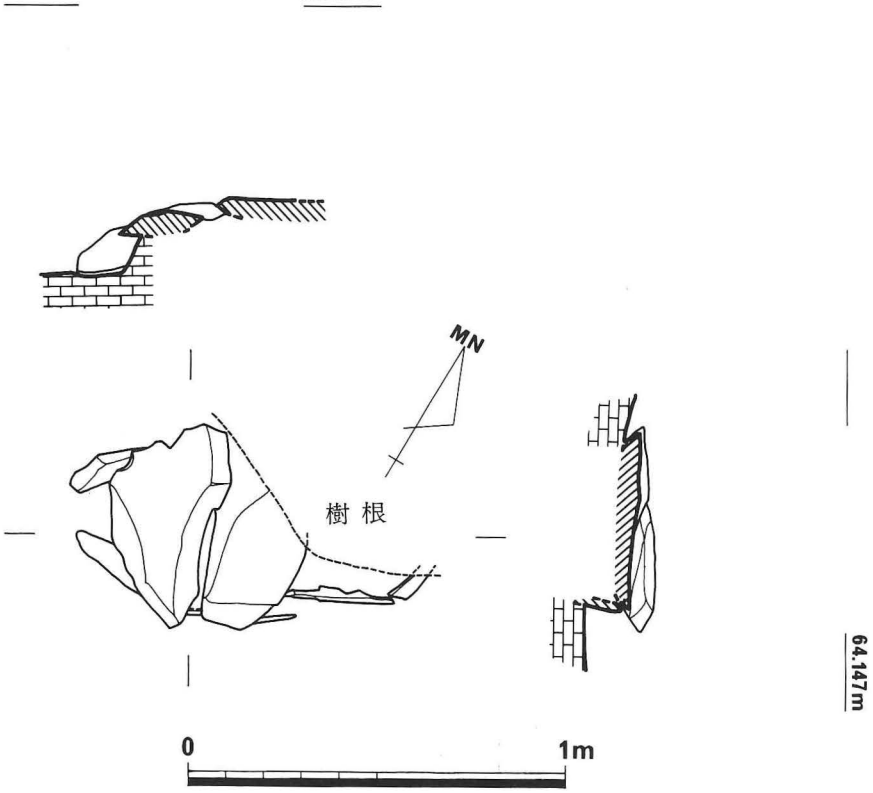
第38号遺構

遺　構

大野台遺跡E地点では最北端にあるA－4区の南に位置している。撑石，支石はなく，樹根の下から箱式石棺が一部露出した状況である。石棺は，蓋石2枚，側壁材5枚が確認できるが，西側の小口材は失われている。長軸方向は樹根に覆われているため明らかにはできない。遺物は出土していない。（第71図，PL86）



PL. 86 第38号遺構



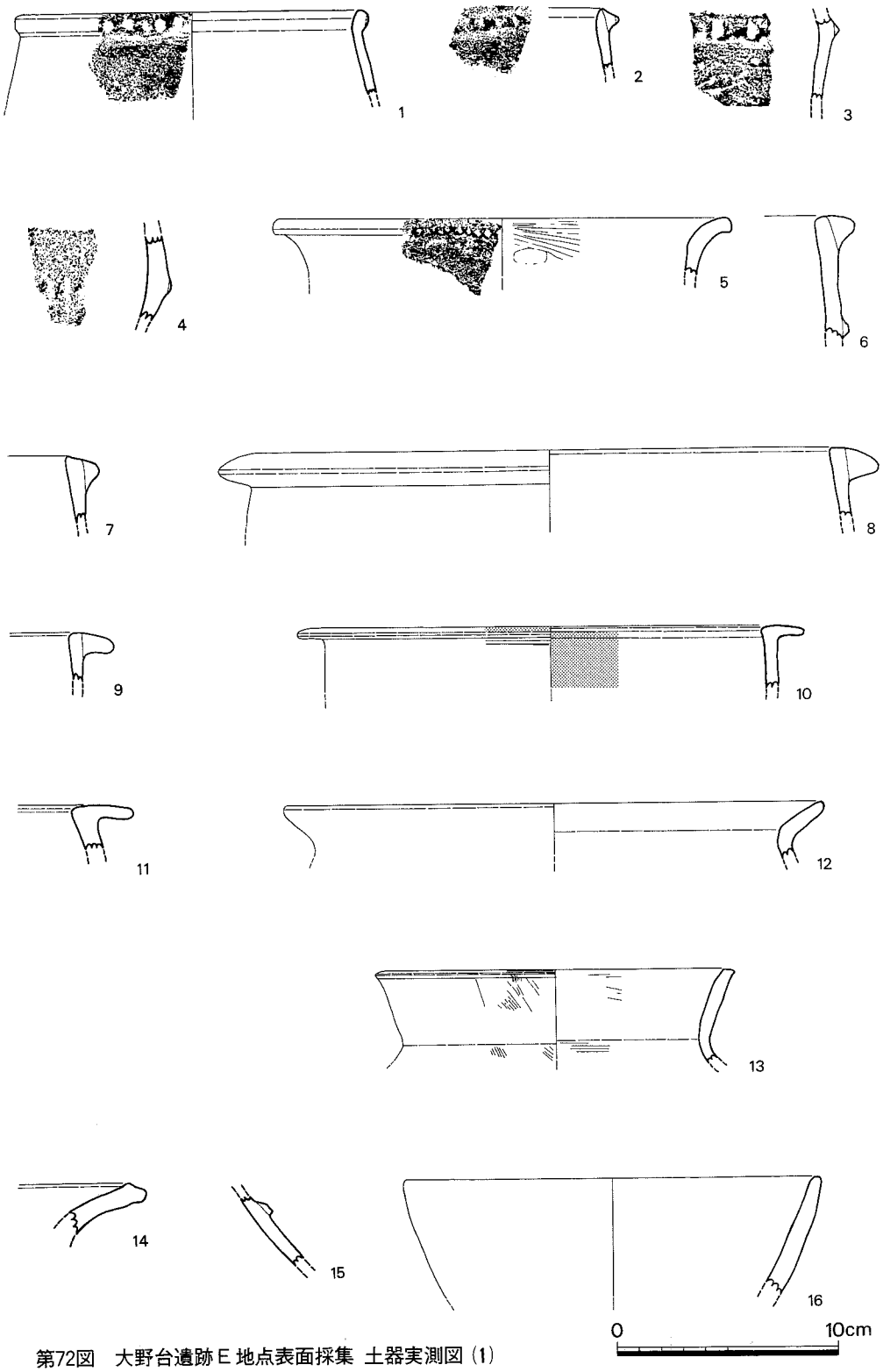
第71図　第38号遺構実測図

Ⅶ　大野台遺跡Ｅ地点表面採集の遺物

土　器

大野台遺跡Ｅ地点では，表土剝ぎの際に，遺構が集中する南部と北端部を中心として土器を採集した。以下，説明していくことにする。（第72・73図，ＰＬ87・88）

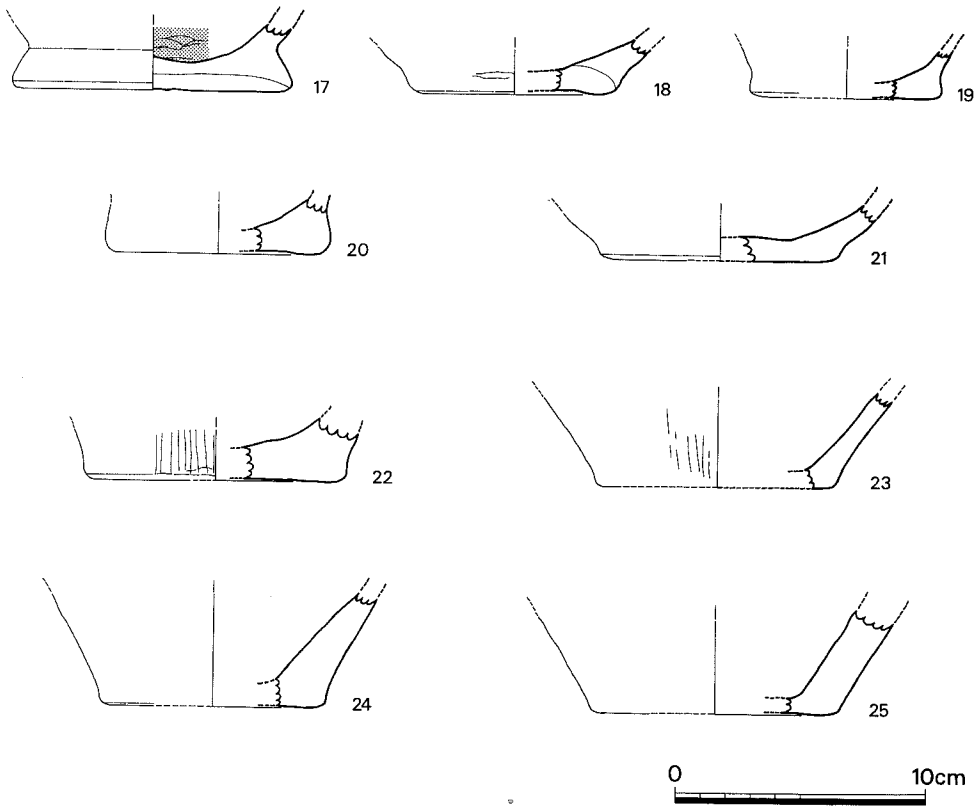
1は甕の口縁部で，突帯が口縁下につく。突帯には刻み目が施される。全体的に暗茶褐色を呈し，胎土には微小な砂粒を含む。器表面は内外とも荒れており，調整は分らない。焼成は良くなくもろい。**2**も甕の口縁部で，刻み目のある突帯が口縁部より下がる位置につく。胎土に微小な砂粒と黒雲母片を含む。器表面は内外とも淡茶褐色を呈する。調整は不明である。**3**は甕の胴部片であり，屈曲部に断面三角形の突帯を配し，刻み目を施す。器表内外面に横方向の条痕が残る。全体的に淡茶褐色を呈し，胎土中に砂粒，黒雲母片を含む。**4**は屈曲部に刻み目をもつ甕の胴部片で，器表内面は赤褐色，外面は茶褐色を呈する。焼成は良くなく，器表面には砂粒が浮き出る。以上４までの土器は夜臼系と考えられる。**5**は外反する如意形口縁の下端に刻み目をつけた甕の口縁である。器表外面に横方向のなで調整，器表内面に横方向の刷毛目調整を行う。内外面とも茶褐色を呈する。**6**は口縁の断面が三角形をなす甕の口縁部である。口縁下には断面が三角形の突帯を配している。胎土に大粒の砂粒を多量に含む。器表面は内外面とも赤褐色を呈するが，荒れており，調整痕は分らない。焼成も良くない。**7**は６と同じ口縁をもつ甕で，器表面は赤褐色を呈する。調整は不明である。**8**は６，７と同じ甕である。口縁下に横方向のなで調整を施している。全体的に赤褐色を呈する。**9**は逆「Ｌ」字形をなす甕の口縁である。調整は不明である。器表面は淡茶褐色を呈する。**10**は９と同じ口縁をもつ甕で口縁上面と内面に朱が残っている。器表外面は刷毛目調整後横方向のなで調整を，内面は横方向のなで調整を行っている。**11**は９，10と同形の口縁をもつ甕である。口縁の上面，外面の一部に朱が残る。全体的に明茶褐色を呈する。焼成は良い。**12**は甕であり，暗茶褐色を呈する。調整痕は不明である。**13**は甕の口縁部である。器表外面では斜め方向の刷毛目調整を行い，内面は横方向のなで調整を施している。器表面は茶褐色を呈する。**14**は壺の口縁部と考えられる。器表内外面とも横方向の刷毛目調整の後，横なで調整を施している。色調は外面は赤褐色，内面は茶褐色である。焼成は良い。**15**は壺の肩部と思われる。断面が台形を呈する貼付突帯を配している。器表外面には突帯の上に朱がわずかに残っている。調整痕は不明である。**16**は鉢の口縁部であろう。器表内外面ともに淡茶褐色を呈する。胎土には砂粒の他に黒雲母片が含まれている。調整痕は不明である。**17**は平底の底部で，器表内面に朱が塗布されている。内面中央部付近は，指頭による押圧で盛り上がる。内外面とも調整は横方向のなでと思われる。色調は，内面は淡茶褐色，外面は赤褐色である。直径10.4センチメートルの平底から周囲に張り出して上方を押さえてくぼませた夜臼式土器の壺の底部であろう。**18**は上げ底の壺の底部で，胎土に２～３ミリメートル程の砂粒を含む。色調は淡黄褐色である。調整は分らない。**19**は平底の甕の底部で，器面は淡茶褐色を呈する。胎土には砂粒の他に，黒雲母片を含む。焼成は良くない。



第72図　大野台遺跡Ｅ地点表面採集 土器実測図（1）

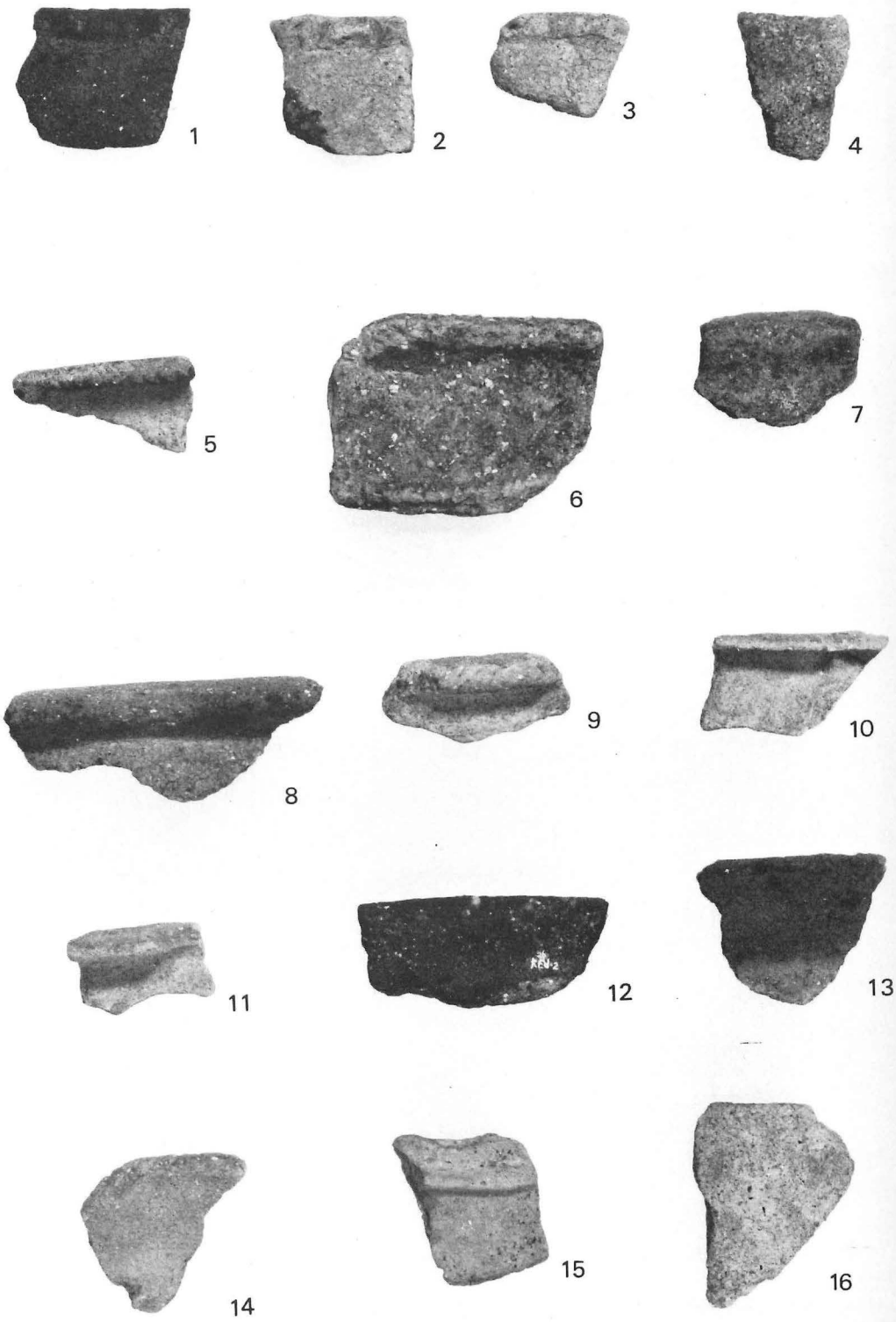
20は若干上げ底となる甕の底部で，胎土には砂粒，黒雲母片を含む。器表面は赤褐色を呈する。21は平底の壺の底部である。器表外面は赤褐色，内面は茶褐色を呈する。底面には，製作時についたと思われる刷毛目状の条痕が残る。22は平底の甕の底部で，器表外面には，縦方向の刷毛目調整を施している。内面は荒れており調整痕は不明である。内面は淡茶褐色，外面は赤褐色を呈する。23は壺の底部と思われる。器表外面に縦方向の刷毛目調整を施しているが，内面は不明である。色調は赤褐色で，胎土には微小な砂粒を含む。24は平底の底部で，甕と思われる。胎土中に砂粒を多量に含む。器表面の荒れが著しく調整痕は残っていない。色調は外面 赤褐色，内面茶褐色である。25は平底の底部である。底部の厚さが器壁に比べ非常に薄くなっている。器表面は荒れており調整は分らない。色調は赤褐色である。

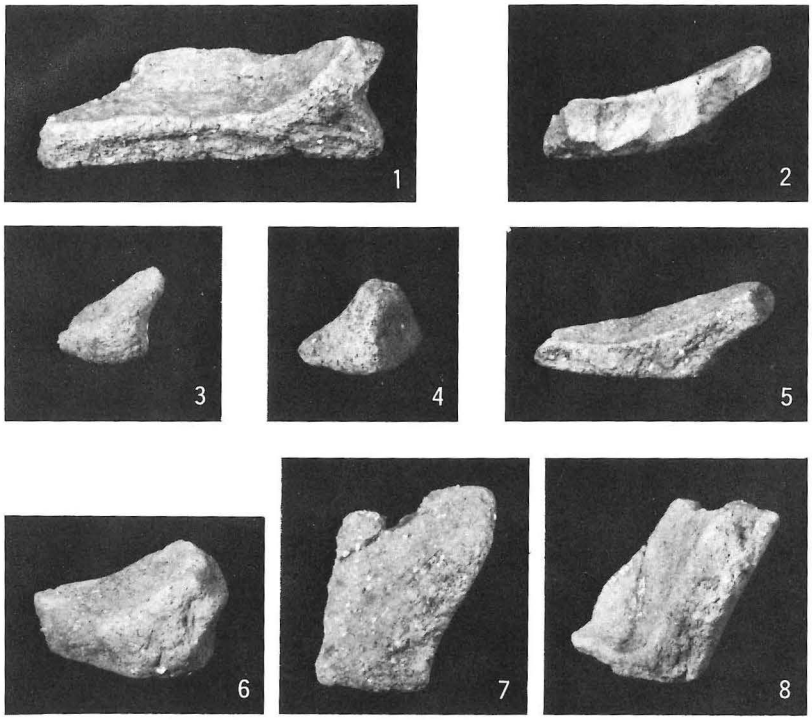
以上，表面採集の土器について説明してきた訳であるが，概して，本遺跡では壺よりも甕が多く出土しており，時期的には縄文時代終末～弥生時代後期まで及ぶということがいえる。



第73図　大野台遺跡Ｅ地点表面採集 土器実測図 (2)

PL. 87 大野台遺跡E地点表面採集土器 (1) (番号は第72図と同じ)





PL. 88　大野台遺跡E地点表面採集 土器（2）
（番号は第73図と同じ）

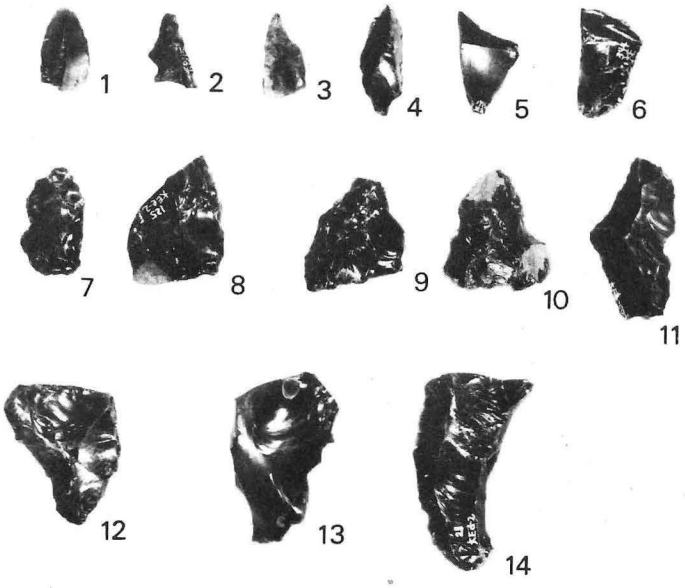
石　器（第74～78図，ＰＬ89～98）

1 は黒曜石製尖頭状石器である。左右両側縁に直角に近い細かな調整加工を施している。また尖端部の主要剥離面側に調整を施し薄く整形している。基部は折断面をそのまま残し調整を施さない。長さ2.3センチメートル，幅0.8センチメートル，厚さ0.3センチメートル，重さ1.2グラム。**2** は黒色不透明な黒曜石製の石鏃である。両脚を欠いており現存値で長さ1.9センチメートル，幅0.8センチメートル，厚さ0.5センチメートル，重さ0.8グラムである。**3** は黒曜石製の石鏃である。薄めの剥片を素材として左右両側縁を整形して尖端部を作り出している。また基部も直線的な調整を施し左右非対称な三角形に仕上げている。長さ2.2センチメートル，幅1.2センチメートル，厚さ0.4センチメートル，重さ0.9グラム。**4** は黒曜石製の使用痕ある剥片である。一部自然面を留め断面は三角形である。基部に調整を施して茎部を作り出している。長さ2.9センチメートル，幅1.2センチメートル，厚さ0.6センチメートル，重さ1.5グラム。**5** は黒曜石製剥片である。長さ2.7センチメートル，幅1.6センチメートル，厚さ0.6センチメートル，重さ1.8グラム。**6** も黒曜石製剥片である。長さ2.8センチメートル，幅1.8センチメートル，厚さ0.8センチメートル，重さ3.5グラム。**7** は黒曜石製石鏃である。長さ2.8センチメートル，幅1.6センチメートル，厚さ0.5センチメートル，重さ2.4グラム。**8** は黒曜石製掻器である。折断面がある。長さ3.3セン

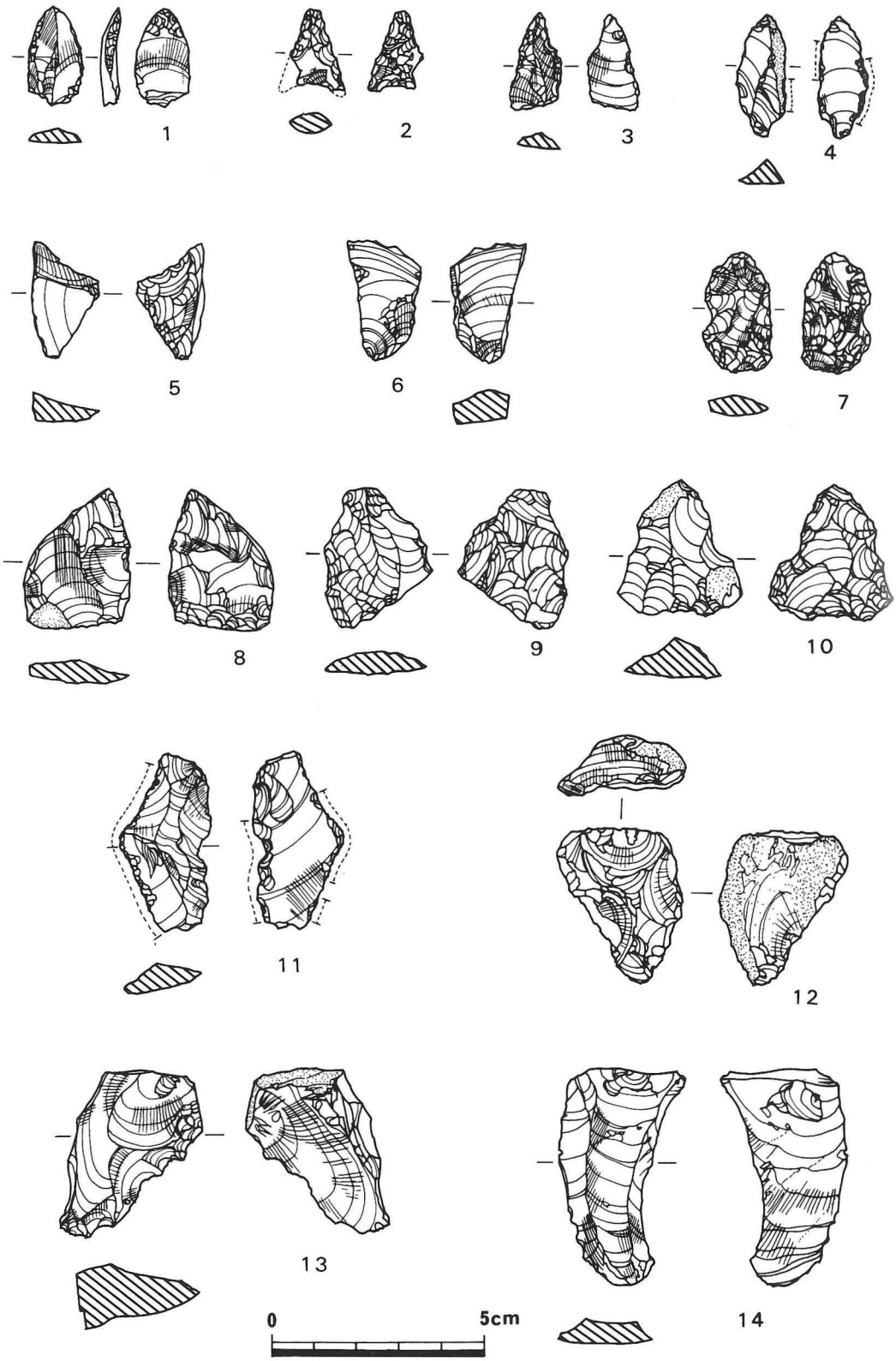
チメートル，幅2.5センチメートル，厚さ0.5センチメートル，重さ4.9グラム。**9**も黒曜石製掻器である。長さ3.3センチメートル，幅2.6センチメートル，厚さ0.5センチメートル。重さ3.8グラム。**10**も黒曜石製掻器である。長さ2.7センチメートル，幅2.9センチメートル，厚さ0.9センチメートル，重さ6.3グラム。**11**は黒曜石製の使用痕ある剥片である。長さ4.2センチメートル，幅2.1センチメートル，厚さ0.6センチメートル，重さ4.9グラム。**12**は黒曜石製石核である。打面を転移しながら剥取していく石核である。長さ3.6センチメートル，幅３センチメートル，厚さ1.4センチメートル，重さ11.6グラム。**13**は黒曜石製石核である。厚めの剥片を素材としている。長さ3.9センチメートル，幅3.3センチメートル，厚さ1.5センチメートル，重さ13グラム。**14**は黒曜石製剥片である。長さ5.1センチメートル，幅３センチメートル，厚さ0.6センチメートル，重さ7.6グラム。**15**は黒曜石製石核である。原礫面は角ばっている。長さ3.8センチメートル，幅3.4センチメートル，厚さ３センチメートル，重さ38.5グラム。**16**も黒曜石製石核である。灰黒色を呈しており，原礫面はやや角ばっている。長さ3.1センチメートル，幅3.5センチメートル，厚さ2.5センチメートル，重さ32.5グラム。**17**も黒曜石製石核である。打面を転移しながら剥取していく石核である。長さ3.3センチメートル，幅３センチメートル，厚さ2.4センチメートル，重さ18グラム。**18**も黒曜石製石核である。15と同様，打面を転移する石核であるが，ｂ面の大きな剥離はｅ面にみる様に打面調整を施してから剥離している。**19**は安山岩（サヌカイト）製削器である。厚手の石刃状の剥片を素材としている。片縁のみに両面から直線形細部調整が施されている。調整はまず主要剥離面側に浅い細部調整が施され，次に背面側から深い細部調整が施されている。背面は原礫面が大半を占める。長さ10.6センチメートル，幅4.6センチメートル，厚さ2.5センチメートル，重さ140グラム。**20**は安山岩（サヌカイト）製石核である。石核に残ったネガティブ面をみると横長の剥片を剥取したものと思われる。長さ11センチメートル，幅4.5センチメートル，厚さ2.6センチメートル，重さ950グラム。**21**は安山岩（サヌカイト）製削器である。素材の背面の片縁に背面側より細部調整が施されている。また，反対側の辺縁はエッジがそのまま残されている。**22**は安山岩（サヌカイト）製の使用痕ある剥片である。長さ6.7センチメートル，幅5.1センチメートル，厚さ1.7センチメートル，重さ60グラム。**23**は安山岩（サヌカイト）製石核である。長さ7.3センチメートル，幅６センチメートル，厚さ3.8センチメートル，重さ140グラム。**24**は安山岩（サヌカイト）製の使用痕ある剥片である。長さ5.1センチメートル，幅4.8センチメートル，厚さ1.0センチメートル，重さ30グラム。**25**は安山岩（サヌカイト）製の使用痕ある剥片である。長さ3.8センチメートル，幅3.8センチメートル，厚さ1.0センチメートル，重さ13.3グラム。**26**は安山岩（サヌカイト）製の使用痕ある剥片である。長さ5.4センチメートル，幅7.5センチメートル，厚さ1.6センチメートル，重さ50グラム。**27**は黒曜石製掻器である。パティナが古い。長さ4.9センチメートル，幅3.2センチメートル，厚さ1.3センチメートル，重さ18.5グラム。**28**は安山岩製礫器である。２ケ所に尖頭部をもち，尖頭部に挟まれた弯曲した辺縁にも剥離を施し，刃部としての機能をもつもので，従来双角状礫器と呼ばれてきた。こ

の礫器の場合，弯曲した刃部を意識的に作り出し，使用に際しての敲打痕が残る。長さ９センチメートル，幅9.8センチメートル，厚さ3.3センチメートル，重さ 310 グラム。**29**は安山岩製凹石である。両面に凹部がある。長さ12センチメートル，幅7.8センチメートル，厚さ4.1センチメートル，重さ 710 グラム。**30**は安山岩製すり石である。両面とも扁平にすっている。長さ12.9センチメートル，幅9.8センチメートル，厚さ2.8センチメートル，重さ 590 グラム。**31**は安山岩製磨製片刃石斧である。長さ7.9センチメートル，幅4.8センチメートル，厚さ1.7センチメートル，重さ 110 グラム。**32**は玄武岩製磨製片刃石斧。表面に擦痕がみられる。刃部は刃こぼれが著しい。長さ4.8センチメートル，幅2.8センチメートル，厚さ1.4センチメートル，重さ31.5グラム。**33**は安山岩製石包丁である。現存値で長さ６センチメートル，幅4.5センチメートル，厚さ1.6センチメートル，重さ21.5グラム。**34**は安山岩（サヌカイト）製尖頭状石器である。尖頭部周縁に細部調整を施している。一部に自然面を留める。長さ6.6センチメートル，幅3.5センチメートル，厚さ1.6センチメートル，重さ35.5グラム。

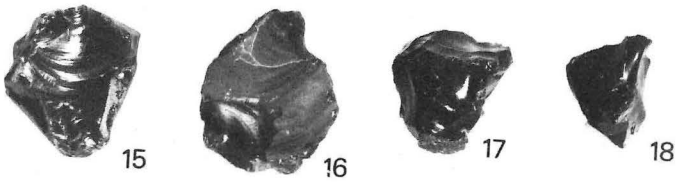
以上の石器の他に，当遺跡では，長さ３センチメートル，幅２センチメートル程の半透明のめのう原礫１点（ＰＬ92）と，長さ４センチメートル，幅３センチメートルのチャートの原礫１点（ＰＬ93）を採集している。チャートの原礫は，第３号遺構，第20号遺構で出土しているものと全く同じ質である。



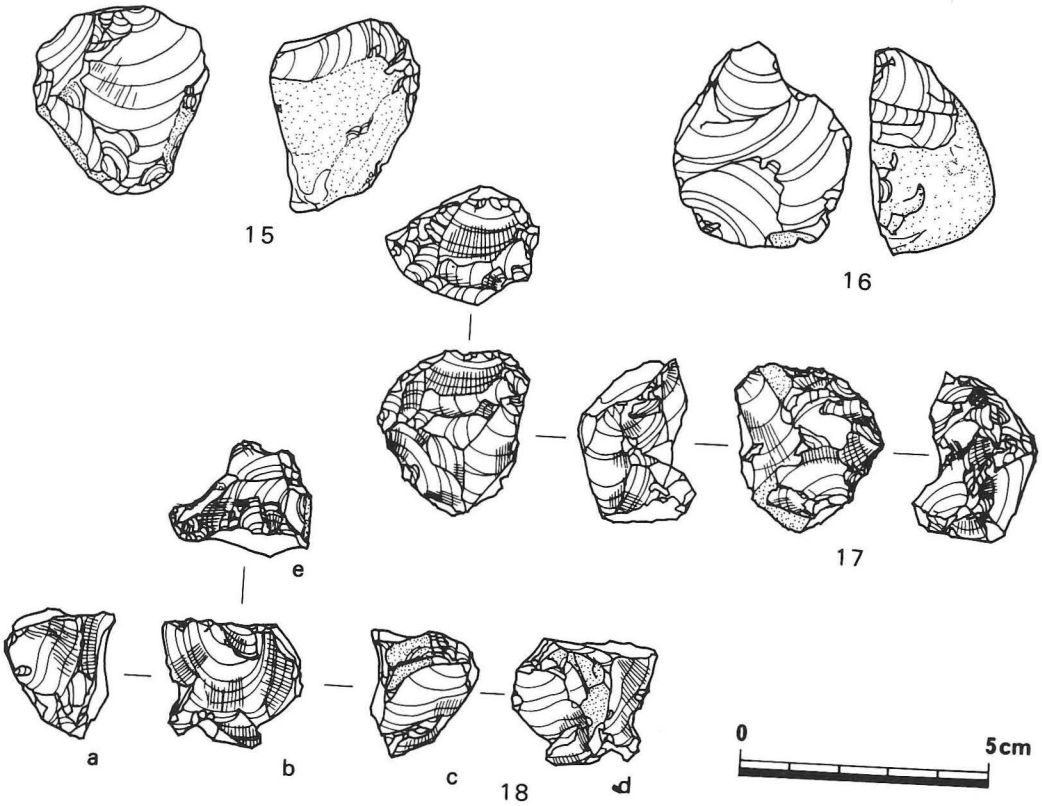
PL. 89　大野台遺跡E地点表面採集石器（1）



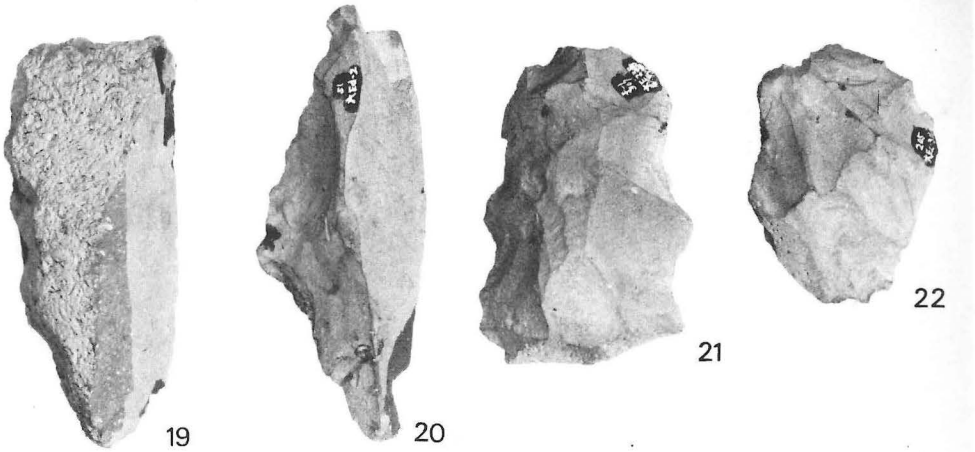
第74図　大野台遺跡E地点表面採集石器実測図（1）

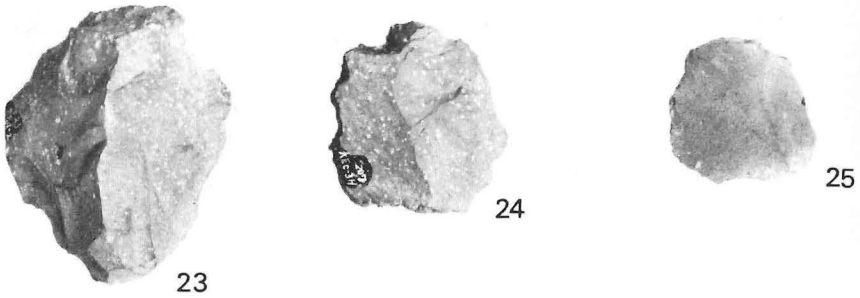


PL. 90　大野台遺跡E地点表面採集石器 (2)



第75図　大野台遺跡E地点表面採集石器実測図 (2)

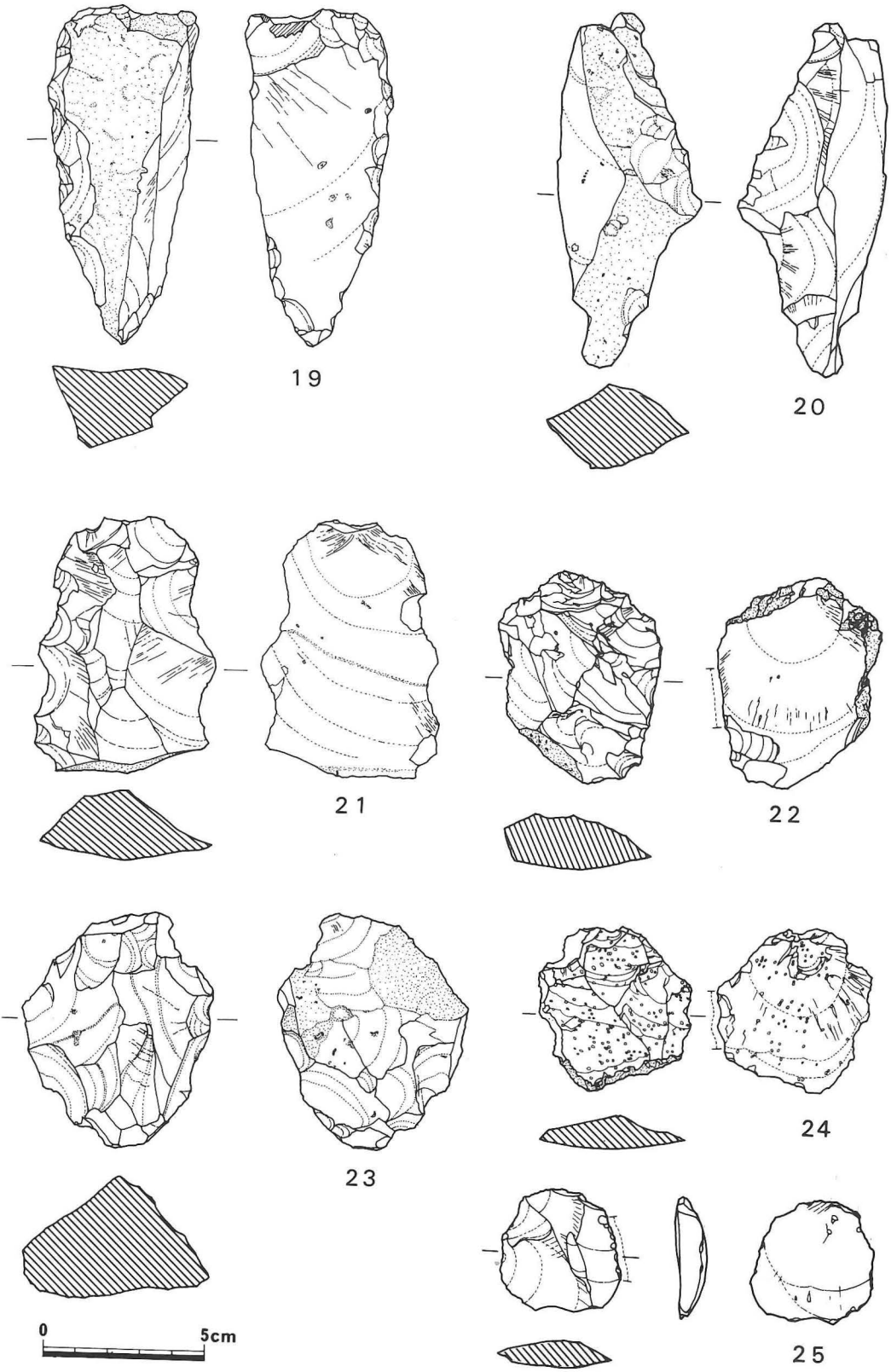




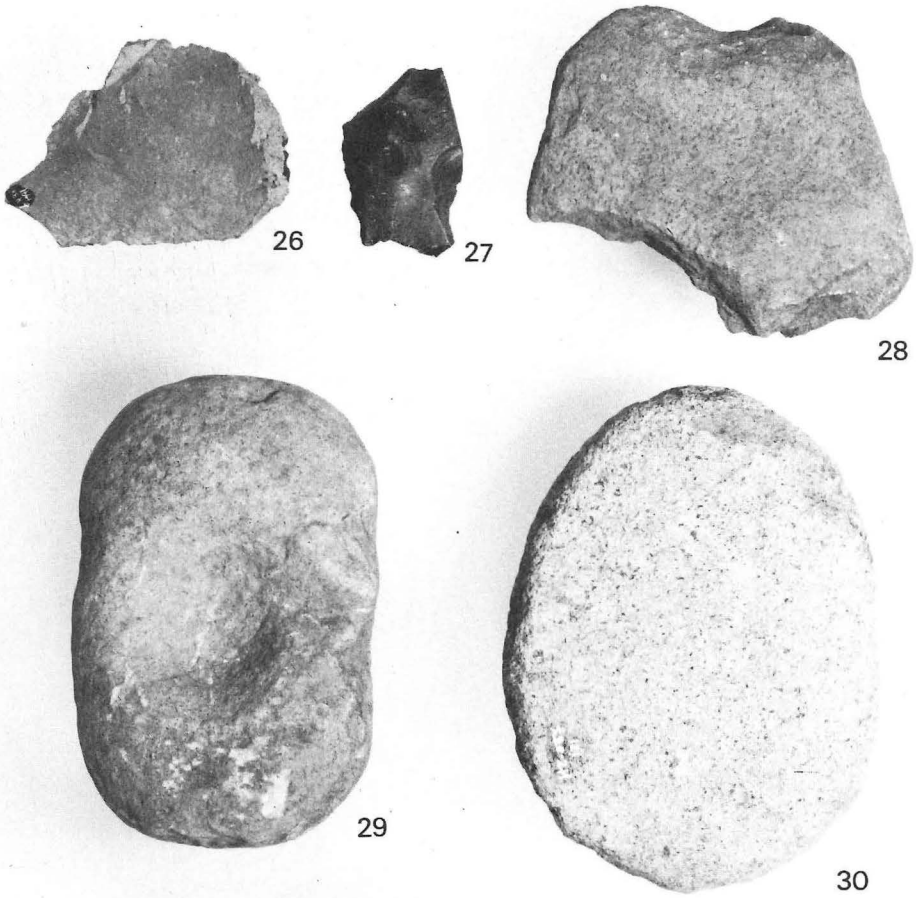
PL. 91　大野台遺跡Ｅ地点 表面採集石器 (3)

PL. 92
大野台遺跡Ｅ地点
表面採集めのう原礫

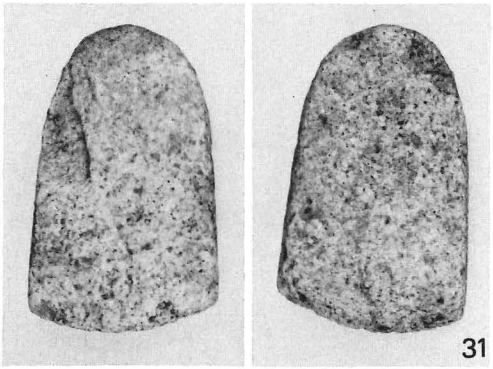
PL. 93　大野台Ｅ地点
表面採集チャート原礫



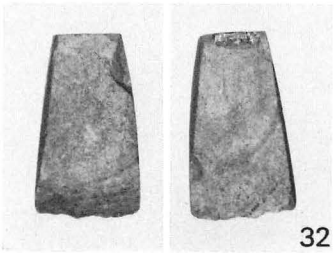
第76図　大野台遺跡E地点表面採集石器実測図(3)



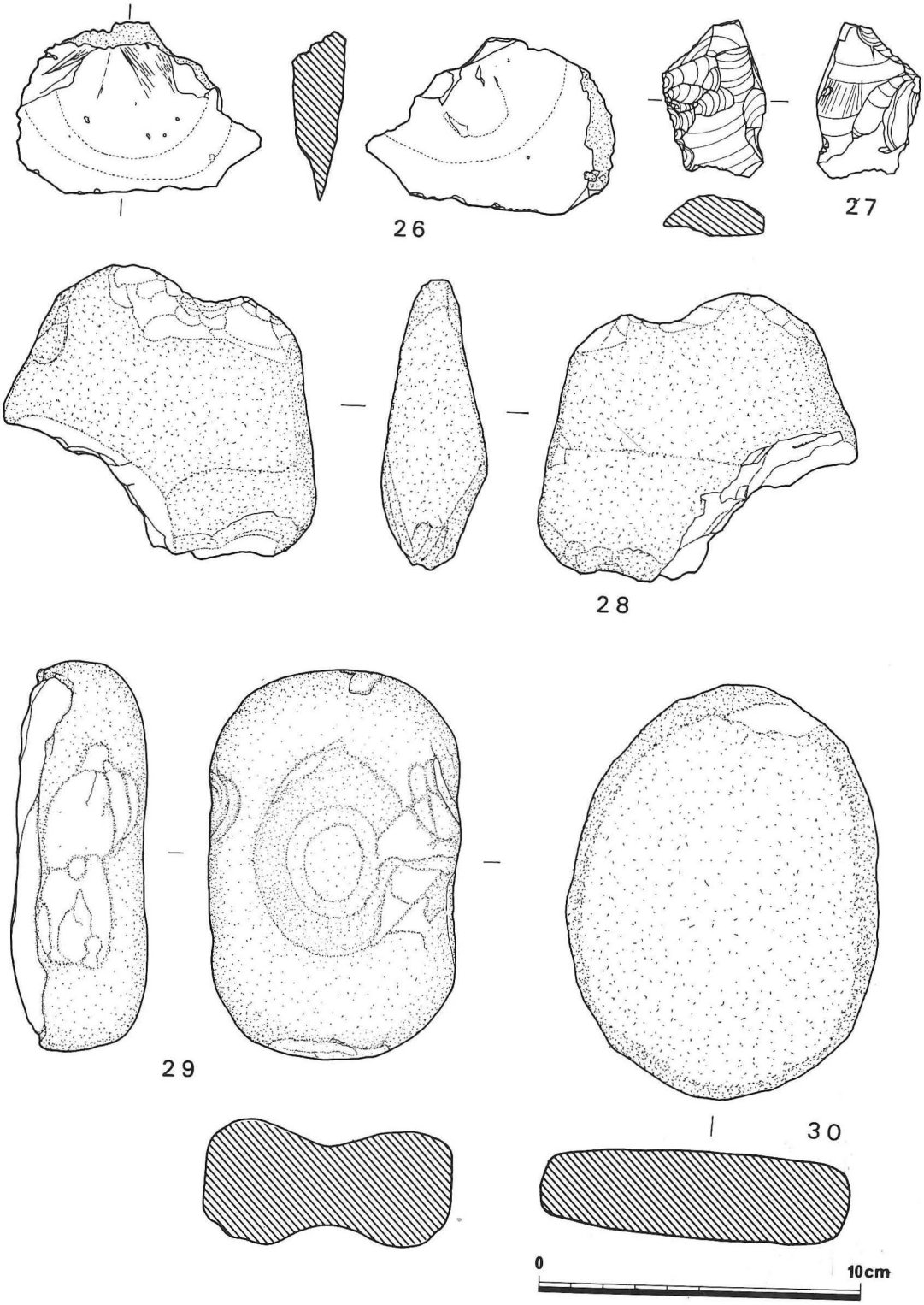
PL. 94　大野台遺跡Ｅ地点表面採集石器 (4)



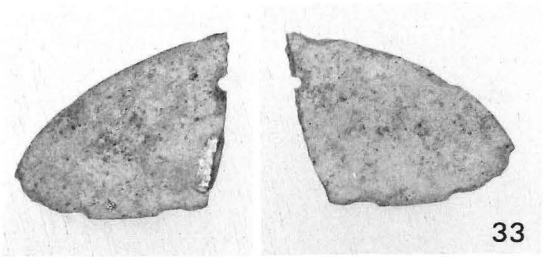
PL. 95　大野台遺跡Ｅ地点
表面採集石器 (5)



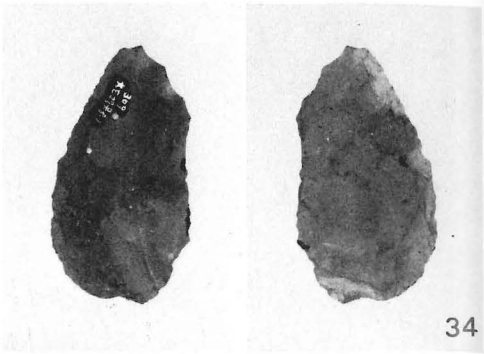
PL. 96　大野台遺跡Ｅ地点
表面採集石器 (5)



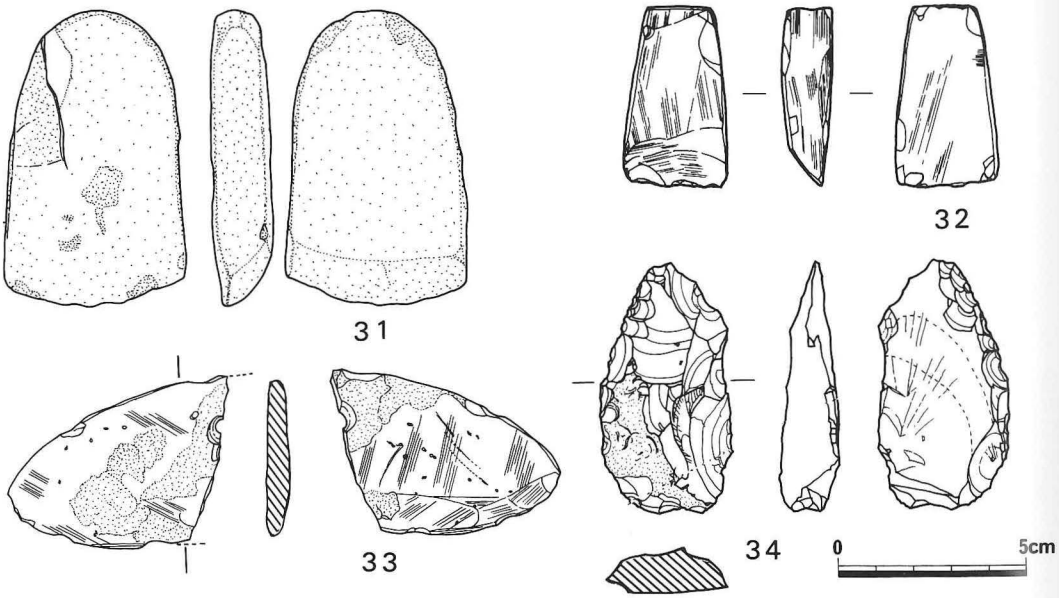
第77図　大野台遺跡Ｅ地点表面採集石器実測図 (4)



PL. 97　大野台遺跡Ｅ地点表面採集石器 (5)



PL. 98　大野台遺跡Ｅ地点表面採集石器 (5)



第78図　大野台遺跡Ｅ地点表面採集石器実測図 (5)

Ⅶ　大野台遺跡諸地点の遺物

大野台遺跡諸地点からは，故大浦久雄氏および，諸藤隆次氏の表面採集石器としてＰＬ99～105に示した好資料がある。ＰＬ99に示したのは，大野台遺跡群中最大規模をもつＥ地点表面採集とあるが，直接的にはＥ地点北側の畠地（現水田）での採集という。いずれも，やや寸づまりのバチ形磨製石斧で，**3**が上下12.3センチメートルである。**1**は荒い玄武岩，**2**～**4**は安山岩，**5**は蛇文岩である。**3**と**5**は刃部に大きな損傷がある。ＰＬ100～102に示した資料は，いずれも，大野台遺跡のなかで，生活址と考えられているＤ地点一帯での表面採集資料であり支石墓各地点と異り，資料の数が多い。ＰＬ100の**2**は最大幅９センチメートル，現存長13センチメートル近い大形蛤刃石斧である（玄武岩製）。**1**・**3**～**5**も玄武岩製の蛤刃石斧，**6**は小形の扁平打製石斧，**7**は安山岩製の磨製石斧片である。ＰＬ101は粗雑な玄武岩製の扁平打製石斧である。ＰＬ102は，扁平片刃石斧３点（**1**～**3**）と，磨製石剣の茎部未完成品（？）である。いずれも片刃磨製石斧は刃部の損傷が著しい。ＰＬ103に示した３点もＤ地点出土の礫石器である。**1**は径８センチメートル程度のやや扁平な円礫の敲石である。**2**はやや大形の敲石であるが，凹石をも兼ねており，中央部に激しい損耗がある。**3**は断面径５センチメートル程度の自然礫を用いた敲石で，上下端に激しい損耗が見られる。ＰＬ104の上下で15センチメートルの凹石で砥磨による滑らかな凹みが見られる。支石墓の時代とは離れるがＰＬ105に示したのは，滑石製石鍋の表裏である。表側の左上部には方形の突起が１個残っており，元来２対（４個）の突起の１である。裏（内）面には，金属器による削り痕跡がある。

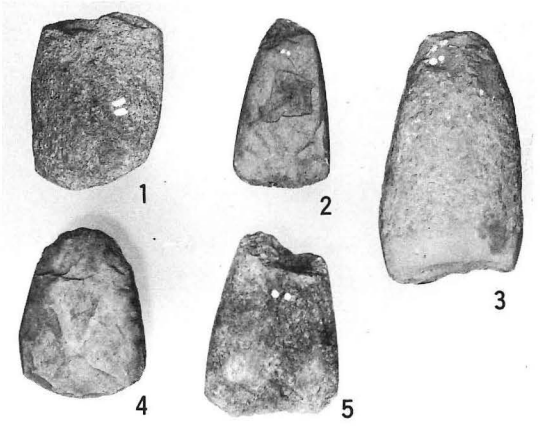
大野台遺跡諸地点では以上石器資料が表面採集されているが，縄文時代以来の個有の石器に加えて，外来の技術の影響下に作られた，扁平片刃磨製石斧と磨製石剣片（？）の出土が注目される。また，従前に，多量に出土するところから[註1]，土の掘穿具と考えられた扁平打製石斧も注目される。

石鍋については，平安末から鎌倉時代前半に位置づけられている厨房具で，長崎県西彼杵半島と，長崎半島（野母半島）の一部に，粗形石鍋の製作遺跡が現時点で52個所確認されており，この地域から招来されたものであるが，江迎湾奥の大野台の地で発見されたことは，土地柄を検討するうえで興味深い。

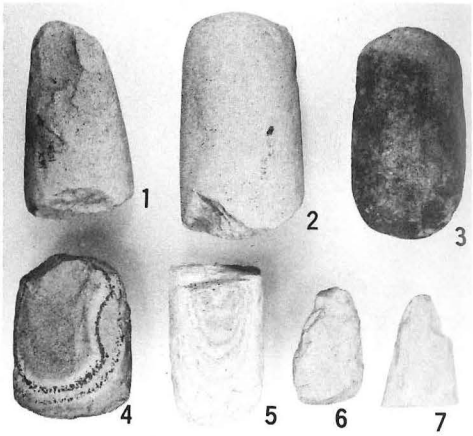
註１　正林　護他「朝日山遺跡」長崎県小浜町教育委員会，1981

〃２　下川達彌「滑石製石鍋考」長崎県立美術博物館研究紀要２，1974

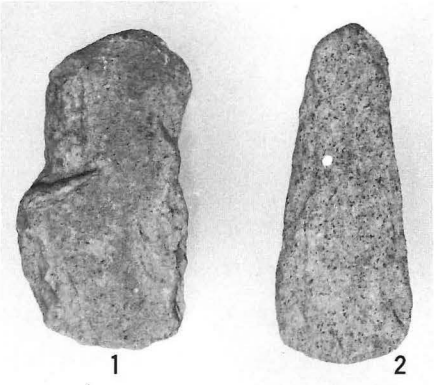
　　正林　護・下川達彌「大瀬戸町石鍋製作所遺跡」長崎県大瀬戸町教育委員会，1980



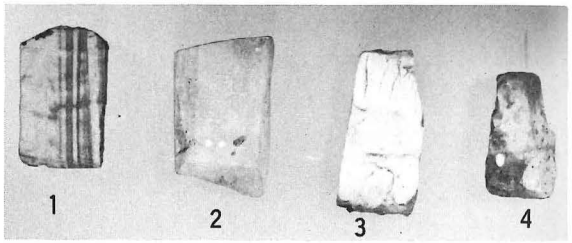
PL. 99　大野台遺跡Ｅ地点の石器 右端の長さ12.3cm
（故大浦久雄氏資料）



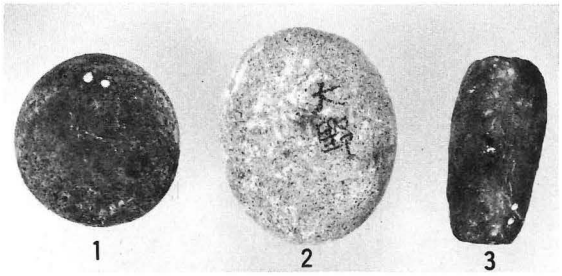
PL.100　大野台遺跡Ｄ地点の石器 上段中央13cm
（諸藤隆次氏資料）



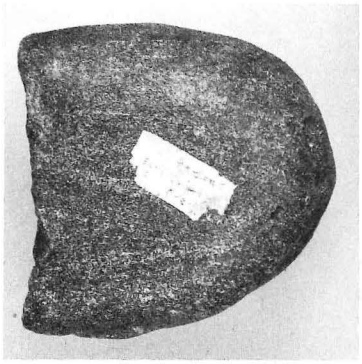
PL.101　大野台遺跡Ｄ地点の石器
右の長さ13.3cm
（故大浦久雄氏資料）



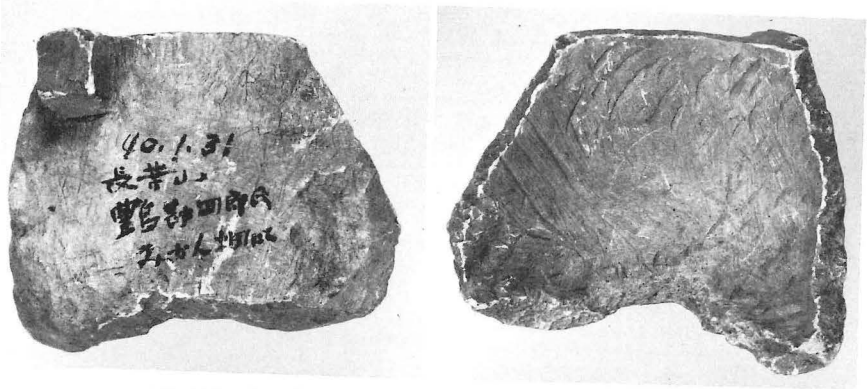
PL.102　大野台遺跡Ｄ地点の石器（故大浦久雄氏資料）



PL.103　大野台遺跡Ｄ地点の石器 中央の長さ12.4cm
（故大浦久雄氏資料）



PL.104　大野台遺跡Ａ地点の石器
左右 16.2cm
（故大浦久雄氏資料）



PL.105　大野台遺跡Ｄ地点の石器（故大浦久雄氏資料）

Ⅳ　ま　と　め

昭和57・58両年度にわたって実施した大野台遺跡の調査は，凡例および「Ⅳ．大野台遺跡Ｅ地点の発見と昭和57・58年度調査の目的」の項で述べたごとく，遺跡の規模等を確認して，保存方策を検討する基本資料作りが主目的であった。したがって，通常の発掘調査の場合と異なり，遺構を最終段階まで発掘するに至らず「靴下掻痒」の感がある調査となった。抽出的に細部の発掘調査を実施したのは，Ａ地点（昭和38年発見）に残された１基と，Ｅ地点（本報の調査）の第14号遺構（支石墓）のみである。

細部の発掘調査は，遺跡の保存が決定して後に計画される環境整備事業のなかで実施される予定であり，調査の「まとめ」もその折に譲るべきところが多いが，一応，中間報告の意味で，本項をおこすことにした。

本報で扱った調査地点は，昭和38・39年に，工事に際して発見されたＡ・Ｂの２地点と，昭和56年に発見されたＥ地点であるが，Ｂ地点は完滅の状態が確認されたため，結果的にはＡ地点とＥ地点が調査された。

１．遺構の種類と規模・方位

大野台遺跡で，出土等が確認できる遺構の総数は，Ａ地点20基，Ｂ地点４基，Ｃ地点９基，Ｅ地点38基であり，旧状は総数71基を数えることができる。このなかで現存するのは，Ａ地点１基，Ｂ地点０，Ｃ地点８基（１基は甕棺，本報ではＣ地点９号として扱う），Ｅ地点37基（第１号遺構は発見時に損壊），計46基である。これらの概要は，第４・５表のとおりである。

第4表　大野台遺跡A・C地点遺構一覧表

A 地 点 遺 構 一 覧 表

遺構番号	上部構造			下部構造				遺物	備考
	撑石	支石	石材	形状	長軸・短軸 cm	長軸方向	石材		
1	—	—	—	石棺	？・33	N82°N	玄武岩	—	水田畦畔に本号のみ遺存。

C 地 点 遺 構 一 覧 表

遺構番号	上部構造			下部構造				遺物	備考
	撑石	支石	石材	形状	長さ;幅西東;深さ	長軸方向	石材		
1	ナシ	ナシ	—	石材	58；50・49；46	W28°S	玄武岩		
2	〃	〃	—	〃	69；50・30；47	W29°N	〃		
3	〃	〃	—	〃	49；32・38；45	W 7°S	〃		
4	〃	〃	—	〃	74；39・38；$\frac{45}{38}$	W20°N	〃		
5	〃	〃	—	〃	78；44・50；$\frac{52}{45}$	N70°W	〃		
6	〃	〃	—	〃	89；35・28；$\frac{43}{42}$	N74°W	〃	夜臼式土器（棺内）	
7	〃	〃	—	〃	76；48・45；$\frac{44}{62}$	E17°S	〃		
8	〃	〃	—	〃	96；46・49；39	E 2°S	〃		
9	〃	〃	—	単甕	推定高45 推定口径35cm	W 2°S	—		報告書ではNoは付されていない

※1．本表は、小田富士雄「大野台遺跡」―縄文晩期墳墓群の調査―大野台調査団1974により作成した。
※2．本地点の近くに，撑石と思われる巨石があるが，本表にあげていない。

46基のうち，E地点の第36号は弥生時代後期の祭祀遺構と考えられ，同地点第33号は積石墓状の遺構であり，他の44基は支石墓ないし，その下部遺構である。

支石墓および，その下部遺構のなかには，存在のみ確認しているものも含まれるので，以下の記述と数量については異同があるが，下部構造別に見れば，

○土壙墓　E地点14・35号（？）
○甕棺墓　C　〃　9号
○石棺墓　A　〃　1号
　　C　〃　1～8号
　　E　〃　1～11・16～32・34・37・38号

となる。

まず，**土壙墓**について見てみよう。

E地点の第14号は，抽出的に完掘したものであるが，扁平な撑石と5個の支石を持っている。下部構造は，70×65×深さ48センチメートルの土壙墓で，底床に小礫を配している。土壙の上面には蓋石は認められず，その痕跡も認めることができない。本来，なんらの蓋もなくて，撑

第5表　大野台遺跡E地点遺構一覧表

遺構	上部構造			下部構造				遺物	備考
番号	撑石	支石	石材	形状	長軸・短軸cm	長軸方向	石材		
1	ナシ	ナシ	——	石棺	78・42	不明	玄武岩		遺跡発見時に損壊
2	平面観三角形 224×139×55	5+α	玄武岩	〃	〃	〃	〃		未発掘
3	ナシ	ナシ	——	〃	75・50	N74°W	〃		内部未発掘
4	〃	6	玄武岩	石棺（6角形？）	？	N81°W	〃		〃
5	〃	ナシ	——	石棺	106・38	N52°E	〃		〃
6	〃	〃	玄武岩	石棺（6角形？）	？・53	N79°W	〃		〃
7	〃	〃	〃	石棺	91・48	N28°W	〃		〃
8	〃	〃	〃	〃	80・？	N77°E	〃		〃
9	〃	〃	〃	〃	？	W17°S	〃		〃
10	〃	1	〃	〃	95・43	N56°W	〃	土器片黒曜石（流れこみか）	〃
11	〃	ナシ	——	〃	85・63	S74°E	〃		〃
12	楕円形 152×132×28	6	玄武岩	不明	不明	不明	〃		〃
13	円形 135×125×30	3+α	〃	不明	〃	〃	不明		未発掘29号（石棺）の撑石か
14	楕円形 167×115×15	5	〃	土壙	70・65・深さ48	N85°E	——	黒曜石剝片 土器小片（土壙内）	土壙底に径10cm程度の礫群あり。撑石二つに割れている。
15	円形 径 147	不明	〃	28号石棺の撑石か		不明	玄武岩		未発掘28号（石棺）の撑石か
16	ナシ	ナシ	〃	石棺	不明	N43°E	〃		内部未発掘
17	〃	1	〃	〃	？・33	N36°E	〃		〃
18	〃	ナシ	——	〃	？・34	N89°E	〃		〃
19	〃	〃	——	〃	98・43	W 7°S	〃		〃
20	〃	1？	玄武岩	〃	94・47	N29°W	〃	チャート原礫1（棺内）	〃
21	〃	2	〃	〃	不明	不明	〃		〃
22	〃	2	〃	〃	〃	〃	〃	カメ形土器が，棺材の上にあった	〃
23	〃	ナシ	——	〃	？・50	N25°W	〃		〃
24	〃	〃	——	〃	87・54	N78°E	〃		〃
25	〃	〃	——	〃	？・57	N83°E	〃		〃
26	〃	〃	——	〃	？・49	N69°E	〃		〃
27	〃	〃	——	〃	大部分が樹の根の下に入っていて不明		〃		〃
28	〃	〃	——	〃	95・54	N65°E	〃		15号（撑石）の下部構造か。内部未発掘
29	〃	〃	——	〃	樹の根の下にあり細部不明		〃		内部未発掘。13号（撑石）の下部構造か
30	〃	〃	——	〃	不明	N81°W	〃		内部未発掘
31	〃	〃	——	石棺（6角形）	？・50	N55°W	〃		〃
32	〃	〃	——	石棺	35・17	N84°W	〃		〃
33	〃	〃	——	積石墓？	————	——	——	石錘？1 土器底部（積石内）	〃
34	〃	〃	——	石棺	80・35	N63°W	玄武岩		〃
35	〃	2	玄武岩	土壙？	80・63	不明	——		〃
36	祭祀遺構か		〃	土壙中に土器片および広形銅矛ふくろ部あり					〃
37	ナシ	ナシ	——	石棺	樹根下にあり細部不明		玄武岩		〃
38	〃	〃	——	〃	同上		〃		〃

石が蓋を兼ねていたとも考えられるが，土壙上面と撑石の間には20センチメートルに近い空間があって，全くの無蓋であったとは考え難い。とすれば，石材以外の蓋材（たとえば木蓋など）による土壙の被覆も可能性を留保しておく必要があろう。E地点G－7区の西北隅で検出した第35号は，撑石を失っているが，支石2（＋α）を残しており，支石墓の下部構造であることは確実であるが，土壙墓であるか甕棺墓であるか判然としない。いずれにしても第14号支石墓の場合と同様，本来無蓋であったか，他の被覆材（木蓋等）であったかの疑問が残っている。

次に，**石棺墓の石材の組み方**について見てみよう。小口材と側壁材の組み方によって，第6表のように分けることができる（この場合，側壁材枚数，棺身規模はさておく）。

Ⅰ類　石棺平面形の基本とも考えられるもので最も数が多い。同表によると原山第3支石墓群においても同様のことが指摘できる。

Ⅱ類　片方の小口材を側壁材で挟む形になるもの（a）で，片側の側壁材を小口材で挟む例（b）はこの類形かもしれない。

Ⅲ類　片方の小口材を側壁材の内側につけるもので，一方の小口材が外側に出るもの（a）と，小口材を側壁材で挟むもの（b）がある。

Ⅳ類　平面観が四角以上の多角形となるもの（以下多角形棺という）。

これらの分類にしたがえば，最も基本的は形状は〓形であり，大野台遺跡の場合，全体の58％を占める。Ⅱ・Ⅲ類は，棺身の規模がⅠ類と差異が認められないので，石材規模の都合による単なる形状差であるか，内容的差異であるか断じ難い。Ⅳ類は，Ⅰ・Ⅲ類と異なり，少例である。松浦市栢ノ木遺跡[註1]第2号（石棺　弥生前期後半），原山第3支石墓群[註2]106号も類例である。

また同表によれば，時期的に並行すると考えられる大野台遺跡C地点と原山第3支石墓群，さらに小川内支石墓群の場合，Ⅰ類とⅢa類がほぼ等しい数量であること，大野台遺跡E地点の場合はⅠ類のみが最多数であることに気付く。このことは，単に数字上の符合であるのか，時期差であるのか，検討の余地があろう。

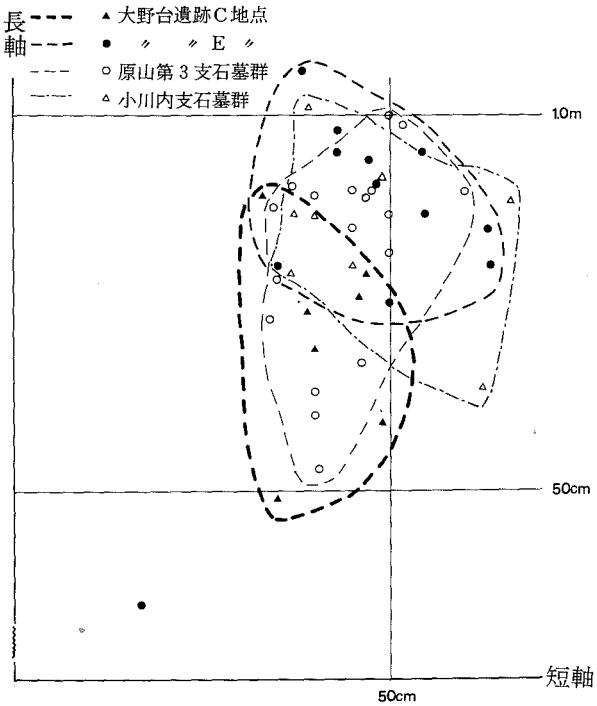
石棺の規模について見てみよう。第79図は，石棺の内法を長軸と短軸長とによって示したものである。大野台遺跡C地点の7基については，長軸で90センチメートルどまり，短軸上で60センチメートル以下にとどまり，深さがある。E地点の遺構の場合，長軸・短軸とも大きなものがあり，1メートルを越える例（5号）もある。原山第3支石墓群の規模は，大野台遺跡C地点に近い内法量である。鹿町町の東隣にある江迎町小川内支石墓群[註3]8例を見ると，大野台遺跡C地点・原山第3支石墓群よりも，大野台遺跡E地点に近い内法量を示している。

かかる内法量の差は，支石墓の新旧関係をある程度示すものと考えられる。こうしてみると，

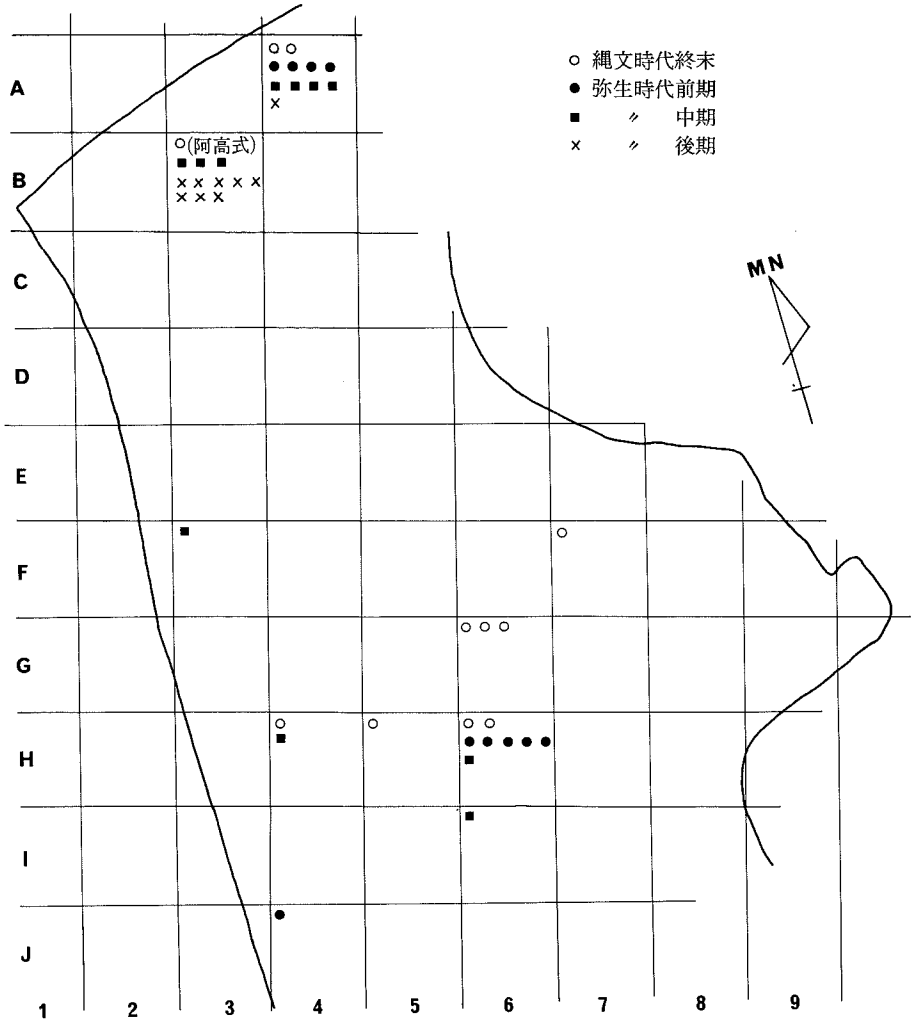
類形		形状	大野台遺跡A地点	同 C地点	同 E地点	原山第3支石墓群	小川内支石墓群
Ⅰ			1?	2.5.6	3.5.10.11.16.17.19.28.32.34	104.101.43.40.37.29.20.5?	5.7
Ⅱ	a			1	20	9.6	3
	b				7	30	
Ⅲ	a			3.4.7		41?.31.24.25.21.19	2.6
	b					39	
Ⅳ	a				4.31	106	
	b				24.25		

第6表　支石墓石棺形態分類

〔注〕大野台遺跡E地点については，蓋石が失われていて，構造が判明しているもののみについてあげた。



第79図　石棺法量（長・短軸）計測図

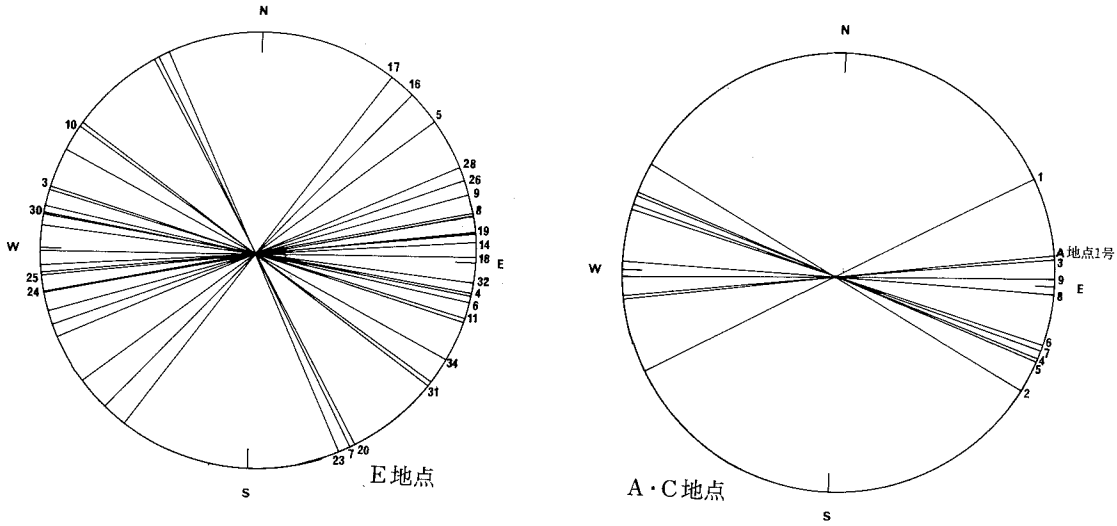


第80図　大野台遺跡Ｅ地点土器出土分布図

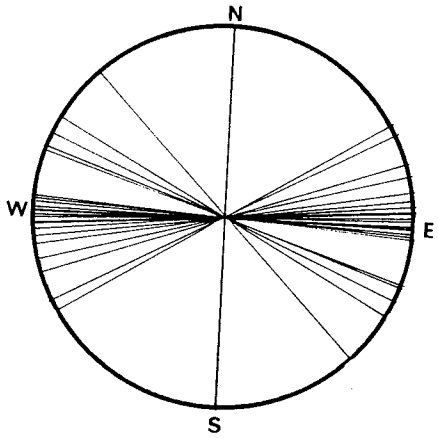
大野台遺跡の各支石墓群は，Ｃ地点よりも，Ｅ地点の方が後出する可能性がある。このことは，第80図の土器の出土分布図でみると，Ｃ地点が悉く夜臼式土器で占められるのに比して，Ｅ地点における弥生式土器の出土量が多いことと関連すると考えられる。

また，Ｃ地点とＥ地点の中間に位置するＢ地点においては，「四角な石棺であった」とする関係者の記憶がある。Ａ地点については基数以外には不明な点が多いが，弥生時代前期の壺と石庖丁が出土した可能性がある。これらの記憶が正確であるとすれば，Ｃ・Ｂ地点がより古く（夜臼期），Ａ・Ｅ地点はやや後出の遺構群となる。

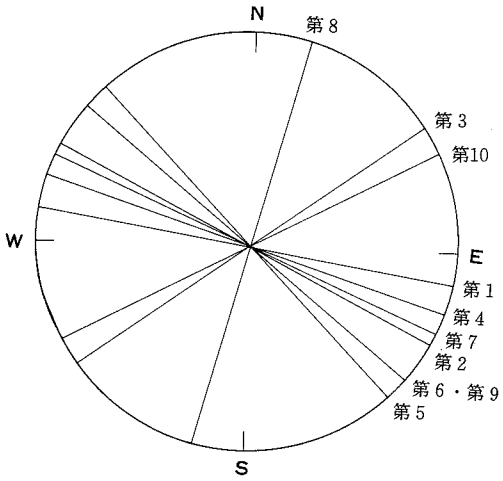
次に，各**遺構の長軸の方位**について見てみよう。第81図に示したとおりであるが支石墓の石棺の場合，後出の長大化した石棺の場合と異なり，側壁材間の間隔によって頭位を読みとることは困難であり，本図は頭位方向を意味していない。



第81図　大野台遺跡支石墓の主軸方向



第82図　原山第３支石墓群の主軸方向



第83図　小川内支石墓群の主軸方向

大野台遺跡Ｃ地点の長軸方向は，原山第３支石墓群（第82図）と似て，東西方向に近いものが多いが，大野台遺跡Ｅ地点と小川内支石墓群（第83図）の場合は，いくらか長軸方向の分布にバラツキが見られる。このことは，初期の支石墓にあっては，方位に関する意識が強かった

ものが，徐々に薄れる傾向を示すものか，興味深い。長崎県中央部にある諫早，大村両市において，多良岳山麓丘陵末端部に長大化した古墳時代初期の石棺群遺跡が多いが，傾斜地の等高線に沿って構築されており，方位の意識を読みとることは困難である。傾斜地の等高線に沿って構築するのは，長大な石棺の場合，技術的困難のため，余儀なくされたもので，方位の意識の有無とは無関係とも考えられるが，即物的に遺構を見ると，石棺の長大化とともに方位の意識は薄れているととれる。

2．大野台遺跡の構成

大野台遺跡の墓地群は，大きくA・B・C・Eの4群に分かれている。時期的には，遺構の規模・形状等から，最も低標高域（52メートル）にあるC地点が，高標高域（61～65メートル）のE地点よりも古く位置づけられることも指摘したが，これは必ずしもC地点構築の後でE地点の墓地が構築されたという時間的な前後を意味するものでない。E地点は下部構造の上でもC地点の規模・構造と基本的変化をもつものでなく，時間的にはある時期併行しながら営まれたと考えられるのである。C地点の遺構が夜臼期の古い時期の土器に限って出土していること，墓域が9基を乗せる限度一杯の地形であることは，C地点が，ごく限られた一時期に営まれ，ある時期並行して他の地点（A・B・E）の墓地が営まれたことを示している。特にE地点の場合は，他の3地点（A・B・C）に比して墓域にしても広い地形を有しており，基数も圧倒的に多い。このことは，時期的には，他の地点よりも長い期間そして多数の墳墓を許容し得る地形的条件があったことを意味していよう。つまり，各地点の墓地（単位集団の墓地）は少数のまとまりを持った血縁集団の墓地であった可能性がある。そうしてみると，C地点（9基），B地点（4基），A地点（20基），E地点（37基）の墓地群の基数の差は，墓地が営まれた期間の長さとともに，中心的な集団がE地点であったことになる可能性がある。

さらに，E地点についてみれば，A—4，B—3～5区の集団，I—4・5，J—4・5区の集団とF—7，G—5～7，H—5～7，I—6区の3集団に分かれている。このように見てくると，大野台遺跡の墓地（集団）はA・B・C・EI～Ⅲの6墓地（集団）ということになる。

これらを各墓地単位毎に遺構をみると，規模・形状などに差異はない。このことは，特定墓の存在を意味せず，階層未分化の状態にあったと解釈できよう。

北隣の田平町里田原遺跡[註4]の支石墓を見ると，現在2群3基であるが，もとは3群7基が存していたことが知られる。また，諫早市風観岳支石墓群[註5]でも3支群が指摘され，南高来郡北有馬町の原山支石墓群[註6]では3地点（第1～3）6支群の存在が知られている。

長崎県には，県北地方である北松浦郡だけでも，田平町里田原遺跡・鹿町町の本遺跡・隣接町の江迎町小川内支石墓群・佐々町狸山支石墓群・五島列島北端の宇久町（島）松原遺跡[註7]に支石墓があり，県南・県中央部にも4遺跡がある。日本西辺の地に離島を含めて9遺跡があるこ

と，縄文晩期後半から弥生前期初頭の遺跡があること，対馬・壱岐の地に支石墓がないこと，これら3点に加えて，五島列島白浜遺跡（福江島）では，縄文晩期終末や弥生前期の貝塚に片刃石器が出土するという事象を考えると，朝鮮半島から対馬・壱岐・唐津方面へという単純な新文化の流入経路のみでは把えきれないものがあるように見える。（第84図，第8表）

註1　正林　護「栢ノ木遺跡中間報告」松浦市教育委員会　1972

註2　正林　護・高野晋司「国指定史跡原山支石墓群環境整備事業報報告書」北有馬町教育委員会　1981

註3　坂田邦洋「長崎県・小川内支石墓発掘調査報告」古文化談叢第5集　1978

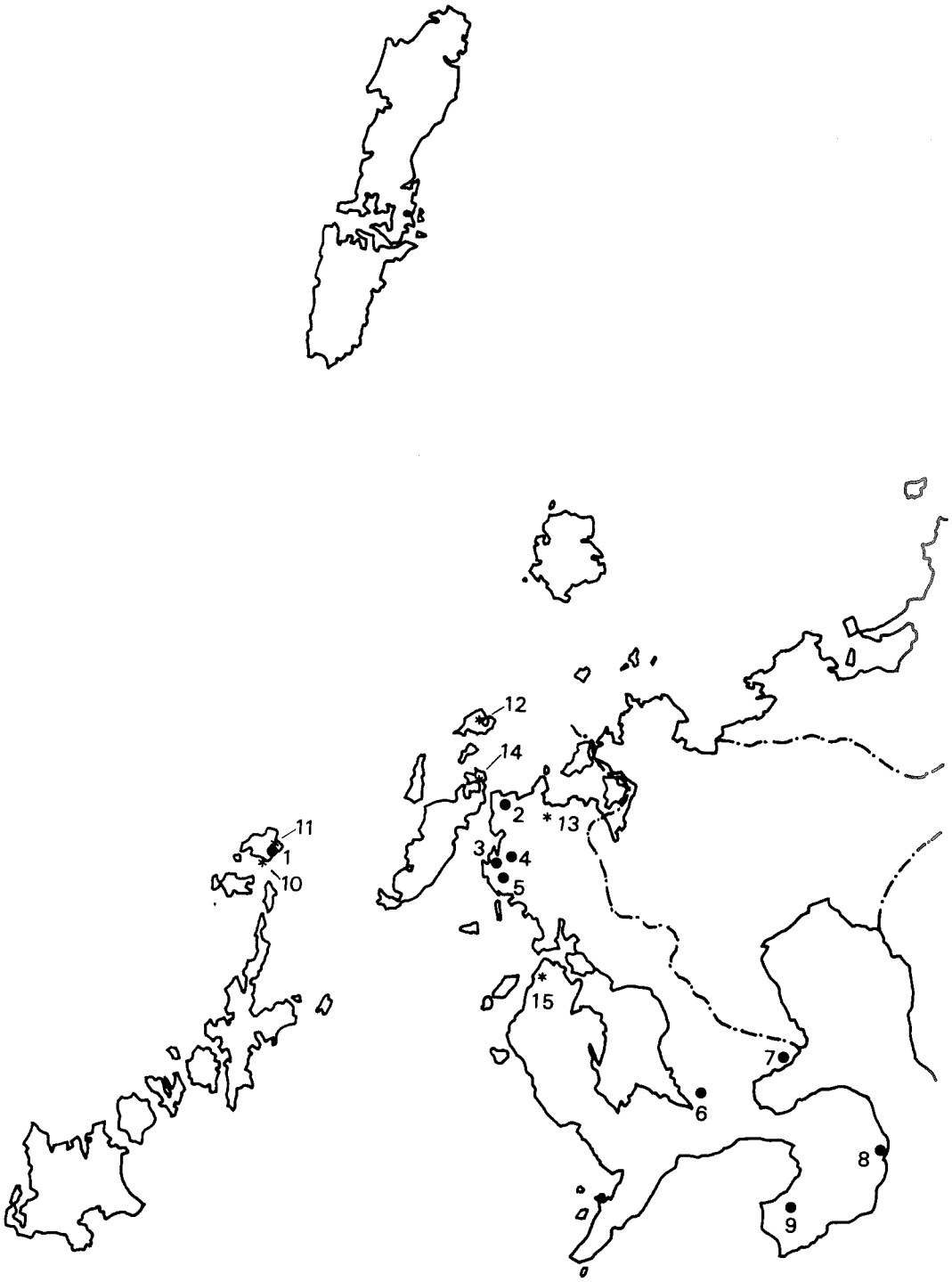
註4　正林　護・田川　肇「里田原遺跡略報Ⅱ」長崎県教育委員会　1973

註5　田川　肇他「風観岳支石墓群」諫早市教育委員会　1976

註6　註2に同じ

註7　宮崎貴夫他「宇久松原遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅵ　長崎県教育委員会　1983

註8　安楽　勉・正林　護「白浜貝塚」福江市教育委員会　1980



第84図　長崎県内支石墓遺跡所在地

第7表　長崎県内支石墓遺跡所在地（昭和58年8月現在）

番号	全国遺跡地図番号	遺跡名	所在地	調査	概要	主要文献	備考
1	長崎 8—28	松原遺跡	北松浦郡宇久町平郷 2516・2519	昭和43		小田富士雄「五島列島の弥生文化」総説編 昭和45年	
2	〃 19-110	里田原遺跡 1	〃 田平町里免271	未調査	2基現存、下部構造不明	里田原遺跡展図録 長崎県教育委員会 昭和50年他	
		〃 2	〃 〃 〃 232	〃	1〃 〃 〃 〃 石棺、支石なし(?)		
		〃 3	〃 〃 〃 145-2	〃	4基あったが現存せず，下部構造は石棺であったらしい。		
3	〃 22—21	大野台遺跡 A	〃 鹿町町深江免 字北平755-2	〃 一部58	昭和38年，耕地造成に際して20基の石棺が出土。現存1基。石剣・石包丁出土？	一部本報	
	22	〃 B	〃 〃 〃 字南ノ股833-1	損壊	昭和39年，ミカン園造成時に4基出土。撑石ありという。		
	23	〃 C	〃 〃 〃 829	昭和41	石棺7，甕棺1(凸帯文土器)，周辺に撑石状巨石あり。	小田富士雄「大野台遺跡」大野台遺跡調査団 昭和49年	町指定
		〃 E	〃 〃 〃 字北平635-1-634	昭和57～58	総数36基（石棺 土壙墓 積石墓1)。撑石を有するもの5基。土器石包丁，片刃石器，銅矛	本報	
4	〃 22—26	小川内遺跡	〃 江迎町小川内免 字走落765-1	昭和45	箱式棺を下部構造とする支石墓	坂田邦洋「長崎県・小川内支石墓発掘調査報告」古文化談叢5 昭和53年	
5	〃 22—71	狸山支石墓群	〃 佐々町松瀬免 字松瀬116	昭和32	7基現存，凸帯文土器，鰹節形大珠	森貞次郎「長崎県狸山支石墓」九州孝古学5・6 昭和33年	県指定
6	〃 28—64	風観岳〃	諫早市破籠井町1009他 大村市中里郷字干部491他	昭和50	3群35基	田川肇他「風観岳支石墓群調査報告書」諫早市教育委員会 昭和51年	
7	〃 28—12	井崎〃	北高来郡小長井町	未調査	7基あったといわれ，撑石2が現存。副葬品（板付Ⅱ壺）が現存する。	正林護「小長井町の先史・古代」小長井町郷土誌 昭和51年	藤山達祥氏保存
8	〃 31—26	景華園〃	島原市三会町	〃	巨大撑石2があり，元禄12年(1700)に，下から銅剣2本が出たという(深溝世紀)	古田正隆「三会中野景華園遺跡」	
9	〃 30—81	原山第1支石墓群	南高来郡北有馬町	〃	数基あったといわれるが，現在，撑石1と遺物が残っている。	森貞次郎「島原半島・原山遺跡」九州孝古学10 昭和35年他	国指定
	〃 30—82	〃 第2 〃	〃 〃 大字坂上下名字原の尻河	昭和	6基現存		
	〃 30—83	〃 第3 〃	〃 〃 〃 〃 字坂上下名	昭和	54基現存		
※10		神ノ崎遺跡	北松浦郡小値賀町黒島郷 字庭の畑1-2	昭和58	弥生・古墳時代石棺とともに，撑石状巨石あり。	報文近刊	
※11		殿寺〃	〃 〃 前方郷 3844-1	昭和	石棺の形状から，支石墓の可能性指摘あり弥生前期カメ棺3がある。	正林護「殿寺遺跡」埋蔵文化財調査集報Ⅲ 長崎県教委 昭和55年	
※12		大原〃	〃 大島村大根坂郷大原	未調査	水田中に撑石状巨石，周辺に石棺。土器片の発見があった。	昭和58年分布調査による	
※13	〃 22—40	栢ノ木〃	松浦市志佐町小久保免	昭和	弥生前期カメ棺・石棺墓。周辺に撑石状巨石あり。	正林護「栢ノ木遺跡略報」松浦市教育委員会 昭和47年	
※14		田助遺跡	平戸市田助町	未調査	撑石状巨石2あり		
※15		天久保〃	西彼杵郡西海町天久保	〃	同上 〃 2 〃	井手寿謙氏教示	

※は、未確認

付　大野台遺跡墳墓群の石材産地（予察）

大野台遺跡には，旧状４群71基の墳墓群があり，３群47基が現存する。47基の大半は方形ないし長方形の平面プランをもつ箱式石棺であるが，四角以上の多角形のプランをもつものもある。これらのうち，上部遺構である撑石を有するものは５基（Ｅ地点２・12～15号）であるが，撑石の現存はともかく，支石を残しているものも多く，石棺の規模も方形もしくは長軸が１メートル以下のもので，支石墓群として認識することが可能である。

支石墓の撑石についてみると，Ｅ地点の５基のうち，４基と，Ｃ地点の遺構群の北側斜面にある巨石（撑石と考えられる）は，円形ないし楕円形の平面観を有し，Ｅ地点第14号の撑石はより扁平である。Ｅ地点第２号の撑石は不整三角形の平面観を有する。これら撑石群は人工の痕跡は認められず，盤状の自然石が選択されているが，すべて玄武岩である。

一方，下部構造が石棺である遺構の石材についてみると，材質は撑石と同じく玄武岩の板状石を使用している。これら石棺材は節理面に添って剝離した板状石材であり，したがって厚さは不整一である。撑石同様に人工なしに用いられたものもあるが，石棺構築時に整形されたものもあり，遺構の直接周辺に石材の残欠を認めるものがある。これらの石棺材も撑石の場合と同様，大野台遺跡の直接周辺に原産地はない。

撑石ないし石棺材となる石材を鹿町町内に求めれば，２箇所を挙げ得る。１箇所は，鹿町町北西部にある大西山（225メートル）の西斜面一帯であり，宮田ヶ原遺跡（第３図12）の西側にあたる。当該地は急斜面に径２～３メートル大の玄武岩の盤状石材が露出し，石棺材に好適な扁平石も多く見られる，現地一帯の斜面には植林のための石垣が営まれ，多くは，支石墓の石材と同じ石材で構築されている。

いま１箇所は，鹿町町の南辺，小佐々町との町界にある大観山（373メートル）西斜面である。現地は町有林となっており，径２～４メートル程度の盤状玄武岩が多数密集し，あたかも支石墓の群集墓地の観を呈している。一時期，土地の人々が，支石墓と誤認した点も首肯される。

これらの支石墓用石材に好適な玄武岩材の供給参考他はいずれも高標高域にあたっているが地層的に見て妥当な場所と考えられる。

鹿町町一帯の地層は「八ノ久保砂礫層」を境界にして上下に分かれ，下層は松浦三尺層を含む溶岩の砂岩であり，上部は玄武岩層である。上部溶岩の玄武岩は，柱状の節理を各所において見せており，鹿町町内においても，前述の大西山および大観山付近および冷水嶽一帯に観察される。この柱状節理はしばしば「玉葱状の構造礫」となるが，大野台支石墓群の石材は，この玄武岩の玉葱状構造礫の所産であると考えられる。北松浦郡一帯には，このような玉葱状の

構造礫を生ずる柱状節理が各所においてみられ，支石墓の撑石および石棺材の供給には事欠かない。鹿町町の東隣，江迎町にある小川内支石墓群[註1]（全国遺跡地図　長崎22—26　註　同図においては注連張遺跡　祭祀跡として収録されている），東南隣の佐々町狸山支石墓群[註2]（同図22—71），田平町里田原遺跡[註3]（同図19—109）など，北松浦郡には支石墓遺跡が多いが，ほとんど「玉葱状の構造礫」が使用されているが，構造礫自体は各所にあるから，特定の供給地を考えることは困難である。しかしながら，大野台支石墓群の石材供給地を考えた場合，鹿町町外からの搬入は，江迎川渡渉の必要があり，困難と考えられる。このことからして，大野台支石墓群の石材は，大西山もしくは大観山一帯の礫が運ばれたと考えるのが妥当と考えられる。因みに大西山から大野台遺跡までは直距離にして2キロメートル余，大観山からは直距離にして7キロメートルを計る。いずれも，運搬途中の地形は険阻であるが，大西山から運ばれた可能性を考えておく必要がある。

註1　坂田邦洋「長崎県・小川内支石墓発掘調査報告」古文化談叢第5集1978

註2　森貞次郎「長崎県狸山支石墓」九州考古学5・6　昭和33年

註3　長崎県教育委員会「里田原遺跡展図録」昭和50年

あ と が き

昭和56年の春，大野台E地点発見の報に接してから，丸2年が経過した。昭和41年のC地点の調査からかぞえれば，本報は18年目ということになる。E地点の調査に足かけ2年間，日数にしてみれば40日ほど，たづさわって感じたのは，これほどの遺跡が，昨今の御時勢の中で，よくぞ遺(のこ)った，ということであった。土地所有者の金崎与吉・金崎伊勢夫両氏の気付きと，鹿町町教育長小松屋勲氏の即応があってこそ，この遺跡の今日がある，と思うのである。

調査に際しては，大野地区の皆さんの御協力を得たが，まことにおおらかな人々であって，その馬力と御交誼は忘れ得ない。E地点の遺構をつつむシイ・カシの巨木は，遺跡の環境として最高であるが，この環境を守ってこられたのも大野地区の皆さんであって，くったくない笑い声が樹林から，調査全期間にわたって響いていたことを記憶している。

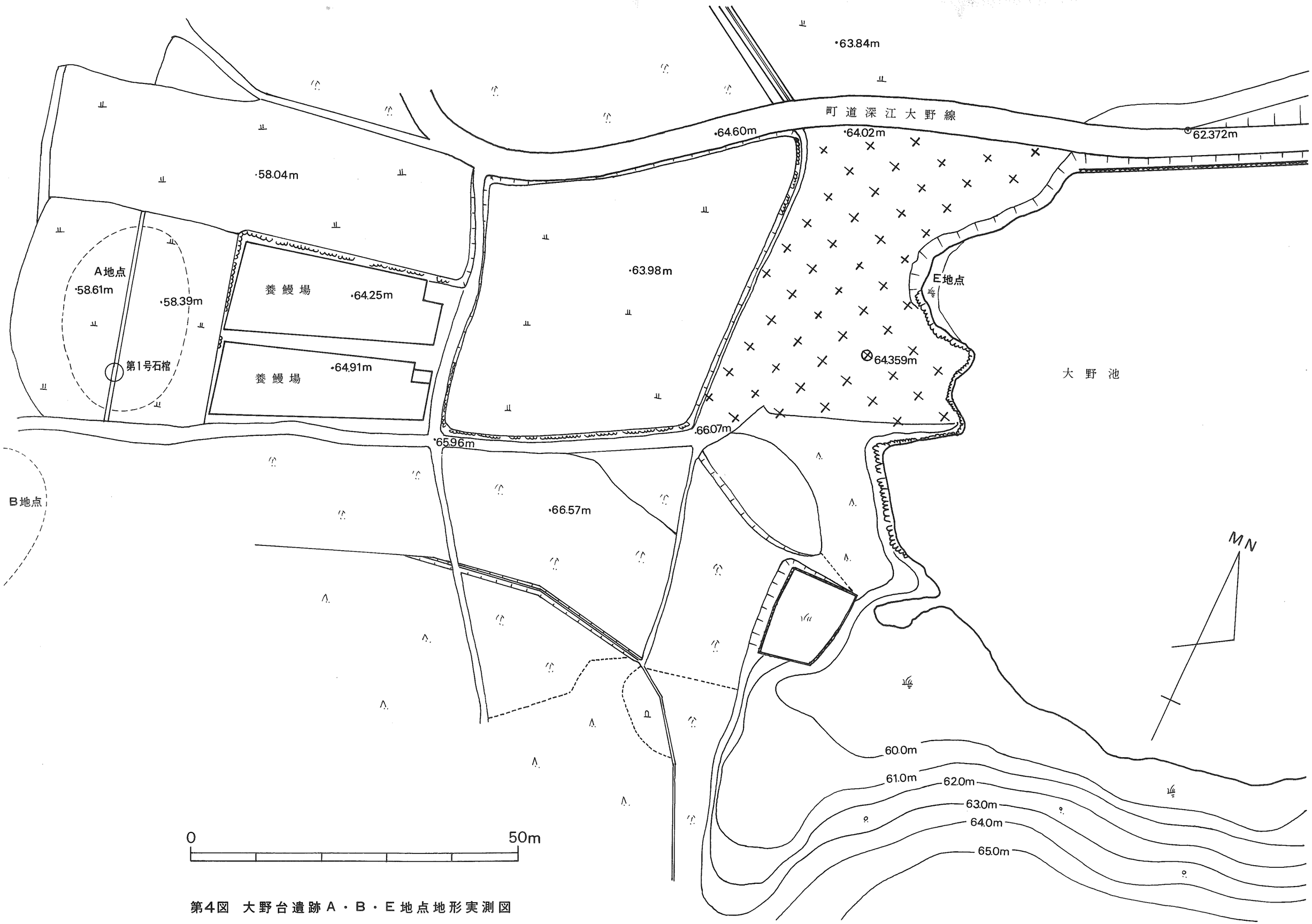
調査の計画から実施，さらには整理作業と報文原稿の執筆まで，正林と村川逸朗，松尾泰子の2人の若者がたづさわったが，特に学卒間もない松尾君は，女性の身でよく重責にたえてくれた。彼女は，本報刊行直後に嫁ぐ身であるが，この労苦と喜びの体験を新家庭建設に活かしてほしいと願っている。

話しはさかのぼるが，大野台遺跡を含めた鹿町町の遺跡研究にとって，前町長大浦久雄氏(故人)の業績を忘れることはできない。昭和30年代から昭和40年のC地点調査まで，営々として研究を続けられたわけであるが，本報を泉下でお読みいただけるものと確信している。

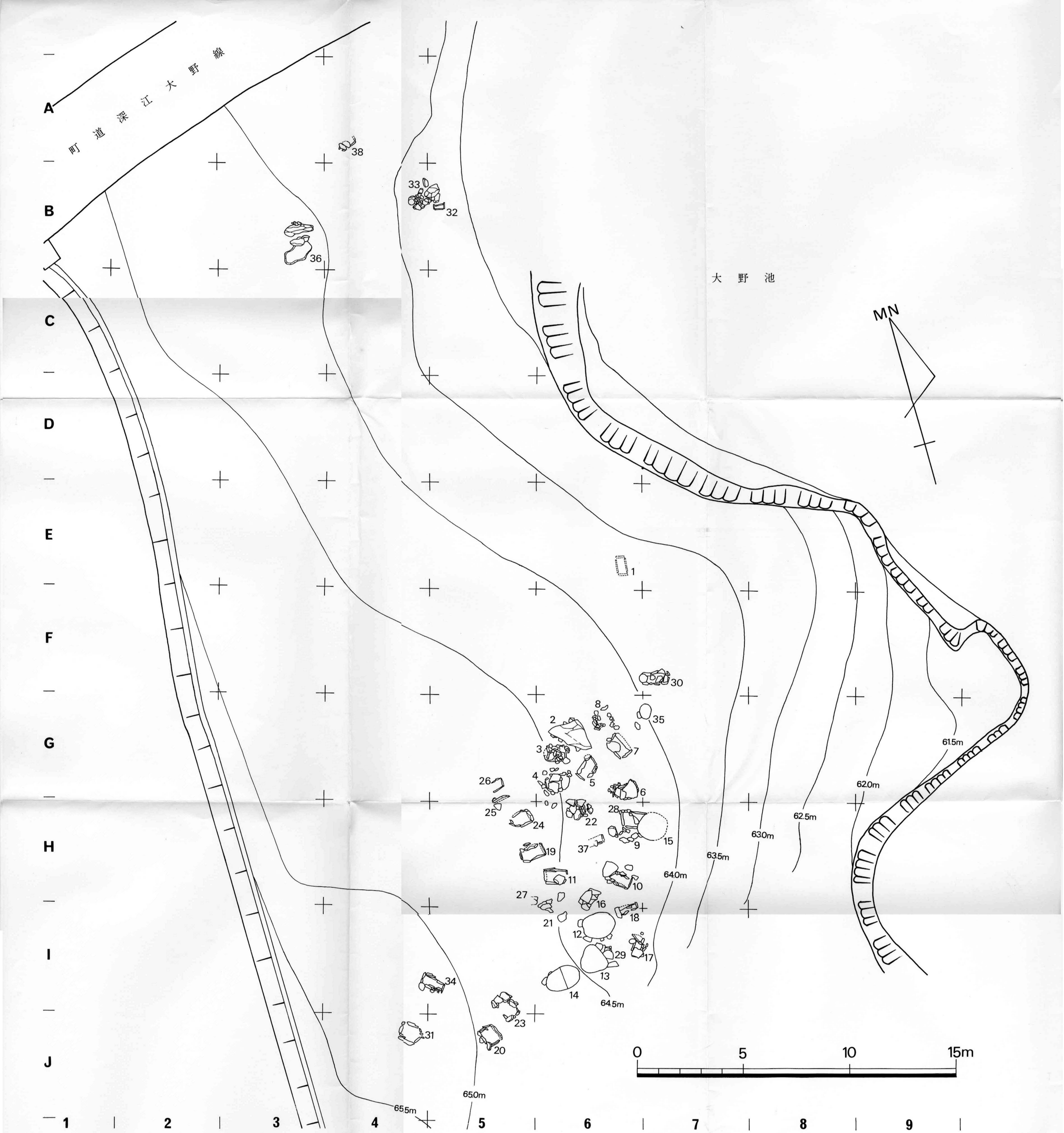
大野台遺跡は，今後，史跡指定等の手だてを経て永く残されることになるだろうが，本報はその資料の一つになるわけである。また，確認調査の報文ながら，本報が少しでも学評にたえ得るとすれば，大野地区の皆さんの理解と，鹿町町長川尻幸介氏ほか町御当局の全面的なバックアップ，さらに調査の計画立案から煩瑣な経理事務を担当された鹿町町教育委員会の方々の労苦，これら三本の柱に本報が支えられているからであろう。

「文化財の保護」，この言葉を言うのは，心の時代，地方の時代という掛け声とともに言うは易く，行うは難い。遠祖の遺産を後世に伝えるという作業が，文字どおり，地元の人々と行政と研究者が一体となっての共同作業によらねばならないという認識の拡大を願うものである。

1983.10.1（正林）



第4図　大野台遺跡A・B・E地点地形実測図



第5図 大野台遺跡E地点の地形および遺構出土状況図

大野台遺跡

昭和58年11月1日

発　行　鹿町町教育委員会
長崎県北松浦郡鹿町町
下歌ヶ浦免8番地
電話　(095677)－5251

印　刷　日本紙工印刷
長崎市興善町2－6
電話　(0958) 26－3286